
筑波大学 地域研究

2015年3月

第36号

目 次

条件付き現金給付プログラムの成果と教育政策 —メキシコのPROGRESA/OPORTUNIDADESプログラムの評価— …… 箕輪 真理	1
“O, I have read it; it is heresy” Giordano Bruno’s <i>Gli Furori Heroici</i> as a Major Source for <i>Twelfth Night</i> …………… Marianne KIMURA	19
日米映画に描かれた国際結婚 —日本人妻とアメリカ人夫— …………… 今泉 容子	39
The Economics of Pan Africanism: A Political Economy Perspective …………… MOGES Abu Girma	55
機織りと村落開発 —マレーシア・サラワク州村落地におけるイバンの生業からの考察— …… 長谷川 悟郎	73
陣中旗の神学 —真理と十字架— …………… 秋山 学	91
Lost in Translation?: On Using Conversation Analysis to Examine Cross-Linguistic Data …… Cade BUSHNELL	107
The Poetic Imagination of <i>Shōjo Manga</i> : Ray Bradbury through Moto Hagio’s Eyes …………… Noriko HIRAISHI	127
複合的な現象としての情報社会（論） —「深さ」の情報社会（論）再構築に向けて— …………… 仲田 誠	139

AREA STUDIES Tsukuba

Vol.36

CONTENTS

Conditional Cash Transfer Program and Education Policy: Evaluation of PROGRESA/OPORTUNIDADES in Mexico	MINOWA Mari	1
“O, I have read it; it is heresy” Giordano Bruno’s <i>Gli Furori Heroici</i> as a Major Source for <i>Twelfth Night</i>	KIMURA Marianne	19
The International Marriage in Japanese and American Films: Japanese Wives and American Husbands	IMA-IZUMI Yoko	39
The Economics of Pan Africanism: A Political Economy Perspective	MOGES Abu Girma	55
Weaving and Development: A Study from the Livelihood of the Iban in Rural Sarawak, Malaysia ...	HASEGAWA Goro	73
Theology of the “Flag in the Camp of Amakusa-Shirō”: Truth and the Cross	AKIYAMA Manabu	91
Lost in Translation?: On Using Conversation Analysis to Examine Cross-Linguistic Data ...	BUSHNELL Cade	107
The Poetic Imagination of <i>Shōjo Manga</i> : Ray Bradbury through Moto Hagio’s Eyes	HIRAISHI Noriko	127
Information Society as Multidimensional Phenomenon Emerging from the Depth: Ontological and Critical Views on Information Society in the 21st Century	NAKADA Makoto	139

条件付き現金給付プログラムの成果と教育政策 —メキシコのPROGRESA/OPORTUNIDADESプログラムの評価—

Conditional Cash Transfer Program and Education Policy: Evaluation of PROGRESA/OPORTUNIDADES in Mexico

箕輪 真理
MINOWA Mari

Abstract

Latin American countries have made significant progress in recent years in expanding access to education. Many countries are close to achieving full enrollment at the primary level, and the promotion ratio to the secondary school has also grown. Empirical evidence indicates that PROGRESA/OPORTUNIDADES, a conditional cash transfer program initiated in 1997 in Mexico, has contributed to the expansion of access to education among the poor. While such evidence suggests that this education policy in Mexico points in the right direction, the country still suffers from persistent inequality in learning outcomes. An enhancement to the policy that places emphasis on improving the accountability of the supply-side of education will contribute to improved equalization of opportunities within the Mexican society.

Key Words : Conditional cash transfer, Education policy, Quality of education, Inequality, Mexico

キーワード：条件付き現金給付、教育政策、教育の質、格差、メキシコ

1. はじめに

ラテンアメリカ諸国における所得分配の不平等の背景には、植民地時代にさかのぼる歴史的要因があるが、現代に至るまで、そのような初期条件から作られてきた社会や経済の仕組み、政治制度が継続することにより、修正されることが著しく困難な課題であり続けている。何世代にもわたって貧困から抜け出せないできた社会的弱者にとって、質の高い教育を受ける機会を得てその能力を発揮できるようになることは、人道的に望ましいだけでなく、彼らが社会の一員として国や経済の発展に貢献するためにも、必要不可欠な重要政策課題のひとつである。ラテンアメリカ諸国の多くは中所得国として分類され、一人当たり平均所得から見れば、貧困削減が大きな政治課題であるべきレベルではない。しかし、分配の不平等によって根強く残る貧困は、依然として解決が困難な重要な課題であり続けている。こうした背景のなか、ラテンアメリカ地域にお

いて、貧困層への教育の機会拡大の重要性が認識されてから、すでに久しい。1990年代以降、各国政府は教育予算を拡大し、制度改革、カリキュラム改革など、教育へのアクセスや質の改善、教育における分配の不平等を是正するために、様々な努力を重ねて来た。そうした教育改革はどのような成果をもたらしたのか。

政策的な意味で「公平性」を考えると、それをどのように定義するかについて議論される必要がある。世界銀行の定義によれば、公平であるとは「生まれながらの条件（性別、人種、生まれた場所、家族背景など）や生まれてきた社会階層などによって、経済、社会、政治的な場面における個人やグループの機会や結果が決定されてしまわないこと」を求めるものとある（World Bank 2005）。さらに、教育における「公平性」とは、教育を受ける機会をもつこと（アクセス）の平等性と、その結果として得られる能力（結果）が平等であることの、二つのレベルの「公平性」を考えることができる。これまで、ラテンアメリカ各国政府は、教育「アクセス」の公平性については、大きな前進を遂げた一方、教育の「結果」の公平性については、いまだ大きな課題を抱えたままであると言える。その背景には、平均的な公的教育の質の低さがある。

本稿では、世代を越えた貧困の再生産を断ち切ることを目標にメキシコ政府が1997年から実施している条件付き現金給付プログラム「PROGRESA/OPORTUNIDADES」が、教育の機会拡大と公平性の確保にどのような成果をもたらしてきたのか、これまでの実証研究の結果をまとめ、メキシコにおいて現在進行中の新しい教育改革の意義と、今後の政策課題を検討することを目的としている。

第Ⅱ章では、ラテンアメリカ諸国における教育の分配の不平等と教育政策の変遷について概観する。第Ⅲ章では、メキシコの条件付き現金給付プログラム「PROGRESA/OPORTUNIDADES」について、その概要を紹介し、特に教育分野に関する施策を確認する。第Ⅳ章で、プログラムの評価について、これまでの実証研究の結果から導きだされる結論を示し、第Ⅴ章のまとめでは、所得分配の不平等、社会・経済機会の不平等を改善してメキシコがさらなる発展を実現するために残された課題について、教育政策の側面から考える。また、そうした文脈のなかで現政権が進めようとしている画期的な教育改革の意義についても考察する。

Ⅱ．ラテンアメリカにおける教育政策の変遷と教育の「公平性」¹

表1は、ラテンアメリカ諸国のひとりあたりGDPと、成人の平均就学年数を示す。所得レベルでは、ニカラグアの4,300ドルからチリの21,000ドルまで、大きな幅があり、平均就学年数も、ホンジュラスの5.5年から、アルゼンチン、チリなどの9.8年まで、ほぼ2倍の開きがある。同じラテンアメリカ地域でも、国によって発展の状況はかなり異なっている。表2では、所得分配と教育分配（就学年数）のジニ係数を示す。ニカラグアを除いて、全ての国で、教育分配のジニ係数は所得分配のそれより小さい。これらの数値から示唆されるのは、教育の分配においては所得レベルの格差よりはその不平等の度合いが低いということだが、見方を変えれば、教育の分配が改善された程度に対応した、相応の所得分配の改善が見られていないということでもある。

1 この章の議論は、Cox 2010に基づく。

表1 ラテンアメリカ諸国の一人あたりGDPと成人平均就学年数（2013年）

	一人あたりGDP (PPP 2011 international \$)	平均就学年数
アルゼンチン	18,200	9.8
ボリビア	5,749	9.2
ブラジル	14,551	7.2
チリ	21,468	9.8
コロンビア	11,892	7.1
コスタリカ	13,320	8.4
エクアドル	10,073	7.6
エルサルバドル	7,575	6.5
ホンジュラス	4,500	5.5
メキシコ	16,426	8.5
ニカラグア	4,328	6.5
パナマ	16,946	9.4
パラグアイ	7,342	7.7
ペルー	11,805	9.0
ウルグアイ	18,280	8.5
ベネズエラ	17,951	8.6

出典：http://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.PCAP.PP.CD

http://hdr.undp.org/en/content/mean-years-schooling-adults-years

1. 教育政策の変遷

以上で見たような国ごとの違いはあるものの、1990年代から2000年代の半ばにかけて、ラテンアメリカ諸国の教育政策には共通した方向性が見られる。1980年代の失われた10年の後、世界銀行や米州開発銀行などの国際機関によって経済の構造調整が促され、経済の自由化が進み、同時に、政治の民主化も進んだ。その結果、機会の平等、そしてそれを実現するための教育政策の重要性について、広く議論されることとなった。国際機関の指導のもと、各国政府は、教育支出の拡大と再配分、教育行政の地方分権化、特定のターゲットグループに焦点をあてた補償プログラムの実施、カリキュラム改革、教育成果の評価分析と説明責任の追求などの政策を進めることとなった。

1990年代から2000年代はじめにかけて、GDPに占める政府教育支出の割合は増え続け、地域平均では、1990年の2.7パーセントから2002年の4.3パーセントに拡大した。（最新のUNESCOデータを表2のコラム3に示す。）さらに各国は、教育支出の拡大とともに、予算配分を合理化し、地域ごとの配分の偏りをただすことで、教育の機会のより公平な分配を目指した。その結果、教育の機会は特に貧困地域において拡大し、所得レベル別の就学年数の格差は縮小している。

歴史的に遡ると、ラテンアメリカ諸国においては、19世紀の独立以降、公教育による国の統

表2 ラテンアメリカ諸国の所得と教育の分配（ジニ係数）および対GDP比公的教育支出

	所得分配 ^{*1} (2005～2010年)	教育分配 ^{*2} (1998～2001年)	公的教育支出対GDP比 ^{*3}
アルゼンチン	0.44	0.22	6.26
ボリビア	0.56	0.38	6.89
ブラジル	0.55	0.39	5.82
チリ	0.52	0.23	4.52
コロンビア	0.56	0.36	4.38
コスタリカ	0.51	0.30	6.28
エクアドル	0.49	0.33	4.36
エルサルバドル	0.48	0.45	3.42
グアテマラ	0.56	0.54	2.92
ホンジュラス	0.57	0.45	(na)
メキシコ	0.47	0.34	5.19
ニカラグア	0.40	0.49	4.57
パナマ	0.52	0.27	3.50
パラグアイ	0.52	0.35	(na)
ペルー	0.48	0.30	2.76
ウルグアイ	0.45	0.24	4.50
ベネズエラ	0.45	0.30	6.87

出典：^{*1} World Bank (2014) World Development Indicators (<http://wdi.worldbank.org/table/2.9>)

^{*2} World Bank (2005) World Development Report 2006

^{*3} UNESCO Institute (2014年8月更新データ)

一と新しいナショナルアイデンティティーの確立が求められた。中央政府が、統一された基準に基づく「模範的な」教育内容を一律に提供することが、公教育の役割であると認識され、学校建設、教材の整備と配布、教師の育成、カリキュラムの整備など、すべての側面において中央政府が、「法の下での平等」を基本理念として教育政策を遂行してきた。

しかし、1990年代はじめに、国連のラテンアメリカ経済社会委員会（ECLAC）と教育科学文化機関（UNESCO）は、ラテンアメリカ諸国の教育システムの現状を分析し、それまでの教育政策のあり方を大きく覆す提言をまとめた（ECLAC-UNESCO 1992）。そこでは、学校システムの運営が官僚的、硬直的で、新しい社会経済のニーズに対応できなくなっているとの分析に基づき、教育行政の分権化が提言され、学校の運営に自律性を持たせ、中央の教育省の影響力を大幅に削減する必要があるとされた。それ以降、教育政策は、同一性をもとめるのではなく、多様性を尊重した方向へと、大きな方向転換が図られることとなった。

世界銀行や米州開発銀行などは、この新しい教育政策を支持し、教育の分権化を進めるプロジェクトに積極的に資金を提供していった。教育の分権化が望ましい理由として、学校運営の効

率化、教育に関して様々な決定をするアクターが近くにいることで情報へのアクセスが改善し、より生徒たちのニーズにあった教育の実施が可能となること、政府とその下にある各アクターの説明責任が明確になることにより、既得権益による教育システムの乗っ取りを防ぐことができることなどが議論された（World Bank 2004）。

しかし、教育の分権化を推進する議論は、必ずしも教育の「公平性」を明確な目標として求めるものではなかった。分権化によって、「公平性」にどのような影響が及ぶかについては、相反する影響の相対的な大きさによって決まると考えられる。一方で、分権化による政策実施の効率化、利害関係者の関与の拡大と説明責任の強化によって、それまで声を政策に反映できなかった貧困層に力が与えられ、教育の機会拡大とその内容の改善が実現する可能性がある。他方、ラテンアメリカ諸国の社会や政治制度そのものに大きな不平等がある現状では、地方政府の行政執行能力にも大きな格差があり、政府が平等な土壌を築く能力においても問題があることから、上記のプラスの影響以上に、マイナスの影響によって、教育の公平性が阻まれる結果となる可能性は否定できなかった。しかし、分権化の議論のなかで、このようなマイナスの影響に関する懸念は、はっきりと取り上げられることなく、分権化政策は進んだ。

このような分権化の議論と同時期に、ヨーロッパやアメリカでは1960年代から進んでいた、特別のグループをターゲットとした補償プログラムの実施が、ラテンアメリカにおいても推進されるようになった。これは、「法の下に全ての国民は平等である」という原則から離れて、異なったグループの間の公平性を担保するためには、積極的な差別が必要であるという考え方への転換を意味するものである。これによって初めて、貧困層など特定のグループに対して特別の取り扱いをするプログラムが実施されることとなった。ラテンアメリカ各国で様々なプログラムが実施されたが、その目的は、高所得層と低所得層との間の不平等を是正することであり、すなわち教育の機会から閉め出されているグループに対して、教育を受ける権利を保障しようとするものであった。プログラムの戦略は、いくつかのタイプに分けられる。

- ・グループ間や地方間の予算配分を調整することで公平化を図る政策。
- ・貧困地域での教育アクセスの改善。学校建設や教員配置、テレビを使った通信教育（メキシコのTelesecundaria）、農村地域での教育機会の拡大（エルサルバドルのEDUCO）などの例があげられる。
- ・教科書、図書館、コンピュータなど、通常、高所得層の学校で使われる教材を低所得エリアの学校に重点的に配備する。メキシコ、コロンビア、アルゼンチン、チリなどで実施されている。
- ・貧困層家庭の教育支出負担を減らし、学校からの脱落を防ぐためのインセンティブの供与。メキシコのProgres/Oportunidades、ブラジルのBolsa Escola/Bolsa Familiaなどの、条件付き現金給付プログラムがその例である。

これらの政策の成果として、低所得層の教育機会は、アクセスの拡大とドロップアウト防止の両面で、確かな成果をあげていることが報告されている。どのような指標を使って「機会からの排除」を計測しても、1990年代以降、最も貧しいグループにおいて、相対的にいちばん大きい改

善が見られ、ほかのどの所得層よりも、新しい教育機会へのアクセスをより多く獲得している。次のセクションで、その成果を示すデータを紹介する。

2. 教育へのアクセスにおける公平性の拡大

1990年代以降、ラテンアメリカ地域における教育へのアクセスの拡大と分配の公平性は明らかに改善されている。教育の機会拡大が実現したことによって、アクセスと学校教育の就学年数については、特に貧しい層で大きな改善が見られた。表3では、小学校卒業の割合、高校卒業の割合を、年齢で区分した六つの世代ごとに示している。経済と教育レベルの発展度合いによって、ラテンアメリカ諸国を3つのグループに分けているが、全てのグループで、小学校卒業の割合は新しい世代で高くなり、アルゼンチン、チリ、ウルグアイの第1グループでは、30代前半から20代後半の年代ですでに90%を越えて、完全就学率を達成したと言える。高校卒業率は、第1グループにおいてもまだ50%ほどだが、これらの数値が示しているのは、絶対的なレベルはそれぞれ異なるものの、ラテンアメリカの全ての国において、小学校卒業と高校卒業の割合が順調に伸びてきている事実である。

表4では、ラテンアメリカ諸国における小学校、高校卒業の割合を、1990年と2005年について、親の教育レベルによって5つのグループに分けて示している。15歳から19歳までの若者の小学校卒業率については、親が小学校を卒業していない子供のグループの改善率が最も大きい。このデータからわかるように、社会階層間のアクセスの不平等は縮小している。貧困層を対象とした特別プログラム（補償プログラム）の実施が、このような公平性の確保につながっていると推測される。20歳から24歳までの年代について、高校卒業の割合を見ると、どのグループにおいても目立った改善が見られるが、親が小学校を卒業していないグループでその変化が最も著しい。これも、上記と同様、政府の補償プログラムの効果と考えることができよう。

表3 ラテンアメリカの世代別小学校・高校卒業率（％）

年齢	65歳以上	55～64歳	45～54歳	35～44歳	25～34歳	18～24歳
(1) 小学校卒業率（％）						
グループ1	63.5	75.4	83.3	88.9	92.9	95.5
グループ2	26.6	41.1	56.8	67.6	73.6	79.5
グループ3	12.1	19.5	31.0	43.2	52.9	60.0
(2) 高校卒業率（％）						
グループ1	17.4	26.4	37.5	44.3	50.9	48.4
グループ2	9.4	15.0	22.8	28.2	32.5	33.7
グループ3	4.4	8.1	13.8	20.2	23.1	21.5

注) グループ1：アルゼンチン、チリ、ウルグアイ

グループ2：ボリビア、ブラジル、コスタリカ、メキシコ、パラグアイ

グループ3：エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア

出典：IIPE, OEI (2006) Informe sobre Tendencias Sociales y Educativas en América Latina

表4 親の教育レベル別の小学校・高校卒業率（1990～2005年）

親の教育レベル	小学校卒業率 (%) (15歳～19歳)		高校卒業率 (%) (20歳～24歳)	
	1990年	2005年	1990年	2005年
小学校卒業未満	70.4	85.5	16.2	32.7
高校卒業未満	93.6	97.1	32.7	51.9
高校卒業	95.6	96.3	81.4	92.7
専門学校または大学卒業未満	94.2	98.8	76.1	90.8
大学卒業	95.8	98.4	75.5	91.1

出典：ECLAC (2007) Social Panorama of Latin America

以上見たように、1990年代以降の教育政策の成果として、学校へのアクセスが拡大し、特に貧困層において就学年数が増大したことがわかる。親の世代と比べ、若い世代においては、アクセスという側面では教育の公平性が改善されたと結論づけることができよう。

3. 教育の成果（学習成果）における不平等

1990年代から、ラテンアメリカのいくつかの国は、TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study) やPISA (Program for International Student Assessment) などの国際的な教育成果のアセスメントテストに参加するようになった。自らの仕事の成果を問われることになる教師にとっては、必ずしも望ましくない展開ではあるものの、このような成果の検証と公表によって、教育のアクセスだけではなく質の面でも公平性を求める声が強まる結果となった。

表5は、2006年にPISAに参加したラテンアメリカの6カ国について、科学、読解力、数学のスコアを示している。親が中学校卒業以下のグループと、親が大学を卒業しているグループのスコアが比較できる。親の教育レベルの違いを社会階層と置き換えて考えると、このような社会階層グループ間の違いという点では、各国およそ同じような状況を示している。出身の社会階層の影響を学校教育がどのくらい打ち消すことができるかという意味において、ラテンアメリカとヨーロッパとの間で大きな違いは認められない。しかし、学校教育と社会階層との関係という点では、国ごとに大きな違いがあることが、次の表5の数字からわかってくる。

表6では、リーディングのスコアについて、その分散を「学校内の分散」と「学校間の分散」の二つに分解して示し、最後のコラムは、「学校間の分散」が全体の分散に占める割合を示している。ここで、「学校間の分散」は、学校がおかれたコミュニティーの社会経済的環境（通学してくる子供たちの家族構成、親の職業、家庭にある本の数など）や学校システムの制度的な特徴を大きく反映していると考えることができる²。一方、「学校内の分散」は、そのグループ内に所属する生徒の間の個人レベルでの能力の差を反映していると考えることができる。つまり、「学

2 ドイツにおいて、学校間分散の割合が飛び抜けて大きいのは、興味深い。早い段階での生徒の能力や適正による進路分岐を反映していると考えられる。

表5 親の教育レベル別PISAテストスコア（2006年）

親の教育レベル	中学卒業以下			大学卒業以上			グループ間の差 (読解)
	科学	読解	数学	科学	読解	数学	
アルゼンチン	353	338	344	422	402	408	64
ブラジル	365	367	342	416	417	397	50
チリ	391	397	363	485	490	456	93
コロンビア	368	361	346	410	411	394	50
ウルグアイ	392	373	385	452	438	451	59
メキシコ	388	386	383	437	441	434	55
OECD平均	446	443	448	525	516	522	73
スウェーデン	456	463	462	515	519	514	56
イギリス	450	444	450	537	516	512	72
ドイツ	449	420	446	543	521	531	101

出典：OECD, PISA 2006. Science competencies for tomorrow's world. Volume 2. Table 4.7 a. (in Cox 2010)

表6 PISAテストスコア「学校間分散」と「学校内分散」の割合（2006年読解力テスト）

	テストスコアの分散 (OECD平均=100)	学校間分散	学校内分散	学校間分散の割合(%)
アルゼンチン	158.1	71.0	84.9	44.9
ブラジル	107.9	47.0	55.3	43.5
コロンビア	119.7	35.8	83.0	29.9
チリ	109.9	62.1	63.2	56.5
メキシコ	94.2	33.9	48.8	36.0
ウルグアイ	151.4	62.4	87.8	41.2
OECD平均	100.0	38.4	63.4	
スウェーデン	96.4	12.0	81.0	17.7
イギリス	103.7	21.9	78.5	21.2
ドイツ	126.1	100.5	48.0	79.7

出典：OECD, PISA 2006 (in Cox 2010)

校内の分散」が全体の分散に占める割合が高いほど、その教育システムは「公平」であることを示している。「学校内分散」の割合が高いシステムでは、どの学校に通っても、期待される学習成果において、学校が置かれた社会的環境の影響による有意な違いは認められないと予測される。

表6の最後のコラムが示すように、ラテンアメリカ諸国における「学校間の分散」の割合は、イギリスやスウェーデンのそれよりかなり大きい。興味深いのは、ヨーロッパの中でも、異なった社会福祉理念を持つ3つの国の間で、それぞれの分散の数値が社会政策や福祉理念を反映させた結果となっている点である。スウェーデンは社会民主主義のもとで、「公平」や社会の構成員

のあいだの平等を求める政策がとられ、その結果、持って生まれた社会階層の特性が能力（テストスコア）の違いに影響する割合が小さくなっていると考えられる。イギリスは、自由主義の国であり、福祉レベルにおいても個人の選択が重要な役割を持つ。一方、ドイツでは、福祉へのアクセスは、社会階層グループごとのステータスによって分断されており、「学校間分散」が全体に占める大きな割合は、そうした社会制度の違いを示していると考えられることができる。これらヨーロッパの3カ国との比較においても、ラテンアメリカの教育制度が、結果の「公平性」を実現する制度とはなっていないことを理解することができる。

III. 条件付き現金給付プログラム「PROGRESA/OPORTUNIDADES」

第II章では、ラテンアメリカの多くの国で1990年代以降取り組まれてきた教育支出の拡大と効率化、教育の分権化と、特に教育格差を是正するための補償プログラムの実施が、アクセスの拡大という側面においては、大きな成果をあげてきたことを見た。中でも、メキシコのPROGRESA/OPORTUNIDADESプログラムは、近年そうした貧困層をターゲットとして実施されてきた補償プログラムのなかでも大きな注目を集める「条件付き現金給付プログラム」の原型となった重要な政策である。1997年8月に実施に移されてからすでに17年の年月が経過し、その成果について、綿密なデータ分析を行った実証研究も複数報告されている。この第III節では、まず、プログラムの概要を簡単に紹介し、特に、教育のコンポーネントについて、その内容を詳しく説明する。次の第IV章で、これまでの実証研究から導きだされたプログラムの成果について、報告する。

メキシコ政府は1997年に、Programa de Educación, Salud y Alimentación（教育・保健・栄養プログラム、PROGRESA）を導入した。これは、複数の目的を持つ複合的な社会政策であったが、主要な目的は、国内貧困層の教育、保健、栄養状態を多角的に改善することによって、現在の貧困家庭への直接の社会保障給付と同時に、新しい世代が将来、貧困から脱け出すことができるようになることを目指すものである。貧困家庭の子供たちが学校に通い続けること、そしてクリニックで保健・栄養関係の指導や検査を受けることを条件に、ターゲットとなる貧困層の家庭に現金給付を行う。このような条件付き現金給付プログラムは、今では開発途上国の多くに広まり、貧困削減戦略の有効な手段の一つとして、広く認識されるようになった。メキシコのPROGRESAは、ブラジルのBolsa Escola/Bolsa Familiaとともに、そのモデルとなったプログラムである³。

実施当初、PROGRESAは、予算配分の拡大に伴って、段階的かつ計画的に、その規模を拡大していった。1997年8月に始まった第1フェーズでは、3,369の村落の140,544世帯がプログラム

3 1997年にZedillo政権によって開始された「PROGRESA」プログラムは、2000年の政権交代を経て、2002年に新しく「OPORTUNIDADES」として生まれ変わった。メキシコにおいては、社会政策は政権が変わるごとに作り替えられるのが常で、他の政党政権のもとで実施されてきたプログラムが、名称は変わったものの、実質的にはそのまま継承され実施されることになったのは、画期的な出来事であった。以降、本稿では、PROGRESA/OPORTUNIDADESという長い名称を使わず、PROGRESAという最初の名前を使用する。

による受益の対象となった。第2フェーズでは同じ年の11月に新たに2,988村落の160,161世帯が加わり、その後、段階的にプログラムの受益者は拡大した。(2014年現在では、約600万世帯の受益者があると報告されている。)それまでのメキシコの貧困対策は、主食トルテイヤの価格補助など、貧困世帯をターゲットにしぼるのではなく、国民全体にその便益が与えられてしまうため、政府予算の負担が大きく、かつ貧困層以外へ社会福祉支出が配分されてしまう“inclusion error”が問題であった。さらに、PRONASOLのような、貧困地域共同体からの支援要請に基づいて予算配分を行うプログラムでは、地域の権力者による政治的影響力により左右され、支援を本当に必要とする貧困層にプログラムの恩恵を必ずしも届けることができなかった。PROGRESAは、これらの既存の貧困対策と一線を画し、受益者の選別に明確な基準を設け、極度の貧困状態にある世帯に確実にプログラムの便益を届けることが意図されている。

PROGRESAのもうひとつの特徴は、それまでのメキシコの社会政策が単一の目的を掲げるものであったのに対し、複数の分野の施策を組み合わせた複合的な貧困対策である点である。人的資源を強化するために必要となる様々な条件を同時に改善することで、それぞれの側面を単独で改善する場合よりも相乗効果が大きくなり、高いリターンを得ることができるはずであるという考えに基づいている。学校教育において、児童の健康状態や栄養状態の改善がその学習成果にもプラスの影響を与えることは、開発途上地域での様々な実証研究から明らかになっている。子供の健康状態が良くないという状況は、貧困の結果であると同時に、将来にわたって、彼らを貧困にとどめる原因ともなる。PROGRESAは、教育、保健、栄養の3つの側面を同時に改善させるアプローチを採用している。

なかでも、教育のコンポーネントは、PROGRESAの中心となる施策である。教育による人的資源開発が労働生産性の向上と所得増大に大きく係っていることは、経済学の中でも最も強く実証されている事実のひとつである。特に、貧困の罠から抜け出すための条件として、教育が持つ役割は重要であり、貧困削減、所得分配の改善のためにも、貧困世帯子弟の教育の機会を拡大することが喫緊の課題であることは広く認められた事実である。PROGRESAプログラムでは、就学率増加、就学している子供たちの登校率の増加、そして学習成果を改善することを、目標としてあげている。そのための方策として、以下の4つの、互いに相乗効果を持つ手段が採用された。

- (1). 教育のための現金支給(教育手当)
- (2). 教材購入のための資金提供
- (3). 教育サービスの質の改善
- (4). 親が子供を教育することに関する責任と、教育によって得られる効果についての認識を深めさせる施策

PROGRESAでは、教育手当の金額は、就学年次があがるにつれて増やされる。また、中学校レベルでは、女子生徒の手当額は、男子生徒のそれよりも多く設定された。これは、メキシコ社会のジェンダーバイアスを考慮して、女子生徒が教育を続けることができるように意図的にデザインされたものである。教育手当の金額は、児童生徒が学校で教育を受けることの機会費用とし

て計算されており、物価上昇を勘案して実質額を維持するために、6ヶ月ごとに調整される。また、自助努力を阻害しないために、一ヶ月に一世帯が受け取ることのできる手当の総額に限度額が設けられている。教育手当は、プログラムの受益者として選ばれた世帯の7歳から18歳までの児童生徒が対象となり、その母親に、学年中に2ヶ月に一度の頻度で手当が支払われる。手当を受け取る条件は、子供を学校に登録し（就学の確保）、一ヶ月ごとに85%以上の出席率、一年を通じて85%以上の出席率が確認されることである。この条件が満たされない場合、まず、手当が一時的にストップされ、その後、事態が改善しない場合は、永久的にプログラム受益世帯のリストから除外されることになっている。教材購入費用の支払いについては、金額は小学校、中学校などレベルによって異なり、支払いも、多くの場合、受益世帯に対して直接現金が支給されるのではなく、学校を通じて、現物支給の形で行われる。

PROGRESAがもつ大きな特徴として、プログラムの導入が、実施当初から段階的に行われたことで、プログラムのインパクトを評価するためのデザインとして、社会実験的な手法を採用することができた点があげられる。プログラムの受益者世帯について、プログラム参加前と参加後の両方についてデータを集めることができ、また、受益者世帯と同じ条件を持つがプログラムには参加していない世帯についても、比較のためのコントロールグループとしてデータを集めることが可能となった。このようにプログラムインパクトの検証のデザインを、実施前の時点で専門家が設計することが可能であったことは、通常、社会政策の実施においてなかなか得られない、貴重な例である。社会実験的なプログラムインパクトの検証では、PROGRESA参加によって受益者世帯の教育や保健に関する行動がどう変わったのかについて、観察される行動の変化の中から、PROGRESA以外の要因による変化を差し引いて、純粋にPROGRESAプログラムによる影響だけを取り出すことが可能となった⁴。

メキシコ政府は、1998年11月から2000年11月の24ヶ月にわたって、国際食料政策研究所(IFPRI)やその他の研究機関の研究者とともに、PROGRESAプログラムの短期の効果について、データの収集とその分析を行った。その後、より中期的なインパクトについても実証研究が行われてきている。第IV節では、これらの研究の結果をもとに、PROGRESAが対象世帯の子供の教育にどのような影響を与えたのかについて、現在の時点で得られる結論をまとめる。

IV. PROGRESAの教育分野における成果

政策効果の検証を実証的に行うためには、まず、その政策の目的とするところが明確に定義される必要がある。PROGRESAの目的は、貧困世帯の所得補償という直接の目的に加えて、現金給付を条件付きで行うことで、貧困世帯が子弟の人的資本投資（教育、保健、栄養）を継続して行い、将来の貧困削減につながることである。従って、究極の目的が達成されたかどうかは、長期的な追跡調査を行うことでしか検証できない性質のものである。プログラム実施開始後2年ほどのデータに基づく多くの実証研究では、短期のプログラム効果は示せても、長期的に、プログ

4 計量経済学的手法としては、「差分の差分法（difference in difference analysis）」を用いる。

ラム参加によって受益者の人的資本が増大し、生涯を通じての所得増加が得られたかどうかという問いに、答えることはできない。

また、プログラムの複合的性格から、教育、保健、栄養のそれぞれのコンポーネントの個別のインパクトについて検証することもできない。また、プログラムのデザインを変えることでその効果にどのような影響が及ぼされるかという問いへの答えも、政策立案者にとっては有益な情報となるが、PROGRESAの評価においては、そのような情報を得ることは難しい。さらに、PROGRESAは、人的資本投資の需要側の問題（機会費用）に着目したプログラムであるが、多数の受益者が学校や地域のクリニックにサービスを求めるようになるため、供給側へのサポートも必要となるであろうことが予測され、それがプログラムデザインにも反映されている。学校やクリニックへの資金的援助や、サービスの質の向上の重要性についても、いくつかの施策が盛り込まれている。従って、プログラム効果の検証においては、需要側への支援と供給側への支援を分けて評価することもできないため、どちらの施策がより効果的かという問いに対しても、答えることはできない。以上のような限界があることを理解しつつ、以下では、PROGRESAの実施が開始されてから2年ほどの短期的なインパクトを中心に、教育面でのその成果をまとめる。

メキシコでは、農村の貧困地域でも、小学校への就学率（enrollment）は低くない。PROGRESAプログラムの対象となるような貧困地域でも、小学校就学率は90%を越えている。しかし、中学校に進学する段階で、就学率の大きな低下が見られる。さらに、中学校を卒業しても高校への進学時点で就学率がさらに大きく下がることが報告されている。従って、PROGRESAの果たすべき役割として、まず農村の貧困世帯の子供が中学校に進学することを促すことがあげられる。

PROGRESAプログラムが受益者世帯の子供の就学率向上（enrollment）にどのくらいのインパクトを与えたかを検証するために、二つの手法が考えられる。まず、単純に、プログラム対象地域（treatment group）と対象外地域（control group）の間で、それぞれの学年ごとの平均就学率の差を比較することである。しかし、このような単純な比較では、プログラムによるインパクトの他に、もともと存在した二つのグループ間の違いによって引き起こされたかもしれない結果の相違を取り除いて、純粹にプログラムによるインパクトを抽出するのが難しい。もうひとつの、より望ましい検証手法として、個人レベルのマイクロデータを使って、プログラム受益者となる条件を持つ子供と、プログラムの対象となっていない子供との間で、就学しているのかどうか（enrollment）を比較する。この場合、家族や地域の様々な特徴が結果（enrollment）の違いに影響を及ぼしているかもしれない、そうした潜在的な影響要因を取り除いたあとに残る結果の違いについて、プログラムによるインパクトであると結論づけることができる。

まず第1の手法で、単純に平均就学率を比較すると、小学校年齢（8～11歳）、中等教育年齢（12～17歳）の両方のグループで、PROGRESA対象地域では、就学率がコントロールグループよりも高いことがわかった（Skoufias 2005）。第2の手法を使ったシュルツ（2000）の研究では、PROGRESAプログラムの実施によって、小学校レベルの男子児童では、修学率が0.74～1.07パーセントポイント上昇し、女子児童については、0.96～1.45パーセントポイント上昇したという結

果が報告されている。中学校レベルでは、就学率の上昇は、男子生徒で3.5～5.8パーセントポイント、女子生徒で7.2～9.3パーセントポイントの上昇であった。こうしたプログラムの効果が、小学校入学から中学卒業まで（グレード1～9）維持されたとすると、その累積効果は、平均でおよそ0.66年の修学年限の延長となる。性別に見ると、女子については0.72年の延長、男子では0.64年の延長である。対象地域において、PROGRESAプログラム実施前の平均的な18歳の若者は6.2年の学校教育を受けていることから、プログラムの効果としては、およそ10%の修学年限延長の効果があったという結論になる（Schultz 2000）。

シュルツは更に、現在の都市部賃金が、将来にわたってPROGRESA受益者の予測賃金であると仮定し、教育手当のコンポーネントについてその内部収益率を計算している。それによると、年率約8パーセントのリターンが期待できることがわかった。従って、教育手当は現在の貧困世帯の所得補填になるだけでなく、それによって就学年限が0.66年伸びたことにより、その子供は将来にわたってずっと、年率8%の所得の増加を見込むことができることになる。さらに、PROGRESAの受益者が、中学校だけでなく高校、大学へと進学する可能性も高まることを考えれば、8%のリターンは、PROGRESAのインパクトの推計としては、最小値を示しているとも考えられる。教育の内部収益率は、教育レベルが高くなるほど大きいことから、さらに長期的な就学率への影響を加えると、PROGRESAのインパクトはさらに大きくなることが期待できる。

また、学校建設の拡大という供給側の代替政策との比較で、条件付き現金給付プログラムを評価したとき、子供を学校に行かせるという目的を達成するためには、後者の需要側からのアプローチのほうが前者の供給側からの政策に比べて、費用対効果が高いという研究結果も報告されている（Coady 2000）。

シュルツ（2000）によれば、PROGRESAの就学率への影響は、小学校6年間を修了し、中学校に入る段階の子供たちにおいて、最も大きい。その増加は、女子生徒で14.8パーセントポイント、男子生徒で6.5パーセントポイントであった。これは、女子生徒では約20%、男子生徒でも約10%のインパクトを意味する。PROGRESAが実施される前は小学校卒業と同時に学校教育から離れていた生徒、特に女子生徒が、プログラムの教育手当などのインセンティブによって、中学校進学を果たしていることがわかる。さらに詳しく見ると、この就学率増大の効果の大きな部分は、すでにドロップアウトした生徒が学校に戻ってくるというより、在学中の生徒がドロップアウトすることを防ぐことによるものであるという結果が報告されている。しかしその一方で、プログラムは、出席率（attendance）の増加にはつながらないことも報告されている。ただし、この点については、メキシコの小学校教育では、一ヶ月当たりの登校日数の割合は、97%とすでに高い数値であることから、プログラムのインパクトが明らかには見られないとも考えられる。

また、ピアマンらの研究によると、PROGRESAへの参加は、就学年齢の早期化、原級留置の軽減、進級率の増加、ドロップアウトの削減、すでにドロップアウトした児童の学校への再入学率の拡大などに関連づけられることが示されている（Behman et al. 2001）。特に、小学校から中学校への進学時のドロップアウトを防ぐのにたいへん効果的であると報告されている。しかし、

他の研究によると、再入学した生徒の多くは、再びドロップアウトする確率が高いこともわかっている (Coday 2000)。

プログラムのインパクトとしては、就学率の上昇と同時に、子供の労働市場参加率にも影響が見られる。プログラム受益者 (treatment group) と不参加のグループ (control group) について、プログラム実施前と後を比較する「差分の差分法」を用いて、労働市場参入へのプログラムのインパクトを調べた研究によると、特に男子生徒では15~25%の減少が見られた。PROGRESAのような条件付き現金給付プログラムによって、児童労働削減への効果も期待できることを示唆している (Behrman et al. 2001)。

一方、PROGRESAの受益者となることで、学校で過ごす時間や、帰宅後に宿題などの勉強に費やす時間については、有意な変化は見られなかった。プログラムに参加することで、より多くの子供が学校に行くようになったが、同時に、学校と仕事の両方をこなす子供も多い (Parker and Skoufias 2000)。さらに、標準学力テストの結果に関しては、プログラムに参加することのインパクトは認められなかった (Behrman et al. 2000)。シュルツ (2004) は、6歳から16歳の子供のパネルデータを分析し、都市中央部から遠い学校において、学校の出席率上昇を報告しているものの、PROGRESAの影響としては、「出席率」 (attendance) があがるよりも、「就学率」 (enrollment) があがることに、より大きなインパクトを持つとしている。

以上のような計量分析によるインパクトの検証の他に、PROGRESAの教育コンポーネントについて、関係者の意識調査を行った研究もある。受益者を対象とした調査によると、プログラムによって新たな需要が生まれたことで、教育の質が低下したという結果は報告されていない。PROGRESAでは、供給側に対しても、政府から資金の提供があり、教育サービスの質の維持、あるいは改善が図られたが、こうした施策が効果をあげていることを示しているとも考えられる。調査に回答した校長の多くは、学習成果の改善を報告しているが、それは、学校のインフラや教材が改善したことによるのではなく、出席率の向上、生徒の学習意欲の増大や栄養状態の改善によるものであると説明している。校長からの聞き取りでも、フォーカスグループのインタビューでも、PROGRESAによって、貧困世帯の子供や親の間で、教育の重要性や意義に関して理解が深まり、態度が改善されたとの意見が出された。フォーカスグループの議論によると、これらの家庭は、可能な限り子供を学校に行かせることを重要と考えていることがわかる (Skoufias 2005)。校長へのインタビューで多く聞かれた意見として、PROGRESAプログラムの目的とデザインに関して、そして実施のプロセスについて、教師たちへの相談がなかったことへの不満がある。しかし、教師たちへのインタビューでは、PROGRESAがコミュニティーにプラスの影響をもたらしていると考えており、プログラムの更なる拡大を望んでいることが伺えた。

以上は、全て短期のプログラムインパクトを検証した研究であるが、2000年代後半になって、より長い時間が経過した後の中期的なインパクトに関する研究がいくつか報告されている。Behrman, Parker and Todd (2007) は、プログラムが開始する前に0歳から8歳であった子供 (2003年時点で6歳から14歳) のグループについて、プログラムのインパクトを検証した。その結果、全体として就学年数が0.45年増加したことがわかった。進級率についても大きな改善が見られ、

特に9歳から14歳の子供では15～20パーセントポイントの改善が見られた。

シュルツ（2004）によると、プログラムのインパクトは、中学校の就学率改善において最も大きかった。そのことから、Behrman, Parker and Todd（2007）は、プログラム開始時に中学校に進学する年齢だったグループ（当時9歳から15歳、調査時には15歳から21歳）について、教育と労働に関する様々な指標を調査した。修了就学年数、標準学力テストのスコア、雇用、賃金などに関するデータが集められた。「差分の差分」法による分析から、プログラムの受益者となったグループでは、およそ1年の教育年数増加が検出された。

学力テストスコアの比較では、2003年に実施されたテストのスコアが報告されている。2003年当時15歳から21歳のグループに着目し、サンプル選択のバイアスを軽減するため、この年齢に該当する対象者の全員に対して、学校ではなくそれぞれの家庭でテストが実施された。それでも、プログラム受益者グループ（treatment）とコントロールグループとの比較において、完全に外的要因の影響を取り除くことはできていないため、推定されたインパクトは過小評価されていると考えられるものの、学力テストスコアにたいして、PROGRESAによる影響は見られなかった。

プログラムが受益者の雇用にどのような影響を与え得るかを考えると、そこには、相反する方向の二つの影響が考えられる。まず、学校により長く就学を続けることで、受益者グループの労働市場参加の時期は遅くなる。一方、就学年数が多いことで生産性の向上が見込まれ、労働市場における価値は上がり、仕事を見つける可能性と期待される賃金はともに増加するはずである。Behrman, Parker and Todd（2007）によると、2003年に15～16歳だった男子については、雇用の可能性が有意にマイナスとなった。おそらく、この年齢では多くの生徒がまだ就学中であるためであろう。2003年に19～21歳の女子については、雇用の可能性について、6～9パーセントポイントの有意な増加が見られた。これらの結果は、学校と仕事との関係について、若年層では就学が労働市場参加を押さえることにつながり、他方、より年齢の高い若者にとっては、就学年数が長いことは、仕事を見つけるのにポジティブに働くというモデルで説明できる。特に、伝統的な農村の貧困地域に暮らす女子にとって、雇用の可能性が有意に増大することは、重要な意味をもっていると考えられる。

V. おわりに—教育改革の方向転換と「質の公平性」へのチャレンジ—

第II章で、ラテンアメリカ諸国における教育の「公平性」について、近年アクセスに関しては改善が見られ、貧困層の教育アクセスが特に大きく改善したことで、教育の機会の平等に向けて、確かな進歩が見られることを述べた。しかし、「学習成果の平等」という指標で見れば、ラテンアメリカのほとんどの国では、いまだに、生まれた世帯の経済条件、社会階層や性別、人種などによって、教育の成果が大きく左右される現実も示した。そこでは、個人ごとの能力や適正の違いではなく、通っている学校の社会文化的背景や条件によって、標準学力テストのスコアの分散が説明できることを見た。

メキシコにおけるPROGRESA/OPORTUNIDADESという、条件付き現金給付プログラムの実施は、貧困層の子供たちが学校にとどまることに確かに大きく貢献してきた。プログラム開始当時、小学校入学の年齢だった受益者の子供が、現在20代半ばにさしかかり、彼らの労働市場でのパフォーマンスに関するデータを詳しく分析することができれば、プログラムのより長期的なインパクトを検証することができるだろう。短期的なインパクト評価では、プログラムの教育手当などによって、平均0.66年の就学年数の増加が見られ、人的資本への投資という観点から見れば、年率8%の内部収益率が計算された。彼らの労働所得が、コントロールグループと比べて、その後も、8%ほどの高いリターンを維持できているとすれば、PROGRESAは、貧困層の若い世代が貧困から抜け出すために、確かな役割を果たしたと結論づけることができるのかもしれない。ただし、このような長期にわたる政策のインパクト評価は、長期的な結果に至までのプロセスで様々な外部要因に影響され、純粹にプログラムの効果だけを取り出す検証を行うことは、たいへん難しい。

PROGRESAの就学率へのインパクトが明確に示されたのに比べ、学力テストのスコアに関しては、有意なインパクトが観察できなかった。農村の貧困地域や、都市部でも貧困層が通う学校で、得られる教育の質が不十分であるとすれば、いくら就学率があがっても、それ以上の貧困削減と学習成果から見た教育機会の公平性確保、所得分配の改善は期待できない。第II章と第IV章の議論からわかるように、メキシコが更なる経済社会発展を実現するために必要なのは、教育の成果の公平性を求めて、教育の制度を更に補償性の高いシステムに改革してゆくことである。貧困層の能力を開拓し、社会経済の発展に貢献してもらうために、教育の供給側の課題に対応する必要があるだろう。1990年代以降続いた、教育の地方分権化という政策方針は、現政権の新しい教育改革において、重要な方向転換をしつつあるように見える。2013年2月の憲法改正により、教員の採用、昇進、雇用継続の決定において、教員評価が義務づけられた。教員評価を義務化し、プロフェッショナルとしての教員サービスを確立するために、国立教育評価機構(Instituto Nacional para la Evaluación de la Educación)の権限強化と独立性の確保を求めている。これは、これまで行き過ぎた分権化によって教育の質の公平性を実現することができなかったことへの反省から、中央の評価機関の力を強化することで、供給側からも、教育の公平性を担保しようとする試みであると言えよう。国内の諸地域、グループ間の経済的、制度的な発展の不均衡をただし、補償するという中央政府の役割を再認識し、教育改革を更に一步前進させようとする試みであると評価できよう。

メキシコの現政権は、就任以来、エネルギー、通信など、鍵となる分野で大胆な改革を推進してきた。教育改革は中でも重要な位置を占めている。教育の供給側の説明責任を明らかにするため、教師に対して定期的な能力試験と業務評価を課し、政治的に大きな力を持つ教員組合の役割を、より建設的なものに変えてゆこうとする改革の方向は、メキシコ社会のニーズに確かに合致したものである。ラテンアメリカ諸国は1990年代以降、経済の自由化と構造改革を推進してきた。その次の段階で求められているのは、社会制度の改革であるが、長い歴史の中で作られてきた制度のもとで、強大な力を持つに至った既得権益による呪縛を解き、大胆な改革を実現す

ることは、たいへん困難である。メキシコの教育改革の今後の展開は、これからの経済社会発展を大きく左右するものであると考えられる。

2014年9月2日、就任から2年目の政府調書演説で、ペニャ・ニエト大統領は、PROGRESA/OPORTUNIDADESプログラムを拡大して、「Programa Prospera」として再編する計画を発表した。これまでのプログラムの内容は継続しながら、更に、受益者が「生産的生活」にスムーズに移行してゆけるような施策を盛り込むことが説明された。具体的には、(1) 大学や高等専門学校での就学にも教育手当を拡大すること、(2) 仕事を探す際に、優先的に働き口を見つけられるような施策、(3) 金融に関する特別教育と、貯金や資金借り入れへのアクセス、そして(4) 事業を始めるための資金貸し付けや、農業ビジネス基金の設置などが施策に盛り込まれている。「Programa Prospera」の15の生産部門プログラムに特別なアクセスを得ることで、プログラムの対象となる貧困層の世帯は、様々な所得拡大の機会を与えられることとなる。この新しい試みに対してコメントすることは本稿の目的ではないが、将来「Programa Prospera」がどのような成果を生み出すことになるのか、メキシコのさらなる経済社会発展のために、実現可能で効果的な戦略となるのかどうか、引き続き検証が必要である。

参考文献

- Behrman, J. R., Parker, S. W. and P. E. Todd 2000 “Final report: The impact of PROGRESA on achievement test scores in the first year”, International Food Policy Research Institute, Washington, D. C., in Bherman et al. 2007.
- Behrman, J. R., Sengupta, P. and P. Todd 2001 *Progressing through PROGRESA: An impact assessment of a school subsidy experiment*. September, International Food Policy Research Institute, Washington, D. C.
- Behrman, J. R., Parker, S. W., and Todd, P. E. 2007 “Do School Subsidy Programs Generate Lasting Benefits? A Five-Year Follow-up of *Oportunidades* Participants”, in Parker, Rubalcava, and Teruel 2008.
- Coady, D. 2000 *Final Report: The Application of Social Cost-Benefit Analysis to the Evaluation of PROGRESA*. November, International Food Policy Research Institute, Washington, D. C.
- Cox, Cristián 2010 “Educational Inequality in Latin America. Patterns, Policies and Issues”, Chapter 2 in Attewell, P. and K. S. Newman (eds.), *Growing Gaps. Educational Inequality around the World*, Oxford University Press, Oxford, New York.
- ECLAC 2007 *Social Panorama of Latin America 2007*. Santiago de Chile, United Nations Publishing.
- ECLAC-UNESCO 1992 *Education and Knowledge: Basic Pillars of Changing Production Patterns with Social Equity*, Santiago de Chile, United Nations Publishing.
- Parker, S.W., Rubalcava, L. and Teruel, G. 2008, “Evaluating Conditional Schooling and Health Programs”, Chapter 62 in *Handbook of Development Economics*, Vol. 4, pp. 3963-4035.
- Parker, S.W. and E. Skoufias 2000 *The Impacto of PROGRESA on Work, Leisure and Time Allocation*. October, International Food Policy Research Institute, Washington, D. C.

- Schultz, T. P. 2000 "School Subsidies for the Poor: Evaluating a Mexican Strategy for Reducing Poverty", International Food Policy Research Institute, Washington, D.C.
- _____ 2004 "School Subsidies for the Poor: Evaluating a Mexican Strategy for Reducing Poverty", *Journal of Development Economics*, 74 (1), pp. 199-250.
- Skoufias, Emmanuel 2005 *PROGRESA and Its Impacts on the Welfare of Rural Households in Mexico*, International Food Policy Research Institute, Research Report 139, Washington, D.C.
- World Bank 2004 *Making Services Work for Poor People*. World Development Report 2005, Washington, D. C., Oxford University Press.
- _____ 2005 *Equity and Development*. World Development Report 2006, Washington, D. C. Oxford University Press.

“O, I have read it; it is heresy” Giordano Bruno’s *Gli Furori Heroici* as a Major Source for *Twelfth Night*

Marianne KIMURA

Abstract

Once the sequence of the lovers in *Romeo and Juliet* is recognized as a pattern depicting Shakespeare’s idea of the history of mankind and the sun, it becomes clear that the heliocentric focus could only have been based on the scientific work of Giordano Bruno (1548-1600). Bruno’s presence in Shakespeare’s plays has only been speculated about in a shadowy way, especially by German critics in the 1800s. However, once the sun/coal dichotomy is recognized as a basic pattern in Shakespeare, it becomes very clear that Giordano Bruno is also present in Shakespeare’s works, although he is well disguised. In *Twelfth Night*, the treatment of Giordano Bruno at the hands of the Roman Inquisition is parodied and inverted in order to subvert it and call it severely into question. Thus Malvolio, who through imagery becomes associated with things (pedantry, Puritanism and religious intolerance, coal (i.e. denying the superiority of the sun)) contrary to what Bruno stood for is subjected to a religious inquisition conducted by Feste, the clown, who is dressed up as a priest. A question on the Pythagorean concept of the soul, a question similarly posed to Bruno by the Roman Inquisition, is also posed to Malvolio, who gives the standard Christian answer, only to have it mocked by Feste. Moreover, *Twelfth Night* (1601) was written the year following the execution of Giordano Bruno and the play is a tribute to the persecuted philosopher and heretic not only through its use of Bruno’s heliocentric concept but also through its quite specific allusions to Bruno’s *Gli Heroici Furori*, or *The Heroic Furies*. These allusions are mainly clustered around the two major scenarios or motifs of *Gli Heroici Furori*: the Actaeon/Diana passage depicting the Heroic Lover in pursuit of the Divine Truth and the Nine Blind Philosophers who receive help from a river nymph in London.

Key Words: William Shakespeare; Giordano Bruno; *Gli Heroici Furori*; Roman Inquisition; Heresy

I . Introduction

Shakespeare's festive comedies, written around 1600, are all about love and lovers. A model for the lover as a person questing after love can be found in Giordano Bruno's *Gli Eroici Furori* (1585), which dwells on a "heroic lover" in search of Divine Truth. Through the presence of many echoes of the tropes, motifs and themes in *Gli Eroici Furori*, *Twelfth Night* (1601) is likely the festive comedy which may most fully utilize Bruno's work *Gli Heroici Furori*, or *The Heroic Furies*, as its main source of inspiration and meaning.

It is not difficult to pick up on the topical references and allusions to Bruno in *Twelfth Night*: the lengthy parody of the Catholic Inquisition conducted on Malvolio, who is questioned about his view of Pythagoras' conception of the soul as Bruno was; or Viola's code-name, Cesario, similar to "Cesarino" the name of one interlocutor in *Gli Eroici Furori*. There is also the opening reference to the Actaeon-Diana myth. And, for example, there is the extended metaphor comparing Orsino's act of questing and loving, or trying to get closer to Olivia through his disguised emissary Viola, to a book:

Viola: What I am, and what I would, are as secret as maidenhead: to your ears, divinity, to any other's, profanation.

Olivia: Give us this place alone, we will hear this divinity. (*Exeunt Maria and Attendants*) Now, sir, what is your text?

Viola: Most sweet lady—

Olivia: A comfortable doctrine and much may be said of it. Where lies your text?

Viola: In Orsino's bosom.

Olivia: In his bosom? In what chapter of his bosom?

Viola: To answer by the method, in the first of his heart.

Olivia: O, I have read it. It is heresy. (I.v.215-228) (Evans 1974; 414)

Orsino seems to be a heroic lover (a sort of literary model of the philosophical one Bruno sketches out in *Gli Heroici Furori*, as I will show later) and he bids Viola to "unfold the passion of my love" (I.4.24) (Evans 1974; 411) in his pursuit of a woman representing an ideal (Olivia) and whose innermost longings are explained through the metaphor of a mysterious, heretical and unnamed "text": it is worth noting that all of Bruno's works were placed on the Catholic Index, the list of banned works.

Twelfth Night starts with an important reference to *Gli Eroici Furori* through its reference to the Actaeon-Diana myth:

Curio: Will you go hunt, my lord?

Orsino: What Curio?

Curio: The hart, my lord.

Orsino: Why, so I do, the noblest that I have.

O, when mine eyes did see Olivia first,

Methought she purg'd the air of pestilence!

That instant was I turn'd into a hart,

And my desires, like fell and cruel hounds,

E'er since pursue me. (Evans 1974: 408)(I.i.16-22)

The passage, placed so significantly at the opening of the play, signifies the sustained but hidden presence of Giordano Bruno's philosophy from *Gli Eroici Furori*, where Actaeon's fate is used as a metaphor for the heroic intellect approaching the Divine:

...But yet, to no one does it seem possible to see the sun, the universal Apollo, the absolute light through supreme and most excellent species; but only its shadow, its Diana, the world, the universe, nature, which is in things, light which is in the opacity of matter, that is to say, so far as it shines in the darkness.

Many of them wander amongst the aforesaid paths of this deserted wood, very few are those who find the fountain of Diana. Many are content to hunt for wild beasts and things less elevated, and the greater number do not understand why, having spread their nets to the wind, they find their hands full of flies. Rare, I say, are the Actaeons to whom fate has granted the power of contemplating the nude Diana and who, entranced with the beautiful disposition of the body of nature, and led by those two lights, the twin splendor of Divine goodness and beauty become transformed into stags; for they are no longer hunters but become that which is hunted. For the ultimate and final end of this sport, is to arrive at the acquisition of that fugitive and wild body, so that the thief becomes the thing stolen, the hunter becomes the thing hunted; in all other kinds of sport, for special things, the hunter possesses himself of those things, absorbing them with the mouth of his own intelligence; but in that Divine and universal one, he comes to understand to such an extent that he becomes of necessity included, absorbed, united. Whence from common, ordinary, civil, and popular, he becomes wild, like a stag, an inhabitant of the woods; he lives god-like under that grandeur of the forest; he lives in the simple chambers of the cavernous mountains, whence he beholds the great rivers; he vegetates intact and pure from ordinary greed, where the speech of the Divine converses more freely, to which so many men have aspired who longed to taste the Divine life while upon earth, and who with one voice have said: *Ecce elongavi fugiens, et mansi in solitudine*. Thus the dogs---thoughts of Divine things---devour Actaeon, making him dead to the vulgar and the crowd, loosened from the knots of perturbation from the senses, free from the fleshly prison of matter, whence they no longer see their Diana as through a hole or window, but having

thrown down the walls to the earth, the eye opens to a view of the whole horizon. So that he sees all as one.....(Bruno, *The Heroic Enthusiasts*: 1585, translation 1889: 66-68)

The Actaeon-Diana myth appears about half-way through *Gli Eroici Furori* and is one of the work's most significant and central parts. But it appears, as I have noted, at the start of *Twelfth Night*. So this play starts with the condition where a questing, searching "heroic lover", namely Orsino, is struggling, but so far unsuccessfully, to come into contact with Olivia, divine truth. To Shakespeare, who was profoundly concerned with the thermodynamic implications of heliocentrism (one of Bruno's ideas), the 'divine truth' of Olivia is the Planet Earth powered by the sun. Thus in the unveiling scene, both Viola and Olivia characterize Olivia's face in terms that include planetary scenery ("grain" "wind", "weather" "Nature"). In addition, the goddess Diana is Bruno's way of characterizing the presence of the divine in nature so there is also a casual reference to the divine ("God") after Olivia unveils her face. Finally, Bruno's belief in the unity of all the universe, what he called the monad, is expressed in the use of Olivia's notably odd use of the word "one" in the scene:

Olivia: Look sir, such a one as I was this present. (*Unveiling*) Is't not well done?

Viola: Excellently done, if God did all.

Olivia: 'Tis in grain, sir, 'twill endure wind and weather.

Viola: 'Tis beauty truly blent, whose red and white Nature's own sweet and cunning hand laid on... (I.v.234-240)(Evans 1974: 414)

The play ends as Olivia recognizes that Sebastian is not Viola; Olivia pairs up with Sebastian and Orsino happily realizes that Viola is the one for him. However, despite the fact that Orsino does not marry Olivia directly, two aspects of the play clue us in to the strong possibility that he has attained a unity with the "Divine Truth" through the play's actions. Olivia explains to him "My lord, so please you, these things further thought on, to think of me as well a sister as a wife." (V.i.317) (Evans 1974: 439) Orsino assents happily before he turns to Viola and proposes to her ("Here is my hand—you shall from this time be your master's mistress") (V.i.325). Viola doesn't answer (though presumably she happily takes his hand) and instead it is Olivia who speaks, calling Viola her sister ("a sister, you are she") (V.i.327). Orsino therefore is united with Olivia through belonging to the same family through the sibling relationship of Sebastian and Viola. Actually, playfully, in Act I, Orsino has teased Viola (whom he then believes to be a man) about Viola's hairless face; "Diana's lip is not more smooth and rubious..." (I.ii.31) In this minor and playful imagery connecting her to Diana, Viola also participates in Orsino's project to attain Divine Truth, and when Orsino pairs up with her in Act V, and at the same time becomes the brother-in-law (i.e. in the same family) of Olivia, he has attained his 'Diana' in more than one way.

II . The Nine Blind Philosophers in *Gli Eroici Furori*

In order to understand how *Twelfth Night* develops the whole of *Gli Eroici Furori*, not just the heroic questing symbolized by the extremely important Actaeon-Diana myth, we have to see how *Gli Eroici Furori* changes radically in its final pages, when the story turns to nine blind philosophers who are in possession of a “fatal urn” (Bruno 1585 translation 1889: 117) and who journey from the slopes of Vesuvius to Rome, then to the banks of the River Thames, where a river nymph opens the container and restores their vision. Hilary Gatti has endeavored to place this last part of *Gli Eroici Furori* within the context of the whole work, particularly in relation to the Actaeon-Diana passage:

...the final pages of *Furori* amount to a reversal of all that has gone before, in terms that do not seem to me to have been sufficiently appreciated in the critical discussion. Both the sonnet sequences and the emblematic images that in the earlier and more Neoplatonic parts of the text had constituted the literary structures around which Bruno constitutes his philosophical discourse, culminating in the mystical death of Actaeon devoured by the hounds of his own thoughts, are now replaced by the account of what is clearly a renewed spiritual as well as a physical pilgrimage....It needs to be emphasized that the last songs of the illuminated philosophers represent the end of the phase of heroic fury that Bruno’s journey---partly a sophisticated fiction, partly autobiography---has led up to. The nine philosophers have now reached a stage of their inquiry that will need to be carried out in more ordered and tranquil meditation (“tranquillato essendo alquante l’impeto del furore”). It is surely a mistake to read this work as representing a single state of mind, to be identified in purely Neoplatonic terms with the raptus of Actaeon’s self-destructive vision of the iconic Diana. Rather, it is a fiction that represents an intellectual journey during which that vision is left behind---not without regrets, gratitude, soul-searching, and a remarkable exercise in creative poetic composition. At the end of the book, however, that phase of Bruno’s life, and of Bruno’s intellectual history, seems to be considered exhausted, and a new era to be celebrated of a consciously less heroic kind. The individual is replaced by the group, the fury by a disciplined intellectual discourse concerning natural things that are no longer occult, but open to rational inquiry and research. (Gatti 2011: 134-6)

Sebastian, Viola’s twin brother and a character whose description of himself conveys utter destitution and despair, is the locus of the action in *Twelfth Night* that picks up the story of the nine philosophers. Engaged in a dialogue with Antonio, and beginning with his use of the word “stars,” Sebastian reveals much, in a Hermetic way, about his unfavorable cosmic condition:

Antonio: Will you stay no longer? Nor will you not that I go with you?

Sebastian: By your patience, no. My stars shine darkly over me. The malignancy of my fate might perhaps distemper yours; therefore I crave of you your leave, that I may bear my evils alone. It were a bad recompense for your love, to lay any of them on you. (Evans 1974: 415) (II.i.3-8)

Like the nine philosophers, Sebastian travels far, yet without any sure path or plan. Finally he wanders into Olivia's sphere of influence and is mistaken for Cesario/Viola (who is his twin sister) and then all his troubles are over. In its spirit and sensibilities, the action parallels the miraculous events at the ending of *Gli Heroici Furori*, when, after wandering, the nine philosophers end up beside the River Thames and the river nymph there opens the urn (or rather, it seems to open, "spontaneously of itself" (Bruno 1585, translation 1889: 120) when she holds it). In their joy, the nine philosophers are amazed and act "inebriated" (Bruno 1585, translation 1889: 120). In *Gli Heroici Furori*, Laodomia, the interlocutor reporting the story, tells Giulia, the other interlocutor:

How, I say, can you expect me to describe the joy and exulting merriment of voices and spirit which they themselves all together could not express? For a time, it was like seeing so many furious bacchanals. (Bruno 1585, translation 1889: 129)

Likewise, Sebastian exhibits a similar sense of being awe-struck:

"What relish is this? How runs the stream?/Or I am mad or else this is a dream" (IV.ii.60-1) (Evans 1974: 433)

When we next see Sebastian two scenes later, he is alone, and still full of wonder at his good fortune, very much echoing the nine philosophers in *Gli Heroici Furori*. The first words he utters ("This is the air, there is the glorious sun") once again underscore and show reverence to what we learn is his new cosmic mistress ("Olivia: Would thou'dst be ruled by me?/ Sebastian: Madam, I will." (IV.i.63-65) (Evans 1974: 433)). Echoing the nine blind philosophers who recovered their vision after the urn was opened ("they opened their eyes and saw the two suns" (Bruno 1585, translation 1889: 120)), Sebastian says he "sees" and also mentions his "eyes" and, of course, the "sun":

This is the air, that is the glorious sun,
This pearl she gave me, I do feel't and see 't..
.....Yet doth this accident and flood of fortune
So far exceed all instance, all discourse,
That I am ready to distrust mine eyes....(IV.iii.1-2; 11-13) (Evans 1974: 434)

III. Heliocentrism

In *Twelfth Night*, Shakespeare does include, in an allegory, the coal/sun dichotomy, the product of Bruno's heliocentrism and the concept of "vicissitudes", material conditions (Gatti uses the term "species", not singling out fossil fuels for any special mention, to mean things that are here for a while and then not here, "the transient objects, the accidental formations that make up the differing species and their exemplars at any one moment, do clearly come to an end, and Bruno understood the dramatic impact of these individual end-moments within the eternal processes of time" (Gatti 2011: 128)) that start and come to an end. That the species or materials in question are fossil fuels was not a secret that was ready to be openly unveiled in *Twelfth Night*. Thus, Shakespeare puts, near the beginning of the play, (as he also does in *Hamlet*), a reference to secrecy and cloaking (Hermeticism may be compared to steganography, the art or practice of concealing a message within another message or image---but it is good to covertly signal the presence of a secret). This occurs when Duke Orsino tells Viola (disguised as Cesario) about "the book of his secret soul":

Orsino: Stand you awhile aloof, Cesario
 Thou know'st no less but all. I have unclasp'd
 To thee the book even of my secret soul...(Evans 1974: 411) (I.iv.12-4)

But actually everyone in both Orsino's and Olivia's households clearly knows about Duke Orsino's passionate but one-sided love for Olivia. If so then, what is this deep secret? It is not disclosed openly, as I said. Yet the word "book", like the later references to the mysterious and heretical "text", indicates a subtle reference to an 'author' as well: it is Orsino conveying a hidden identity for himself as Shakespeare in the allegory and signaling that more hidden Hermetic elements, the hidden presence of Bruno's *Gli Eroici Furori*, a real heretical text, are also present in the play.

IV. The Sun

The character who plays the sun figure in *Twelfth Night* is Olivia, the one who gets associated with "the air" directly when her name is first mentioned. Significantly, it is Orsino who says:

O, when mine eyes did see Olivia first,
 Methought she purg'd the air of pestilence! (Evans 1974: 408) (I.i.19-20)

Sunlight is a well-known anti-bacterial agent and germicide. A few lines later, Olivia is still the topic, this time, associated with "the element" (the footnotes explain that this means 'the sky') and "heat" (the

footnotes explain that this rare usage of heat refers to the “course of the sun” or “progress of the sun”). A messenger character named Valentine returns from paying a visit to Olivia’s household:

So please my lord, I might not be admitted,
But from her handmaid do return this answer:
“The element itself, till seven years’ heat
Shall not behold her face at ample view;
But, like a cloisteress, she will veiled walk. (Evans 1974: 408) (I.i.23-7)

Olivia keeps a veil in front of her face, and a critical but oblique comment on her action, appropriately veiled, comes from Sir Toby Belch, who asks his friend Sir Andrew Aguecheek why the latter does not reveal his dancing talents: “Wherefore are these things hid? Wherefore have these gifts a curtain before ‘em?....What dost thou mean? Is it a world to hide virtues in?” (Evans 1974: 411) (I.iii.125-8). (For Shakespeare the dynamic of humans to choose fossil fuels was comparable to the Vice-Virtue Mankind dynamic of a morality play; the sun appeared as the Virtue; though the Vice, fossil fuels, was completely irresistible.)

If Olivia is the sun economy, then, of course, the veil she wears (presumably it is black since she is in mourning) can stand for the coal smoke shrouding the London sky and hiding the sun. But Olivia’s veil can also simultaneously refer to the last stanzas of *Gli Eroici Furori*, where the nine philosophers sing (twice) “The hidden is unveiled and open stands” (Bruno 1585, translation 1889: 122). In this sense, Twelfth Night, besides showing the cosmic sun/coal allegory, strongly seeks to show the process of questing and trying to understand hidden things, such as the cosmic relationships that sustain material realities on earth.

Much later in the play, near the end, when Orsino sees Olivia (for the first time in the play), he says, “Here comes the countess, now heaven walks on earth” (Evans 1974: 436) (V.i.97). This sort of cosmic imagery echoes the way that Sebastian wonders at his good fortune after meeting Olivia: “this is the air, that is the glorious sun.” (Evans 1974: 434) (IV.3.1) Olivia is our planet, particularly as it is powered by the sun, as it is the sun which is the longer term, more basic, and more powerful influence than fossil fuels. The concept of “sun figure” here means the relationship: Planet Earth+ Sun. As a unified idea, it can include everything on Planet Earth too. We can even call her the Cosmos or the Truth of the Cosmos, since Shakespeare was particularly concerned with a certain cosmic truth: eventual fossil fuel depletion and the return of the sun to prominence.

V. Man

Before he meets Olivia, Sebastian in his distress is a representation of collective humanity as it reaches the fossil fuel endgame (which could last decades or centuries or millennia or more). It is important

to note that Sebastian's overriding concern is not himself but Antonio's welfare:

Antonio: Will you stay no longer? Nor will you not that I go with you?

Sebastian: By your patience, no. My stars shine darkly over me. The malignancy of my fate might perhaps distemper yours; therefore I crave of you your leave, that I may bear my evils alone. It were a bad recompense for your love, to lay any of them on you. (Evans 1974: 415) (II.i.3-8)

Sebastian is then shown in a good and unselfish light, and this is in accordance with the basic fact that he has, of course, done nothing morally wrong and nothing to deserve his dire straits. In the cosmic play, where he is "mankind", this blamelessness symbolizes a slightly different idea: that mankind has acted as a natural creature in interaction with a natural resource (coal); the conclusion, as the fossil fuels deplete, is not mankind's fault, but just part of what Bruno calls "vicissitudes".

VI. "Hang him, foul collier!"

Malvolio has a few clear associations. Maria compares him to "a pedant that keeps a school i' the church" (III.ii.75) and describes him as "a kind of puritan" (Evans: 1974, 418) (II.iii.143), and Malvolio's puritanical associations are underlined strongly in one of the most famous lines in the play in the retort by Sir Toby Belch directed at Malvolio: "Dost thou think because thou art virtuous there shall be no more cakes and ale?" (Evans 1974: 418) (II.iii.114-6)

But there are two less clear, more hidden, less famous and more strategic, Hermetic and subtle ideas associated with Malvolio. They occur in an important stretch of comic dialogue in Act II, scene iii. Olivia, having been approached by the cross-garter'd Malvolio, has decided that he may be psychologically unwell. She leaves the scene and then Sir Toby, Sir Andrew and Maria arrive and express concern, well feigned, that Malvolio may be possessed by the devil, and that this is the reason for his insanity. The notion that Malvolio is vaguely a puritan meshes logically with the idea to accuse of him of being bewitched since puritans made it one of their duties to exorcise the possessed. In general, the play, belonging to the world of the Elizabethan theater, has a logical reason for this treatment of puritans, who were always trying to close theaters and who campaigned against holidays and feast days.

But underneath this historical idea, Shakespeare uses repetition, implied association and ambiguity to add two more subtle identities to Malvolio. One is "the devil" and the other, much more deeply hidden, is "coal". Verbal techniques are employed to transmit these identities: certain words in a scene get apprehended and emphasized and 'stick to' Malvolio, the center of attention (unless it is the devil, and thus they amount to the same, as I will show):

Enter Toby, Fabian, and Maria

Sir Toby: Which way is he, in the name of sanctity? If all the devils of hell be drawn in little, and Legion himself possess'd him, yet I'll speak to him.

Fabian: Here he is, here he is. How is't with you, sir?

Malvolio: Go off, I discard you. Let me enjoy my private. Go off.

Maria: Lo, how hollow the fiend speaks within him! Did I not tell you? Sir Toby, my lady prays you to have a care of him.

Malvolio: Ah ha, does she so?

Sir Toby: Go to, go to; peace, peace, we must deal gently with him. Let me alone. How do you do, Malvolio? How is't with you? What, man, defy the devil. Consider, he's an enemy to mankind.

Malvolio: Do you know what you say?

Maria: La you, and you speak ill of the devil, how he takes it at heart! Pray God he be not bewitch'd!

Fabian: Carry his water to th' wise woman. ;

Maria: Marry, and it shall be done to-morrow morning if I live. My lady would not lose him for more than I'll say.

Malvolio: How now, mistress?

Maria: O Lord!

Sir Toby: Prithee hold thy peace, this is not the way. Do you not see you move him? Let me alone with him.

Fabian: No way but gentleness, gently, gently. The fiend is rough, and will not be roughly us'd.

Sir Toby: Why, how now, my bawcock? How dost thou, chuck?

Malvolio: Sir!

Sir Toby: Ay, biddy, come with me. What man, 'tis not for gravity to play at cherry-pit with Sathan. Hang him, foul collier!

Maria: Get him to say his prayers, good Sir Toby, get him to pray. (Evans 1974: 428)

(III.iv.84-119)

Beyond the obvious comic set-up, the words "Sathan", "fiend", and "Devil" are used collectively 6 times; it's quite repetitive. Then Sir Toby switches to using terms such as the ridiculously endearing and familiar "bawcock", "chuck" and "biddy" since (with intentional ambiguity) he may either be addressing the devil (who is implied to be located inside Malvolio, since Malvolio is 'possessed' by him), or he may be addressing Malvolio: "Come with me" can be understood to either mean that the devil should emerge from the body of Malvolio which it is possessing, or that Malvolio himself should go with Sir Toby for further care and treatment. Once the identity of Malvolio has been properly conflated and confused with the identity of the devil, Sir Toby cries out, in the emotional climax of the sequence, "Hang him, foul collier!"

The first question is why do we see the strange use of this word “collier”, when there is no coal mine in sight, and none of the characters has such a job? The footnote in *The Riverside Shakespeare* explains that “Devils were always represented as coal-black, and they worked in a hell-pit” (Evans 1974: 428). It does seem there was an old association with coal mines and hell in Britain. In *Coal: A Human History*, Barbara Freese explains that in the 15th century, coal was extremely disliked for its smoke because the sulfur “---commonly known as brimstone---characterized the atmosphere of the demonic underworld”, (Freese 2003: 27) and that coal miners commonly held “that the inexplicable disasters that plagued them (in the coal mines) were due to demons and goblins haunting them” (Freese 2003: 47).

Yet, “Hang him, foul collier” actually makes no sense, since logically, Sir Toby cannot possibly, on moral grounds, be exhorting the devil to “hang” Malvolio, nor can he logically be addressing Malvolio as a “foul collier”, since as we have seen above, it is only the devil who is associated with coal and coal mines.

Therefore, what Sir Toby probably actually means to say is “Hang him, the foul collier”, meaning “(You) Malvolio, hang him, the foul collier (Satan)”. Yet, the little word “the” is left out, and it seems a minor point, since Sir Toby is so emotional (or pretending to be so) by now. Yet, the little mistake, along with that odd word “collier” is just strange enough to register in the mind---a question mark, a tripwire, a puzzlement, (like the non-secret secret Orsino refers to with Viola)---and turn Malvolio into the collier.

I have established that Shakespeare deliberately conflated or muddled the identities of Malvolio and the devil by having Sir Toby use the terms “biddy” and “chuck” to address both simultaneously and ambiguously. So, by the time Sir Toby passionately cries out, “Hang him, foul collier!”, the term “collier” can (within the logic of the language construction at least) refer to Malvolio, as well as to the devil. In an extremely subtle way, the world of coal, the coal mining process and coal miners all become associated with Malvolio for just a brief, but very emotional and dramatic instant.

This interpretive methodology based on tiny unobtrusive details may seem unusual, but noted Shakespeare critic Stephen Booth has called for scholars of Shakespeare to pay more attention to “the experience of virtually muffled wordplay and of patterning that does not obtrude upon one’s consciousness” (Rosenbaum 2006: 456) and he asserts that there is in Shakespeare’s plays a “subliminal consciousness of connection” that is “more valuable and should be more highly valued than the experience of witty connections that invite notice.” (Rosenbaum 2006: 456) Booth wants Shakespeare scholars to:

“pay attention to the ‘ideational static’ generated in Shakespeare’s plays, by substantively insignificant, substantively inadmissible, substantively accidental linguistic configurations----configurations in which lurk topics foreign to the sentences in which we hear them”. (Rosenbaum 2006: 456-457)

“Hang him, foul collier!” is not the only allusion to the world of coal in *Twelfth Night*. There are at least five others and they are all associated with Malvolio. The first occurs just 43 lines before “Hang him,

foul collier” when Malvolio is fatuously imagining that Olivia loves him: “I have lim’d her, but it is Jove’s doing, and Jove make me thankful!” (Evans 1974: 428) (III.iv.74-5) Lime kilns were, at this time, one of the most common commercial uses of coal for fuel. In addition, immediately following the “Hang him, foul collier” line, (by now Malvolio has left the stage) Sir Toby and Maria use the words “taint”, “infection”, “dark room” and “out of breath” in casual conversation about their successful ploy:

Sir Toby: His very genius hath taken the infection of the device, man.

Maria: Nay, pursue him now, lest the device take air and taint.

Fabian: Why, we shall make him mad indeed.

Maria: The house will be the quieter.

Sir Toby: Come, we’ll have him in a dark room and bound. My niece is already in the belief that he’s mad. We may carry it thus, for our pleasure and his penance, till our very pastime, tir’d out of breath, prompt us to have mercy on him...(Evans 1974: 429) (III.iv.129-39)

The words “infection” and “out of breath” can be references to the unhealthy effects of coal smoke on the lungs of Elizabethan Londoners: lung ailments and lung disorders killed “multitudes” (Freese 2004: 38), while “taint” and “dark” may be subtle allusions to the pollution that could be seen in the London air. All the allusions to coal are clustered in the same scene as “Hang him, foul collier”, giving impact and power to them together collectively.

In fact, when Malvolio is next seen (in Act IV, scene ii), he is bound in a dark room, a symbol, probably, for Londoners absolutely dependent on coal.

VII. Malvolio and Giordano Bruno

Malvolio also becomes the scapegoat who undergoes the same punishment that Giordano Bruno received: to be locked up in a dark room and (among many other punishments, of course, in the case of Bruno) catechized on his theological stance on the concept of the soul. Shakespeare may have recognized in himself such a degree of emotional suffering related to Bruno’s violent and public execution (Bruno’s tongue was pierced with a brace on the way to the Campo dei Fiori in order to prevent him from speaking before he was tied to a stake and set on fire) that Shakespeare may almost have felt the world was a place of “madness”: the word “mad” appears again and again in this play. More importantly, many characters either call themselves “mad” at some point or describe another character as “mad”.

VIII. A Mummer’s Play

The basic action of the play is a cure which lifts the veil away from the sun, allowing it to shine once

again. The folk play with a cure at its center is the Mummer's play with ritual origins "in the fertility rites and agrarian festivals of pre-feudal and pre-Christian village communities" (Weimann 1978: 17). Robert Weimann describes the interior structure of the Mummer's Play as follows:

The basic four-part structure of the play begins with an introduction in which one of the actors addresses the surrounding audience asking for room to play and requesting, sometimes, their attention as well. This is followed by the hero-combat, in which two protagonists (often St. George and the Turkish Knight) appear to boast of their strength and engage in battle; the defeated player is subsequently wounded or killed. A doctor, usually assisted by an impudent young servant, is then summoned to heal the fighter's wounds or resurrect him from the dead. A number of comic characters appear in the last part of the play, which ends finally with a collection and another address to the audience. (Weimann 1978: 15-16)

By the time he wrote *Twelfth Night*, Shakespeare could more freely adapt this form, so what is left in the later comedy is only the important cure itself and the doctor and the impudent young assistant, although the request for "room to play" may be seen in the request by Viola to address Olivia alone. Actually, the doctor, Orsino, does not participate first-hand in the cure scene itself. The impudent young assistant, as his proxy, "saucy" (Evans 1974: 414) (I.v.196). Viola, manages this herself. The verbal exchange between Olivia and Viola, a cosmic cure scene (I have already covered it in relation to the similarity between Olivia and the goddess Diana as Diana is portrayed in *Gli Eroi Furori*, but I need to present it again here) is very significant and relays the secret identity of Olivia in many Hermetic ways.

Olivia: ...but we will draw the curtain and show you the picture. Look you, sir, such a one I was this present. Is't not well done?"

Viola: Excellently done, if God did all.

Olivia: 'Tis in grain, sir, 'twill endure wind and weather.

Viola: 'Tis beauty truly blent, whose red and white Nature's own sweet and cunning hand laid on.
(Evans 1974: 414) (I.v.233-249)

Disparate words such as, "grain", "Nature", "wind and weather", when taken together (in performance the words, which are nouns, become apprehended images reaching the audience in a sequence) add up to a vision of the vast outdoors. "God", used, for example in the Nurse's line when she calls Juliet into the stage ("What lamb! What ladybird! God forbid!"), or when Hamlet greets the players ("Pray God, your voice, like a piece of uncurrent gold, be not crack'd within the ring") transmits the sacred dimension of the sun. The word "God" seems incidental in all three cases, in the sense that in none of them does this word have a serious or technical theological connotation. But for this very reason, the usage of the word is suited to

delivering a simple message: for Shakespeare, the sun, the star which ultimately powered the planet, had a sacred dimension. The cure us the release of Olivia from the veil hiding her true nature, or what Shakespeare wishes us to imagine is her true nature.

Finally, Viola explains how she would woo Olivia if she loved her. Once again, there are the words “elements” and “air” (twice) which are so important when they occur in reference to Olivia.

Viola...Hallow your name to the reverberate hills,
And make the babbling gossip of the air
Cry out “Olivia” O, you should not rest
Between the elements of air and earth
But you should pity me! (Evans 1974: 415) (II/i.272-6)

The dialogue in this scene then secretly or Hermetically transmits the cosmic and solar dimension of Olivia, great nature. We get an image of reverberate hills, grain, nature, air, earth, God, wind and weather. The sun itself can be easily supplied by the mind as it subconsciously contemplates this poetic and earthy scenery.

Furthermore, the last song (the song of the ninth philosopher) in *Gli Eroici Furori*, also contains this sort of wide, natural and raw earth scenery coupled with the image of “the hidden” being “unveiled”:

The hidden is unveiled and open stands
Therefore deny not, but admit the triumph,
Incomparable end of all the pains
Of field and mount,
Of pools and streams and seas,
Of cliffs and deeps, of thorns and snags and stones. (Bruno 1585, translation 1889: 123)

What can we say about the fact that Olivia’s unveiling occurs not with Sebastian (who I have said is parallel to the nine philosophers who appear at the end of *Gli Eroici Furori*), but with Cesario, his disguised twin? In a sense, in *Twelfth Night*, the unveiling seems to occur quite early compared to its vague reference at the very end of *Gli Eroici Furori* (where there is no actual unveiling of anyone, only the urn is opened).

Therefore, one answer is that Shakespeare manipulated the concept and placed the unveiling where he wished, long before Sebastian meets Olivia. It is his personal maneuver and personal touch.

IX. Bruno's Distinct Presence in *Twelfth Night*

Because Bruno's ideas and what he stood for are little known, I would like to quote the concluding page from Hilary Gatti's essay "Why Bruno's 'A Tranquil Universal Philosophy' Ended in a Fire":

So, in what terms can we define exactly the final stand taken by Bruno in Rome in those dramatic days that opened the jubilee year of 1600, bringing with them a new century in the Christian era? Help can be found in attempting this definition by consulting the thought of a modern Thomist such as Jacques Maritain. For the twentieth-century French philosopher, religious liberty clearly represents a problem. No one would wish to deny the importance of Maritain's commitment to human rights, or the influence on his thought of American democracy with its principles of pluralism. Nevertheless, for Maritain, such principles have become necessary only because the modern world has lost sight of the straight and narrow Christian way. The mixed city of modern liberalism, writes Maritain, in his *Essay on Liberty*, must necessarily tolerate "les divisions religieuses que le le progress du temps, et sa malice, ont enscrites dans l'histoire du monde" {the religious divisions that the progress of time in its malice, has written into the history of the world}. Liberty there must be, but, for Maritain, as far as religious liberty is concerned, it is essentially what he calls "la liberte de l'erreur" {the liberty to make mistakes}. Over three centuries earlier, however, Bruno had argued that there is no error in liberty, particularly not religious liberty. His philosophy inquires into the gods of the ancient world, the gods of the newly discovered new world, the God of Islam and the God of Israel, as well as the God of Christian religion, both in the Catholic and the Protestant formulations. That is to say, Bruno, together with a small number of other sixteenth-century humanists, thought of religious pluralism as an essentially positive value. His God is a God of infinite variety. That is why he could claim his philosophy as a tranquil universal philology: a way of reading the natural world anew according to its differences. For these differences were, for Bruno, none other than the multiple traces of a divine presence through which the heroic mind chooses to pursue the principle of unity, the monad: the metaphysical foundation of the infinite facets of being to which the philosopher ultimately dedicates his quest. This does not mean that Bruno thought all religious faiths, or indeed all secular societies, were good—he could, on the contrary, be harshly critical. For he would always prefer those religions and those societies that valued universal life and harmony. Ultimately, what Bruno was proposing was a form of philanthropy---a gesture of friendship and peace rather than of violence and hate.

Bruno's symbol of philanthropy was the dolphin---that most gentle of creatures that swims through an ocean of infinitely changing waters, while constantly attempting to reach the light of a sky it can only occasionally glimpse. In a world once again lacerated by religious conflict and war, Bruno's proposal made to the Roman inquisitors is surely as relevant today as it was then. For all he

was asking of them was that they should settle their differences by discussion---by dialogue and debate. That was a dangerous idea in 1600. It is sad to reflect that it can still be a dangerous idea today (Gatti 2011: 320-321).

It is interesting to note that the dolphin image appears vividly and memorably at the beginning of *Twelfth Night*, when the Captain, trying to give hope to Viola that Sebastian may still be alive, explains that during the storm, he saw Sebastian tie himself onto a strong mast floating on the waves:

.....I saw your brother
Most provident in peril, bind himself
(Courage and hope both teaching him the practice)
To a strong mast that liv'd upon the sea;
Where like Arion on the dolphin's back,
I saw him hold acquaintance with the waves,
So long as I could see. (Evans 1974: 409) (I.ii.11-17)

Knowing the secret and profound reverence that Shakespeare had for Bruno's ideas, and using our knowledge that Sebastian is "mankind" in the cosmic allegory, then the action of Sebastian to use the "mast" (equated with Arion's "dolphin") makes it clear, through symbolism, that Shakespeare regards Bruno's tranquil philosophy of philanthropy as a lifesaver or a productive path forward, particularly at a confusing time (allegorized as the shipwreck). Sebastian's act to "hold acquaintance with the waves" supplies a further Brunian dimension to the act since Bruno described his "tranquil universal philosophy" as "a peaceful swim through the infinite ocean of universal being" (Gatti 2011: 309).

The long passage from the essay by Hilary Gatti which I quoted above shows how extremely unjust the execution of Bruno was, and *Twelfth Night*, especially Act IV, scene ii, where Malvolio is cruelly imprisoned in a dark room and quizzed mercilessly and mockingly about his religious beliefs by his tormentors, is disturbing. The scene shows that Shakespeare seems to have been psychologically shaken by the burning of Bruno.

Bruno's works, such as *Il Candelaio*, always show pedants in an unfavorable light: the mocking of pedants in Bruno is the "Brunian reaction against a culture conceived primarily in 'grammarian' terms as quantity and refinement of words rather than attention to things" (Gatti 1989: 142). By putting the pedantic Malvolio, who embodies so many 'enemy' qualities of Bruno's ideas since Malvolio is a puritan (puritans were not known for religious pluralism), a pedant, and (through coal) an entity who does not participate in heliocentrism, into the situation that Bruno himself had faced in reality, or rather into a nasty parody of it, Shakespeare seems to have wanted to see the tables turned on the stage.

One minor, strange, awkward, and seemingly unnecessary line, a line belonging to Malvolio when he goes to Olivia when he is dressed in yellow stockings and cross-gartered, contains two words, "executed"

and “Roman”, together: “It did come to his hands and commands shall be executed. I think we do know the sweet Roman hand.” (III.iv.37-38) This line, I believe, Hermetically establishes (and established) the play’s connection to Bruno, executed in Rome, for the audience members in Shakespeare’s day who were sensitive to it.

The most important moment in the parodic inquisition arrives when Feste, the clown, dressed as Sir Topas, the priest, quizzes Malvolio, locked and bound in a dark room, on Pythagoras’ view of the transmigration of the soul:

Feste: What is the opinion of Pythagoras concerning wild-fowl?

Malvolio: That the soul of our grandam might happily inhabit a bird.

Feste: What thinks’t thou of his opinion?

Malvolio: I think nobly of the soul and in no way approve his opinion.

Feste: Fare thee well. Remain thou still in darkness. Thou shalt hold the opinion of Pythagoras ere I will allow of your wits...(Evans 1974: 433) (IV.ii.50-58)

Gatti makes it clear that at his trial, Bruno had cited Pythagoras in the context of the Pythagorean doctrine of the “world soul”:

Already, in the crucial third session of the trial at Venice, Bruno had admitted that he considered the universe infinite and eternal, populated by infinite worlds, and governed by a universal providence identifiable with nature herself. He confessed to doubts about the incarnation of Christ and about the Trinity, and he declared that he believed in a world soul according to the doctrine of Pythagoras. (Gatti 2011: 314)

More specifically, Ingrid Rowland writes “Bruno seems also to have thought, like Pythagoras, that souls, once embodied, were immortal, destined to endless reincarnation.” (Rowland 2008: 220-221). In the radical inversion of this idea in *Twelfth Night*, Feste, the fool (a position with no power or social standing), here voices the opinion of the soul that Bruno (and by implication, Shakespeare) hold. The prisoner, Malvolio, holds the ordinary Christian view. Now, on stage, this common viewpoint is ‘heresy’, the unenlightened viewpoint: “Remain thou still in darkness”, says Feste. The tables have been turned and the stage is revealed to be a place to conduct secret ‘heretical’ reforms to set free Bruno’s ideas in a cloaked manner.

Invested with the attitudes and ideas that were hostile to or inconsistent with Bruno’s thought, Malvolio becomes a scapegoat figure, first punished and then expelled from the festive ‘magic circle’ of the happy and loving couples. His very last line, “I’ll be reveng’d on the whole pack of you” (Evans 1974: 439) (V.i.378) seems to be a shout that embodies Shakespeare’s own desire to revenge Bruno’s execution,

but this desire is paradoxically expressed and dismissed at the same instant as ridiculous. Revenge will not occur by any one hand, but by “the whirligig of time”: “And thus the whirligig of time brings in his revenges” (Evans 1974: 439) (V.i.376), says Feste shortly thereafter, subtly echoing one of the songs of the nine philosophers after the urn has been opened in *Gli Heroici Furori*:

Puts down the high and raises up the low,
He who the infinite machine sustains,
With swiftness, with the medium, or slow,
Apportioning the turning
Of this gigantic mass,
The hidden is unveiled and the open stands. (Bruno 1585, translation 1889: 122)

Olivia dismisses Malvolio with the line “he hath been most notoriously abus’d” (Evans 1974: 439) (V.i.379). This line can just as well Hermetically refer to Giordano Bruno. The line then obliquely and very cleverly becomes a secret but brave and public critique of Bruno’s execution.

X. Feste the Clown

Finally, it should be noted that the clown, Feste, often receives money as payment during the course of the play---this action becomes, through repetition, a comic trope, in fact. Some of the other characters pay him for singing a song, for example, or for his entertaining commentary. In fitting symbolism, he resides with Olivia, the sun figure. The fool, of course, is an ancient dramatic role, associated with ancient pagan festivals and seasonal rituals, which is to say, with the sun. In a subtle acknowledgement of the link between the sun and the fool, Feste says: “Foolery, sir, does walk about the orb like the sun, it shines everywhere” (Evans 1974: 424) (III.i.38-9).

Drama itself, as a direct descendant of the same rituals and seasonal festivals, is also therefore (perhaps when compared to some other human pursuits) ‘close to the sun’, and it is not too difficult to understand that Feste, receiving money for his witticisms and performances, is a spare and ironic sketch of Shakespeare himself, a man engaged in the enterprise of the commercial theater. Shakespeare secretly did organize his plays, “foolery” of a sort, around the sun, which can be said indeed to “shine everywhere” in Shakespeare, whether through the use of Bruno’s nascent thermodynamic heliocentrism or through the use of older dramatic forms, such as Mummers’ plays, which were also sensitive to the seasons. The sun, in Shakespeare, is a critical resource in every respect.

References

- Bruno, Giordano 1584 *The Expulsion of the Triumphant Beast*. Translated by Arthur D. Imerti 1964 (Reprint 2004), Lincoln and London, University of Nebraska Press.
- 1585 *The Heroic Enthusiasts*. Translated by L. Williams 1889 London, Bernard Quaritch.
- Evans, G. Blakemore (ed.) 1974 “Twelfth Night” by William Shakespeare in *The Riverside Shakespeare*. Boston, Houghton Mifflin Company.
- Freese, Barbara 2003 *Coal: A Human History*. London, Penguin Books.
- Gatti, Hilary 1989 *The Renaissance Drama of Knowledge*. London, Routledge.
- 2011 *Essays on Giordano Bruno*. Princeton, N. J. Princeton University Press
- Rosenbaum, Ron 2006 *The Shakespeare Wars: Clashing Scholars, Public Fiascos, Palace Coups*. New York., Random House.
- Rowland, Ingrid 2008 *Giordano Bruno: Philosopher, Heretic*. Chicago, University of Chicago Press.
- Weimann, Robert 1978 (Reprinted 1987) *Shakespeare and the Popular Tradition in the Theater*. Baltimore, MD., Johns Hopkins

日米映画に描かれた国際結婚 —日本人妻とアメリカ人夫—

The International Marriage in Japanese and American Films: Japanese Wives and American Husbands

今泉 容子
IMA-IZUMI Yoko

Abstract

The interracial marriage has been depicted in films as a form of mutual understanding between different cultures and societies. It can also illustrate gender issues that war films, where international conflicts occur, do not necessarily focus on. There are various combinations of the races, but I will take up the combination of American husbands and Japanese wives for this paper, for it is the case that American films of the 1950s invariably chose.

It reflects the fact that, to a certain degree, “Japanese women marrying American or British men outnumbered Japanese men marrying American or British women by 8 to 1,” as the Ministry of Health, Labor, and Welfare of Japan reported in 2003. More fundamentally, it is expressive of the Butterfly fantasy that Japanese women should be desirable because they are more or less like geisha-girls who are trained to repress their own wishes and to please men. Giacomo Puccini’s opera *Madam Butterfly* performed in 1904 certainly contributed to circulating such a fantasy throughout the world.

In 1950s at the dawn of the international marriage films between Americans and the Japanese, Japanese wives were in fact depicted as *Madam Butterflies*. But they have been significantly transformed in films since then. In this paper, I hope to clarify the ways in which international, heterosexual relationships between Americans and the Japanese have been depicted from the 1950s to the present.

Key Words : Film; International marriage; Japanese wife; American husband; Butterfly fantasy
キーワード：映画；国際結婚；日本人妻；アメリカ人夫；バタフライ・ファンタジー

はじめに

いろいろな形の結婚が存在する。もっとも多い形は異性どうしの結婚であり、しかも同じ文化圏内での結婚である。同性婚は数少ないし、国際結婚も、まだ数少ない。結婚の形をめぐる考察は、ガイドブックや体験記の類から¹、社会学や文化人類学の研究²にいたるまで、多くの著作や研究会で成果が発表されてきた。それらのなかには、ジェンダー論を展開するものも数多く存在する。

ジェンダー論にとくに言及したのは、この論文がそれにかかわる研究だからである。映画をジェンダーの視点から研究する流れは、フェミニズムの第二波が1970年代に映画研究と交わったとき確立されて、今日まで存続している。金字塔といえる著作は、ローラ・マルヴェイが映画研究誌『スクリーン』に1975年に発表した“Visual Pleasure and Narrative Cinema”³であり、映画は「男の視線」(male gaze)で描かれている、という映画ジェンダー論を広めるのに貢献した。この論文は、映画ジェンダー論を手がける者が今日でも教科書として読むほど、その重要性が認知されている。

本論文はそうした映画ジェンダー論のうえに立脚し、男の視点から描かれた男女関係が、映画制作年が新しくなるにつれて崩れていくプロセスを提示しようとする。「国際結婚」というテーマにジェンダーの視点を導入した映画研究は、これまで取り組まれたことがない。本論文の斬新性は、そこにある。

国際結婚を研究テーマにする分野として、社会学や文化人類学がまず思い浮かぶはずである。しかし、本論文は映画作品を考察対象とし、現実の人間社会を解明するものではない。長編劇映画(通常「映画」と呼ばれるもの)はフィクションである。たとえ、長方形のスクリーンのなかに現実そっくりの光景が広がろうとも、それは現実ではない。したがって本論文がめざすことは、現実界の国際結婚の諸相を明らかにすることではなく、映画というフィクション空間において国際結婚がどのように描き出され、どのような意義を付与されてきたかを考察することである。本論文の考察の過程で、現実世界のデータに言及することはあっても、それはあくまで現実に呼応する側面があることを指摘するためである。

映画における国際結婚に着眼し、その国際結婚の映像的描写がどのように変化を遂げてきたか

- 1 榎本行雄編著、森川英一・中井正人著 2012『詳解 国際結婚実務ガイド—国別手続きの実際から日本での生活まで—』(明石書店); 国際結婚を考える会編著 2005『国際結婚ハンドブック: 外国人と結婚したら…』(明石書店); 国際結婚を考える会編著 1986『素顔の国際結婚—外国人を夫にもった女性たちの体験エッセイ集』(ジャパントイムズ)。
- 2 濱野健 2014『日本人女性の国際結婚と海外移住——多文化社会オーストラリアの変容する日系コミュニティ』(明石書店); 河原俊昭・岡戸浩子編著 2009『国際結婚 多言語化する家族とアイデンティティ』(明石書店); 竹下修子 2000『国際結婚の社会学』(学文社); 大沢周子 1989『バイリンガル・ファミリー: 国際結婚の妻たち』(筑摩書房)。
- 3 Laura Mulvey 1975 “Visual Pleasure and Narrative Cinema,” *Screen* Volume 16(3) (Autumn), pp.6-18. この論文は、のちに以下の著作のなかにリプリントされている。Laura Mulvey 1989 *Visual and Other Pleasures* (Palgrave Macmillan)。

を解明すること——それが本論文の目標である。言い換えれば、映画研究の分野において国際結婚のテーマをもつ映画作品分析し、映画が制作された時代ごとに国際結婚の描写が異なってくることを意味を追究することが、目標なのである。そこに、さらに日米映画の比較の視点を導入するのである。

本論文で考察する映画は、国際結婚のテーマに触れていれば何でもよい、というわけにはいかない。作品としての完成度が高く、興業的に認知度が高い作品が考察対象になっている。言い換えれば、映画賞を獲得したような作品であり、キャンノンとして認知されたような作品を、本論文の射程範囲に入れるのである。そうしたキャンノンの映画作品群こそが、映画史を形成しているのであるから。

選定された映画作品を考察するとき、わたしが用いる方法は、おもにショット分析である。ショット分析とは、本来動く芸術である映画の一つ一つのコマを静止画にして、その静止画をあたかも絵画を分析するように、映画文法を駆使しながら意味をすくい取る分析方法である。しかし、映画には台詞がある。台詞の分析には、ショット分析とは異なった分析方法が用いられる。それは文学研究で用いる言語分析であり、作品解釈に役立つ方法である。そうした絵画分析方法と文学研究方法を統合した分析方法が、本論文では試みられる。

1. アメリカ映画における「国際結婚映画」というジャンル

国際結婚というテーマは膨大である。国籍の組合せが多数存在するからである。ここでは、日本とアメリカの組合せに限定し、「日本の女」が「アメリカの男」と結婚する（しそうになる）ケースを考察したい。日本人とアメリカ人が結婚する場合、映画に描かれるほとんどのケースは、日本の女とアメリカの男の組合せだからである。

これはある程度、日本人の国際結婚の実態を反映していると言える。厚生労働省が公開している「夫妻の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」によると、2009年にアメリカ人と結婚した日本の女の数、アメリカ人と結婚した日本の男の数の約8倍であるし、1970年にまで遡ると約21倍という高値を示しているのである⁴。終戦直後の1950年代は報告に入っていないが、アメリカ人と結婚した日本の女の数値はさらに高かったであろう。

4 1970年に「夫日本・妻外国2,108人」のうち妻の国籍「米国75人」、「妻日本・夫外国3,438人」のうち夫の国籍「米国1,571人」。それが2009年には「夫日本・妻外国26,747人」のうち妻の国籍「米国179人」、「妻日本・夫外国7,646人」のうち夫の国籍「米国1,453人」。以下に「夫妻の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」の表のうち、日本人・アメリカ人に関連する部分を抜粋・再構成して提示する。

国籍 \ 年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2009年
夫日本・妻外国	2,108	3,222	4,386	7,738	20,026	20,787	28,326	33,116	26,747
そのうち妻の国籍＝米国	75	152	178	254	260	198	202	177	179
妻日本・夫外国	3,438	2,823	2,875	4,443	5,600	6,940	7,937	8,365	7,646
そのうち夫の国籍＝米国	1,571	631	625	876	1,091	1,303	1,483	1,551	1,453

再構成前の資料の出典：厚生労働省・婚姻「第2表 夫妻の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suii09/marr2.html>（2014年9月30日確認）。

もっとも、「日本の女」と「アメリカの男」の組合せが典型である背景には、20世紀初頭にジョコモ・プッチーニ（Giacomo Puccini）のオペラ『蝶々夫人』（*Madam Butterfly*）⁵ が流行したことによって広まったバタフライ・ファンタジーがあることは、明白である。バタフライ・ファンタジーとは日本の女に関する誤った思い込みのことであり、日本の女たちは自分の希望や欲望を抑え、男を喜ばせることを本領とする芸者的存在であるという女性観をさす。

日本の女とアメリカの男が恋愛する（結婚する）テーマをもつ映画が、堰を切ったように出現しはじめたのは、1950年代のアメリカにおいてである。アメリカ映画における日本人の出現は、1915年には早川雪舟がサイレント映画『チート』（セシル・B・デミル監督）で主演をつとめたことがよく知られているように、かなり早くから実践されていた⁶。しかし、日本人が出現するだけでは国際結婚にならない。婚姻関係のテーマが加わって国際結婚が描かれるようになるのが、1950年代だったのである。日本領土に滞在するアメリカ人の人口増大を背景に、日本に一時滞在するアメリカの男がマダム・バタフライを見つけて結婚にいたるパターンをもつアメリカ映画が、この時期につくられた。国際結婚はアメリカ映画のひとつの有望なテーマになっていく。そうした国際結婚が出てくる映画を、本論では「国際結婚映画」という言葉で括り、「アルツハイマー映画」や「芸者映画」といった言葉と同じく、ひとつの映画グループとして考察したい。

1950年代のアメリカでつくられた国際結婚映画のうち、本論文で考察する作品は1956年のダニエル・マン（Daniel Mann）監督作品『八月十五夜の茶屋』（*The Teahouse of the August Moon*）、1957年のジョシュア・ローガン（Joshua Logan）監督作品『サヨナラ』（*Sayonara*）、そして1958年のジョン・ヒューストン（John Huston）監督作品『黒船』（*The Barbarian and the Geisha*）である。これらの映画に共通しているのは、日本の女がみな、着物をまとって登場することである。なかには洋装の姿も見られるが、そうした女たちも重要なシーンでは着物姿になる。

着物をまとう日本の女と、彼女に恋するアメリカの男。ふたりが登場すれば、あとは決まったプロセスをたどる。そのプロセスは一言で要約すれば、アメリカの男が着物（ゆかた）を身にまとうようになることである。着物をまとったアメリカの男は、日本の女と恋愛関係を成立させたことの目に見える指標となる。ふたりの間に介在するはずの異文化コミュニケーションの問題や人種問題などがどのように解決されていくかを、これから映画ごとに分析していきたい。

5 プッチーニのオペラ『蝶々夫人』（*Madama Butterfly*）は1904年にイタリアのミラノ・スカラ座で初演された。そのオペラは、アメリカの劇作家デーヴィッド・ベラスコが書いた戯曲を台本としている。ベラスコの戯曲にはさらに原作があり、それはアメリカのジョン・ルーサー・ロングが1898年に発表した短編小説（*Madame Butterfly*）である。

6 アメリカ映画のサイレント期・1910～20年代に、すでに早川雪舟をはじめ、ヘンリー・小谷、トーマス・栗原、青木鶴子たちが出演していた。なかでも早川雪舟はトーキーになっても主演作が多く、『東京ジョー』（*Tokyo Joe*, 1949年、スチュアート・ヘイスラー監督）、『東京暗黒街・竹の家』（*House of Bamboo*, 1955年、サミュエル・フラー監督）、『戦場にける橋』（*The Bridge on the River Kwai*, 1957年デーヴィッド・リーン監督、ただし英米合作映画）などの看板俳優だった。

II. 通訳付きで恋愛にいたる軍人と芸者 ——『八月十五夜の茶屋』

『八月十五夜の茶屋』における男女は、バタフライ・ファンタジーを色濃く反映させたものであり、アメリカ軍人と芸者の組合せである。日本駐屯兵フィズビー（出演：グレン・フォード）は滞在地・沖縄の日本人たちから、ロータス・ブロッサムという名前の芸者（出演：京マチ子）をプレゼントされる。彼女は日本語しか話さず、フィズビーは英語しか話さないで、意思疎通はかならずしも容易に行えるわけではない。しかし便利なことに、彼らのあいだには翻訳機のような通訳者サキニ（出演：マーロン・ブランド）が存在し、たがいの気持ちを伝えて仲を取り持つ。

フィズビーは最初、ロータスを疎ましく思い、彼女の行動を理解する気はさらさらなかった。しかし、ロータスは粘り強くフィズビーに身振り手振りで日本の習慣を教えつけ、とうとう彼に着物（ゆかた）を着せ、下駄をはかせ、日本茶を嗜ませる。やがてフィズビーは同僚に「着物のほうがずっと快適だ」と説明するほど、日本に（つまりロータスに）馴染むのである（図1）。また、ロータスが準備した茶会に同僚を招待し、「前に話した芸者の彼女だよ」と自慢する（図2）。

しかしフィズビーに帰国命令がくだると、彼は着物を脱ぎ、元の服装にもどる。着物を脱ぐことは、恋人として身につけていた彼女を脱ぎ捨てることでもある。最後にもう一度、ふたりだけの時間をもつフィズビーとロータス。しかし、そうしたプライベートなときでさ

え、フィズビーはもはや着物を身につけない（図3）。ロータスは「フィズビーさん、わたしと結婚してちょうだい」と訴え、通訳者サキニに「訳して」と頼むが、フィズビーはピンカートンのように、マダム・バタフライを日本へ残して自分だけアメリカへ帰ることを決心する。マダ



図1



図2



図3

ム・バタフライはそれに従うしかない。

『八月十五夜の茶屋』では主人公の男女は結婚しないが、国際結婚映画の基本的な二つの要素を検出できる。まず、アメリカの男が着物を身につけるようになること。それこそが、彼が日本の女を特別な存在として受入れたことの指標である。つぎに、ふたりの人生の進路（結婚するか、しないかを含めて）を決定するのが男であって、女はマダム・バタフライのように男の決定に従っていること。

III. 国際結婚を妨げる外部からの圧力——『サヨナラ』



図 4



図 5



図 6



図 7

国際結婚映画の基本的な二つの要素を備えている名作映画は、『サヨナラ』である。この映画には、主要なカップルが二組登場する。一組はアメリカ兵ケリー（出演：レッド・バトンズ）と日本の専業主婦カツミ（出演：ナンシー・梅木）。もう一組はアメリカ兵ロイド（出演：マーロン・ブランド）と松林歌劇団のスター団員ハナオギ（出演：高美以子）。映画がはじまった時点で、ケリーとカツミはすでに恋愛関係にあり、まもなく結婚する。つまり、ケリーは映画の最初から、着物（ゆかた）を着てカツミに会っているのである。彼らの新居にケリーの同僚ロイドが訪れると、日本家屋の畳の空間で着物をまとうケリーとカツミがしっかりと馴染んでいることがわかる。それにたいして、洋装のロイドが浮き上がっていることもわかる（図4）。このロイドの着衣が、洋服から着物へ変化するところが重要である。ケリーとカツミの新居で、歌劇団の花形ハナオギと言葉を交わす機会を得たロイドは、まもなく彼女と恋愛関係を結ぶ。するとキスするときの着衣も変化し（図5－6）、ロイドがまたたく間に洋装から和装への変化を遂げたことがわかる（図7）。

『サヨナラ』では二組の国際結婚が成立するが、それが持続するかどうかに関しては、道がきっぱりと分かれる。ケリーは帰国命令を受け取るが、日本人妻はアメリカに入国を許さないと

いう軍部の規則にしたがって、カツミと強制的に別れさせられそうになる。ケリーの強制帰国が今日というとき、ふたりは相思相愛のカップルが引き裂かれる運命になったときの純日本的常套手段にうたてる。すなわち、心中を決行するのである。ふたりがふとんの上で息絶えているのを、ロイドが発見する。ケリーとカツミを見習って、ハナオギとの恋愛を結婚へと開花させようとしていたロイドは、大きな衝撃を受ける。皮肉なことに、ケリーとカツミの心中が決行された日、軍部の規則が変わって日本人妻のアメリカ行きが今後は許可されるという知らせが、ロイドに届く。彼はハナオギを妻としてアメリカへ連れ帰る決意をかためる。ロイドとハナオギは、外部の圧力に「さよなら」を告げて、アメリカでの結婚生活へと向かっていくのである。

ここまで考察してきたアメリカ映画において、国際結婚の障害になるものは、外部の圧力であった。『八月十五夜の茶屋』のフィズビーとロータスは、帰国命令という外部の圧力によって恋愛関係に終止符を打たれた。『サヨナラ』のケリーとカツミも、同様の帰国命令によって引き裂かれ、自分たちの命まで終わらせることになった。そのような外部の圧力が弱まったときだけ、『サヨナラ』のロイドとハナオギのように、国際結婚の成功例が見られるのである。

しかし、ロイドとハナオギの国際結婚の背後にも、じつは問題がいくつも潜伏している。まず、ロイドの帰国が決まったとき、彼はハナオギにいっしょにアメリカへ渡るように頼むが、ハナオギは躊躇する。看板スターとしてキャリアを積み上げてきたマツバヤシ歌劇団を去ることはできない、という。年をとって踊れなくなったら、主任教師として歌劇団でダンスを教えることまで約束されている、というのである。困惑するハナオギを見て、ロイドは強引に二者択一を迫る——家庭をとるか、仕事をとるか。彼はさらに迫る。「なぜ僕よりマツバヤシがそんなに大事なんだ？」（“I want you to tell me now why Matsubayashi means more to you than I do.”）

家庭か仕事か、という古くからある二者択一を、男は女に押しつけたのであるが、この問題はジェンダー論として展開されずに終わる。それはまるで存在しなかったかのように、忘れ去られてしまう。ハナオギがつぎに登場したときには、当たり前のように自分の輝かしいキャリアを捨てて、ロイドといっしょにアメリカへ行くことを決めているのである。

もうひとつ、ハナオギが提起している問題がある。それは人種的、文化的な問題である。彼女はふたりの文化的背景が異なっていることは、結婚の障害になるだろう、と心配している。「わたしたちは違う世界にいるし、違う人種だわ。」（“We are in different worlds, come from different races.”）しかしその深刻な問題にたいして、ロイドは何も答えることをせず、「僕と結婚してくれ」（“I want you to be my wife”）と言って話題をずらす。さらに誕生する子どもたちの人種問題やアイデンティティ問題についてハナオギが不安を吐露すると、いとも簡単に「半分日本人で半分アメリカ人」（“half Japanese and half American”）「半分黄色で半分白色」（“half yellow and half white”）と片づけている。そしてふたたび「僕といっしょに来てくれ」（“I want you to come with me now”）と迫っている。彼にとって最大の関心事は、ハナオギが結婚して妻になってくれること。その結婚がもたらすかもしれない諸問題は、どうでもよいのである。ジェンダー論や異文化・異民族論に発展するはずの問題提起は、すべてロイドによって抹消されている。

ロイドだけではない。キャラクターの設定自体が、そうした問題を消し去る傾向にある。たと

えば、ハナオギは流暢な英語を話すため、英語が理解できないという異文化コミュニケーションの壁は最初から存在しない。英語が苦手な『八月十五夜の茶屋』のロータスには、通訳者がいつも付いているため、言葉の問題は浮上しない。

ロイドとハナオギの幸福な結合は、こうした国際結婚の問題を露呈することなく、また強大な軍部的・政治的な外部の圧力によって崩壊することなく、みごとに花開くのである。ジェンダー問題が取り上げられるようになるのは、1980年代以降の映画まで待たなければならない。

IV. ハリスとお吉のロマンスも崩壊——『黒船』

1950年代のアメリカにおける国際結婚映画の例として、最後に『黒船』を取り上げることによって、これまで明らかにしてきた要素が検出できるかどうかを確認していきたい。

『黒船』に登場するアメリカの男も、着物を身につけるようになる。そしてやはり、日本の女にたいする熱い思いを口にする。アメリカの男は日本史に名前をとどめた実在のタウンゼント・ハリス（出演：ジョン・ウェイン）であり、日本の女もまた実在した芸者お吉（出演：安藤永子）である。ふたりは歴史の上では短い接点しかもたず、けっして恋愛関係に陥る状況にはなかったが、ジョン・ヒューストン監督はふたりの関係をロマンスとして演出した。

ハリスの身の回りの世話係として、お吉はハリスの屋敷へあがる。ハリスはすぐにお吉に魅了され、最初は洋装だったのが（図8）、やがてお吉のそばでは着物を身につけるようになる（図9）。着物が彼の気持ちを示しているが、彼は言葉でもはっきりと結婚の意志をお吉に告げる——「すぐに戻ってくる。そしてその後はずっといっしょにいたい。」（“I’m coming back to you, Okichi. And that’s the last time we’ll ever be separated.”）彼は湖のほとりに建てる一軒家で、お吉と



図8



図9

いっしょに暮らす夢を語る。

お吉は流暢な英語を駆使する女で、日本の風習をハリスに教えているが、自分の恋愛感情を彼に伝えることはしていない。しかし、やがてハリス暗殺の日本侍が潜入してくることを知ると、暗殺者をみずからの寝室に導いて、ハリスの身代わりに死のうとするほど彼を愛していることが明らかになる。お吉はスパイの役割を担わされていたのであるが、裏切り者となって姿を消すしかなくなる。スパイの任務をお吉に強要した外部の圧力が、ふたりを引き離したのである。

アメリカ映画に日本の女とアメリカの男の異民族婚が描かれるのは、1960年代になると鎮静期を迎える。1962年に『青い目の蝶々さ

ん』(My Geisha)がジャック・カーディフ監督によってつくられ、一見、日米間の男女関係のテーマが継続しているように見えるが、これはアメリカの女が日本人に変装してマダム・バタフライのように振る舞うようすを描いた映画である。もともとアメリカ人どうしの結婚問題を描いているため、国際結婚映画のジャンルには入らない。

アメリカの男と日本のマダム・バタフライの幸福な結合が1960年代になると影を潜めるのは、1960年代にちょうど活発になりつつあった第二波フェミニズムの動きと関連がある。フェミニズムの影響のもとで、日本の女は従順なマダム・バタフライではないことが明白になってきたのである。

V. 国際結婚のモチーフを担う脇役——『日本一の色男』と『男はつらいよ 寅次郎 春の夢』

アメリカ映画において日本の女とアメリカの男の国際結婚のテーマが一時影を潜める1960年代から70年代までの20年のあいだ、日本映画では日米の国際結婚のテーマが登場するようになる。ただしテーマへのアプローチは、アメリカ映画の場合とは大きく異なる。アメリカ映画ではこれまで考察したように、国際結婚が成立する（あるいは成立しそこなう）プロセスが描き出されているが、日本映画ではあっけない描写しか存在せず、本格的な国際結婚映画の開花は1990年代まで待つことになる。

これから考察していくように、主人公（日本人）の周辺に脇役として配置されるアメリカの男が、主人公と関係の深い日本の女と結婚する（あるいは結婚できない）というサブプロットをくりひろげる。日本映画における脇役としてのアメリカの男は、1950年代から増えてくる。『ゴジラ』シリーズ（1954年開始）にも、『日本一』シリーズ（1963年開始）にもアメリカ人の脇役出演が見られる。そうした脇役は、クレジットに表記されないケースが多い⁷。『日本一の色男』（1963年、古澤憲吾監督）にも、そうしたキャラクターが登場する。主人公の光等（出演：植木等）は婚約者トシ子（出演：藤山陽子）の脳腫瘍をアメリカ人の名医に治療してもらうため、裕福な有閑マダムを相手に化粧品セールスの実績を上げて大金を捻出する。そしてトシ子は完治したあとアメリカ人医師を伴って等の前に現れるが、それは等に礼をいうためではなかった。彼女はこう言う——「等さんにはいろいろとご心配かけたけれど、わたしたちはほんとうに愛し合っているのよ。ごめんなさいね」。驚愕で顔が引きつる等（図10）。それを尻目にトシ子はアメリカ人医師のほうへ向きをかえて、親しく微笑み合う（図11-12）。等はうなだれるしかない（図13）。主導権は女が握っている。トシ子は自分の命を救うために奔走してくれた等を捨てて、アメリカの男と結婚する道を選ぶ。この三角関係が示すメッセージは、日本vsアメリカという男どうしの対立

7 アメリカ人の登場がプロット展開上必要となる作品がある。たとえば、『ゴジラ』シリーズの「モスラ」が登場する作品（1961年の『モスラ』や1964年の『モスラvsゴジラ』など）では、アメリカの都市が舞台となったり、アメリカ人が脇役として多数出演したりするが、ほとんどはクレジットに表記されていない。クラーク・ネルソン役のジェリー・伊藤はニューヨーク生まれで、母親ヘイゼルがアメリカ人であるが、日本国籍の俳優としてクレジットに表記されている。



図10



図11



図12



図13

ではなく、日本女がみずからの意志で国際結婚を選び取っていることである。トシ子の相手役のアメリカの男は、その場に立って微笑んでいけばよいだけのチョイ役で、クレジットにも出てこないが、彼女が自分の強い意志で国際結婚を決めたことを証拠だてる存在として重要である。

トシ子の場合は国際結婚が成立したが、日本の女の「あり得ない」というひと言で、その可能性すら否定される映画も出てくる。1979年の『男はつらいよ 寅次郎春の夢』（山田洋次監督）では、日本でビタミン剤の行商をするアメリカ人マイケル（出演：ハーブ・エデルマン）が、寅次郎の妹さくら（出演：倍賞千恵子）に愛の告白をする。英語で“I love you”と短く伝え、さくらは習ったばかりの英単語を使って“Impossible. This is impossible”と応答する。彼女は既婚の身であり、夫以外の男と何らかの関係をもつことは考慮の余地すらないのである。「あり得ない」(impossible)というのは、既婚の主婦が発する当然な反応である。この言葉によって否定されたものは、マイケルという個人というより、彼が思い描く状況そのものである。その状況の核心に、バタフライ・ファンタジーがある。じつはマイケルはさくらへ愛の告白をする直前に、『蝶々夫人』の舞台を見るのである。そこで彼は白昼夢を抱きはじめる（図14）。舞台の上の蝶々夫人が、いつしかさくらになり（図15）、アメリカ海軍士官ピンカートンがマイケル自身になって（図16）、ふたりは熱く抱き合う、という白昼夢である（図17）。マイケルが自分に都合のいいように思い描いたマダム・バタフライは、さくらの「あり得ない」という言葉によって崩れ去るのである。マイケルはアメリカへ帰っていく。

バタフライ・ファンタジーを崩す日本の女を描く流れは、1980年代以降のアメリカ映画にも伝播した。1987年に制作された『リビング・オン・TOKYO・タイム』（スティーヴ・オザキ監督）には、そうした日本の女が登場する。1980年代～90年代のアメリカ映画の例を、つぎに考察していこう。



図14



図15



図16



図17

VI. 英語をしゃべるのに疲れた女——『リビング・オン・TOKYO・タイム』

新しいタイプの国際結婚が、1980年代のアメリカ映画にあらわれるようになる。1987年にスティーヴン・オザキが監督した『リビング・オン・TOKYO・タイム』が、その例である。この映画はアメリカを舞台に、日本から来たキョウコ（出演：大橋美奈子）と日系アメリカ人のケン（出演：ケン・ナカガワ）が登場する。ケンも風貌こそ日本人だが、アメリカで生まれ、英語しか話さず、名実ともにアメリカ人である。

映画の冒頭でキョウコがクローズアップで登場し、観客に向かって自分がアメリカにきた理由を述べる(図18)。この映画が彼女の視点に立って展開していくことを、このオープニング・シークエンスは予告している。すなわち、これから始まる物語（彼女がアメリカ人の男と関係をもつこと）は、彼女の視点から語られることが示されているのである。この映画は女の視点に立脚している。

キョウコとケンはあっけなく結婚する。心優しいケンはまだ会ったことのないキョウコがビザ問題で困っていると聞くと、その解決方法である偽装結婚に同意してやるのである。いっしょに暮らし始めると、彼はキョウコを愛するようになり、ほんとうの夫婦になりたがる。友人たちにキョウコを妻として紹介したり、毎日キョウコをバイト先へ迎えに行ったり、英語の勉強を助けたり、外食に連れ出したりする。しかし、キョウコのほうは大きな壁を痛感しはじめていく。外国語で自分を表現できない、という異文化コミュニケーションの壁である。ケンのことを「とてもいい人」と思っているにもかかわらず、彼女のフラストレーションはどんどん積もっていく。それを彼女は拙い英語で、観客にこう伝える。“He does not understand me, but it is not his fault. I cannot speak my feeling in English. He cannot speak his feeling in Japanese.”

ある日、キョウコは苛立ちを爆発させ、ケンにむかって日本語で話しはじめる。ケンが困惑し



図18



図19

ていると、「わたし、もう英語しゃべるの、疲れちゃった」とコミュニケーションそのものを拒絶する（図19）。そしてさらに日本語で、ケンを責める。「あなただって日本人でしょ。どうして日本語しゃべらないの？」ケンがアメリカ人であることぐらい、キョウコは百も承知しているが、彼に八つ当たりせざるを得ないのである。彼女はまもなく彼の元を去って日本へ帰る。問題の核心が異文化コミュニケーションの失敗であり、結婚の存続は女に決定権があることを、この映画は明示している。

ここには1950年代のハナオギや、カツミや、ロータスや、お吉はいない。また、マダム・バタフライを腕に抱く男も登場しない。文化的・言語的なギャップを痛感する女が、マダム・バタフライにはなり得ずに、みずから決断して行動するのを、男はただ見守り、受け入れざるをえない。それまでのアメリカの国際結婚映画では、いつも男が結論をくだしていたのとは、明らかな違いが見られる。

VII. 「白人の子に近づかないで」——『ヒマラヤ杉に降る雪』

男と女のあいだに亀裂を生じさせる要因は、日本映画とアメリカ映画では大きく異なってくる。その点を、1990年代の日米映画を比較しながら、明らかにしていきたい。

まず、『リビング・オン・TOKYO・タイム』につづくアメリカの国際結婚映画を考察しよう。1990年のアラン・パーカー監督の『愛と哀しみの旅路』(Come See the Paradise)も1999年のスコット・ヒックス監督の『ヒマラヤ杉に降る雪』(Snow Falling on Cedars)も、どちらも第二次世界大戦を背景に設定している。この設定自体、人種・国家間の闘争を暗示するのであるが、じっさいにそれが国際結婚の障害になっていく。そして、当事者がどのように人種問題に向き合うかが、映画のテーマになっていく。ふたつの映画は日系アメリカ人(女)とアメリカ人(男)との恋愛を描いているが、日系アメリカ人といっても「日本人」であるという人種意識が濃厚なケースなので、アメリカにいる日本人とアメリカ人の関係を描いた映画、と定義できよう⁸。

『ヒマラヤ杉に降る雪』にはハツエ(出演：工藤夕貴)とイシュマエル(出演：イーサン・ホーク)が愛し合っているながらも国際結婚にいたらない原因が提示されている。ハツエはイシュマエルへの愛と母の人種的教訓とのあいだで、少女時代からずっと揺れ動いてきた。母は幼いハツエ

8 アメリカにおける「日本人どうし」の結婚を描いた1994年のカヨ・マタノ・ハッタ監督の『ピクチャー・ブライド』(Picture Bride)は、日本人とアメリカ人の結婚と定義できないため、本論文の考察にはふくまない。

の耳に口を近づけて、“Stay away from white boys”（白人の子に近づかないで）とささやく（図20）。母は人種意識のスポークスマンの存在で、口だけ（それもハツエの耳元に置かれた口）の存在になっている（図21）。ハツエは母に反抗して“I don’t want to be Japanese!”（日本人でいたくない！）と叫ぶが（図22）、ついに母の言うとおりに、白人のイシュマエルを捨てることになる。最後の手紙のなかでハツエは彼に離別宣言をする（図23）——“I knew with certainty that everything was wrong. I knew we could never be right together.”（わたしは悟りました。これは間違い。結ばれてはならない、と。）国際結婚は成就せず、イシュマエルは恨みを抱いて生きる。



図20



図21



図22



図23

1990年代のアメリカの国際結婚映画では、人種、異民族問題が大きな障害としてカップルの前に立ちはだかる。1950年代のアメリカ映画で人種や文化や言語の違いが取り上げられなかったのは、パタフライ・ファンタジーゆえであった。男にとって好ましい女性観が形成されるなか、人種や文化の違いを気にかけず、あり得ないほど流暢な英語を話す日本の女たちがスクリーン上に出現したのだった。男たちにカップルの将来を決める主導権が握られている時期には、女たちは人種的文化的な問題に苦悩することなく、男たちの腕に飛び込めばよかったのである。しかし、1980年代をへて1990年代になると、女たちの視点から国際結婚がとらえられ、それまで注視されなかった人種・民族問題が浮上し、彼女たちはそれらに取り組んだのである。

1990年代の日本映画では、国際結婚のテーマはどのように描写されているだろうか。つぎに日本映画の考察へ移っていこう。

VIII. だれもが経験する病気との戦い——『ユキエ』

日本映画とアメリカ映画を「国際結婚」というテーマに関して比較すると、共通点と相違点は明白に見えてくる。1960年代以降、「日本の女」がカップルの将来を決定する力を与えられてい

ることは、日米映画に共通している。しかし、彼女が直面する問題は、アメリカ映画においては人種や言語や文化の違いであるのに対して、日本映画においては人種問題や異文化コミュニケーション問題とは無関係にだれもが経験すること——たとえば相手を愛している／愛していないという感情——に要因があった。これから考察する1998年の日本映画『ユキエ』は、松井久子監督がアメリカ・ルイジアナ州・バトンルージュでロケを行って制作した国際結婚映画であるが、日本人妻とアメリカ人夫に忍び寄る危機はアルツハイマー型認知症というだれもが罹患する病気なのである。

映画の冒頭で、ユキエ（出演：倍賞美津子）のまわりに成長したふたりの男の子と夫リチャード（出演：ボー・スベンソン）が取り囲むように配置され、彼女を中心とした家族の結束が見てとれる（図24）。彼女は父の反対を押し切り、アメリカ人と結婚して、アメリカで生活してきた。その彼女と夫を襲うのは、言語の問題でもなければ、文化の問題でもない。ユキエのアルツハイマー病である。冒頭の明るさとは一転して、アルツハイマー病を発症した彼女は暗い闇のなかに描き出される。彼女が夫と並んで配置されるとき、夫が明るい窓を背景にはっきりした輪郭で撮られるのに対して、彼女はぼんやりした塊として周囲の闇に溶け込んでしまうかのよう



図24

うに撮られる（図25）。この暗い塊は、注視しないと見逃してしまうほど存在が不鮮明であるが、ユキエのアルツハイマー病の現状を暗示していると言える。

しかしユキエは意志の強い女である。アルツハイマー病に屈してしまうことなく、記憶がもどったときに息子や夫にはっきりと自分の意志を伝える努力をしている。息子には自分の病気を「ゆっくりとサヨナラを言うこと」（“slow goodbye”）だと語り、夫には「わたしの故郷はここよ、あなたといっしょに」（“My home is here, with you”）と断言している。

アルツハイマー病を患った病人をどのように介護していくかは、千差万別である。それは個人や家族の問題であって、人種問題や異文化問題ではない。『ユキエ』に描かれた国際結婚カップルを襲ったのは、そうした個人的、家族的レベルで対処すべき問題である。



図25

IX. 「虚しい、もう耐えられない」——『Mr. Pのダンシングスシバー』

1999年の『Mr. Pのダンシングスシバー』の国際結婚カップルにも、個人的な問題が生じる。こ

の映画は、有望な映画監督を発掘するための「サンダンス・NHK国際映像作家賞」を受賞して、田代廣孝監督がつくったものである。アメリカ人（黒人）ブルースと日本で出会い、アメリカ・カリフォルニア州ロサンゼルスで結婚生活を送る日本人ミツコ。この国際結婚カップルにとって障害となるものは何であるかが、ミツコの告白によって明らかになる。ブルースが経営する寿司レストランは繁盛し、順風満帆と思われていた結婚生活であるが、ミツコは自分の苦悩をこう告白する——「虚しい、もう耐えられない」（“I feel empty, I can't stand any longer”）。裕福なモノはどれもこれも「意味がない」（“It's all meaningless”）と断定するときのミツコは、部屋の隅っこに佇み、彼女の存在そのものが闇に飲み込まれそうである（図26）。リッチな生活を送っていても、ミツコの心は暗闇なのである。この苦悩が原因で、夫婦は離婚する。そののち二人が理解し合える機会は訪れるものの、再婚にはいたらない。

ミツコの苦悩は、だれにでも起こりうるものであり、人種問題とは関係はない。『ユキエ』も『Mr. Pのダンシングスシバー』も、異民族的、異文化的問題に巻き込まれるカップルではなく、だれにでもふつうに起こる個人的な問題に直面するカップルを描き出しているのである。

国際結婚の「国際」的要素を表面化させない日本映画。正面からそれらに取り組むアメリカ映画。両者の大きな違いが、今後もそれぞれの国の映画に継承されていくであろうか。それはいずれ解明したい。



図26

X. 今後の展開

本論文では「日本人妻」と「アメリカ人夫」という組合せの国際結婚映画に焦点を絞った。そして国際結婚の描写が日米両国の映画において、相違していることを突き止めた。今後、その相違がどのようになっていくかを追究するため、日米映画の比較研究を継続したい。

国際結婚には日本とアメリカの組合せのほか、さまざまな組合せが存在する。とくに日本映画において、1970年代まではゼロだったのに1980年代以降にすでに数本の作品を記録しているのは、日本とアジアの組合せである。その組合せの国際結婚映画には、映画賞を獲得したキャノンの位置づけの作品例として、『未完の対局』（1982年、佐藤純彌監督・段吉順監督）、『月はどっちに出ている』（1993年、崔洋一監督）、『GO』（2001年、行定勲監督）、『血と骨』（2004年、崔洋一監督）、『パッチギ!』（2004年、井筒和幸監督）などがある。

日本とアジアの組合せの国際結婚映画の出現は、現実の国際結婚の実態をある程度、反映していると言えるかもしれない。なぜなら、たとえば『未完の対局』の組合せである「夫が日本人」で「妻が中国人」という組合せが、現実社会においてどのような統計的推移をたどっているかを見ると、1970年には280件であったのに、約40年後の2009年には12,733件という45倍以上の結婚

件数が報告されているからである⁹。

こうしたアジアに特化した組合せの映画も、しだいにパースペクティヴに入れていき、国際結婚映画の体系的研究を積み重ねていきたい。

本論文で考察した日米の国際結婚映画

制作年	映画タイトル	制作国	監督	出演
1956	『八月十五夜の茶屋』 (<i>The Teahouse of the August Moon</i>)	アメリカ	ダニエル・マン	グレン・フォード 京マチ子 マーロン・ブランド
1957	『サヨナラ』 (<i>Sayonara</i>)	アメリカ	ジョシュア・ローガン	マーロン・ブランド 高美以子
1958	『黒船』 (<i>The Barbarian and the Geisha</i>)	アメリカ	ジョン・ヒューストン	ジョン・ウェイン 安藤永子
1962	『青い目の蝶々さん』 (<i>My Geisha</i>)	アメリカ	ジャック・カーディフ	シャーリー・マクレーン イヴ・モンタン
1963	『日本一の色男』	日本	古澤憲吾	植木等 藤山陽子
1979	『男はつらいよ 寅次郎春の夢』	日本	山田洋次	ハープ・エデルマン 倍賞千恵子
1987	『リビング・オン・TOKYO・タイム』 (<i>Living on Tokyo Time</i>)	アメリカ	スティーヴン・オザキ	大橋美奈子 ケン・ナカガワ
1990	『愛と哀しみの旅路』 (<i>Come See the Paradise</i>)	アメリカ	アラン・パーカー	デニス・クエイド タムリン・トミタ
1994	『ピクチャー・ブライド』 (<i>Picture Bride</i>)	アメリカ	カヨ・マタノ・ハッタ	工藤夕貴 アキラ・タカヤマ
1998	『ユキエ』	日本	松井久子	倍賞美津子 ボー・スヴェンソン
1999	『ヒマラヤ杉に降る雪』 (<i>Snow Falling on Cedars</i>)	アメリカ	スコット・ヒックス	工藤夕貴 イーサン・ホーク
1999	『Mr. Pのダンシングスシパー』	日本	田代廣孝	ナンシー・クワン フランク・マクレー

9 先に引用した厚生労働省の国籍別の婚姻件数の表のうち、該当する数値を抜き出して再構成した表は、以下のとおり。

国籍 \ 年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2009年
夫日本・妻外国	2,108	3,222	4,386	7,738	20,026	20,787	28,326	33,116	26,747
そのうち妻の国籍＝中国	280	574	912	1,766	3,614	5,174	9,884	11,644	12,733
そのうち妻の国籍＝韓国・朝鮮	75	152	178	254	260	198	202	177	179
妻日本・夫外国	3,438	2,823	2,875	4,443	5,600	6,940	7,937	8,365	7,646
そのうち夫の国籍＝韓国・朝鮮	1,386	1,554	1,651	2,525	2,721	2,842	2,509	2,087	1,879
そのうち夫の国籍＝中国	195	243	194	380	708	769	878	1,015	986

The Economics of Pan Africanism: A Political Economy Perspective

MOGES Abu Girma

Abstract

The economic landscape of Africa is clustered with small and fragmented national economies. This economic feature has hampered the emergence and sustainability of integrated continental economic system that has considerable potential to transform the economic, political, and social situation of Africa. Pan-Africanism as an economic and political movement can promote sustainable and vibrant economic system in the continent. However, it takes serious reforms that undo the burden of ineffective and extractive institutional history of the continent. Despite the recent relative improvement in the economic growth performance of African countries, the sustainability of growth and structural transformation process largely depends on the extent to which Africans reform their largely extractive economic and political institutions and pave the way for realizing new growth opportunities. This paper develops a political economy argument on the necessities and challenges of establishing a vibrant and integrated continental economic space and explores new areas of initiatives that would address the limitations of current approaches.

Keywords: Africa; Economic growth; Institutions; Economic integration; Political economy.

I . Introduction

Africa emerged from the ordeals of colonialism with deeply traumatized population, widespread poverty and backwardness, weak economic and institutional infrastructure, dual economic structure within national economies, arbitrarily drawn and fragmented political boundaries, and vulnerability to persistent tension and instability. The 1960s were considered commonly as the decade of political independence of the continent even though the struggle against colonialism and apartheid somewhat continued in different corners of the continent for much longer period. The initial conditions of liberation and the legacy of colonialism throughout Africa left little room for optimism and magnified the daunting challenge that the new African countries confronted and had to address within a fairly short period of time.

The African leaders realized quite early that the nominal political independence of the continent should be backed by genuine economic independence to bring about sustainable economic and social

development in Africa (Nkrumah 1963). The central challenge of African societies and countries was how to initiate and sustain economic growth and development that would eventually ensure their political and social transformation. Should they seek a continental approach, a regional effort, or national development agenda which in due course of time would support a meaningful and sustainable African union and renaissance? What would be the most plausible path to manage the contour of violence and insecurity that was posed not only by the European colonizers and their local sympathizers but also by the historical legacy of ethnic and bilateral conflicts? Would the new leadership and institutional arrangements of the liberation movement be capable of handling the post-independence challenges of the continent or should it be approached from a new perspective? These issues remain today pressing and imperative.

The economic foundations of the colonial regimes were based on extractive political and economic institutions. The new leadership had the urgent task of establishing inclusive institutions for sustainable economic development. Political independence held promises and potential possibilities for economic, social, and cultural development of the continent (Nkrumah 1963; Rostow 1960). The 1960s was a unique period in the political history of Africa in that a large number of countries achieved their political independence from European colonial rule. This political phenomenon opened the possibilities and potentials for economic development provided that new institutional arrangements more suitable for the newly independent nations were to take shape in the context of an emerging global political economy.

The year 1963 marked one of the most remarkable efforts of the African countries in setting up a continental institution whose central objective was to ensure the total political liberation of the continent. The Organization of African Unity (OAU) was established and started to play important role in providing both material and political support for the liberation movements against colonial rules in different corners of the continent. Despite a few thorny challenges, the tide against European colonialism had already gathered sufficient momentum by the middle of 1960s and soon colonial rule lost its ground. While the OAU was instrumental in maintaining sovereignty of the newly independent nation states, it kept itself away from addressing pressing challenges within African countries that frustrated the capacity of nations to achieve sustainable economic development and political stability. African states jealously guarded their sovereignty and the OAU by design was incapable to address problems that had consequences across borders and at continental level. The post-colonial Africa was dotted with conflicts and instability in the face of economic stagnation and widespread poverty. Africa waged its economic development effort within a difficult social and political environment and without undertaking the necessary reforms to reshape extractive economic and political institutions across the continent.

Does pan-Africanism make economic and political rationale? Or is it a political rhetoric with marginal economic or even political merit? Despite the considerable potentials of pan-Africanism in promoting sustainable economic development, the failure of leadership and determination to reform the extractive political and economic institutions has hampered the development possibilities of African economies. This paper develops a political economy and institutional analysis of the potentials and constraints of the pan-

African movement. The central thesis of the paper is that while pan-Africanism has considerable potential to promote economic and political development, the movement confronts a deep rooted vested interest in protecting the prevailing extractive economic and political institutions that continue to hamper sustainable and inclusive development process. In this context, the article argues that gradual but steady promotion of intra-African trade, production, and resources mobility coupled with economic, institutional, and political policy synchronization could make the pan-Africanism movement a potent force to improve the welfare of Africans. Most of these initiatives are predicated, however, by the existence of a functioning and inclusive political and economic institutional benchmark across countries on the basis of which pan-African economic space prevails and becomes operational.

The rest of the paper is organized as follows. Section two reviews the literature on the economic and political views on the pan-Africanism movement. Section three addresses the characteristics and tendencies of African countries in terms of development and political affinities towards establishing a unified and integrated African political and economic space. Section four extends the discussion with critical analysis of the potential strategies and their constraints in realizing the movement. Section five draws concluding remarks.

II . Literature Review

Pan Africanism as a concept broadly refers to what Kodjoe described as the acceptance of oneness of all African people and the commitment for the betterment of all people of African descent (Kodjoe 1986). This, of course, could broadly mean all of humanity given the fact that our ancestors all came from the African continent. In a way, we are all Africans. A more contemporary interpretation of the concept confines itself to two sets of people that currently reside in Africa and African descendants who reside outside of Africa or the African Diaspora (Fosu 1999; Walters 1993).

The concept of Pan-Africanism defined as the domain that consists of Africans residing in Africa and the African Diaspora suggests maximizing affinity and the welfare of all requires considerable mobilization effort and set of institutions that facilitate the participation in and benefit from the process of engagement. The dispersion of Africans from Africa took broadly two waves the first of which was undertaken through slave trade and the more recent one is more of self-motivated migration to the rest of the world. The current estimate of the African population is about 1.03 billion (United Nations 2013). Moreover, the African Diaspora is estimated to be about 170 million people residing all over the world but with high concentration in the Americas. Most of the Diaspora are descendants of slaves from Africa who were victims of slave trade and had lost most of their contacts with their African roots. Recent migrants, on the other hand, maintain close contact with the place of their origin which enables them to remain engaged in the economic, social and political affairs.

The African diaspora has continued to grow with recent migrations reflecting both push and pull

factors of both economic and political nature (Walters 1993; Collier 2013). This is accompanied by recent expansion of migration within Africa which constitutes the African Diaspora who live away from their place of origin. The challenge is what can be done to effectively use the number, skill, technical knowhow, capital, and entrepreneurship of all these potential resources to promote sustainable and steady economic development of Africans. In the same context, what economic and socio-political forces motivate the African diaspora to identify itself with their country of origin? Could this relationship of identity and affinity be relevant for the economic development potentials of the continent? These are some of the issues in the economic analysis of pan-Africanism.

The call for Pan-Africanism, at least initially, was motivated and driven by political imperatives which attempted to use the collective and united struggle of African people everywhere to help the abolition of slavery in the Americas and the liberation of Africa from European colonialism. The political liberation was considered the more urgent and shared objective of Pan-Africanism.

The experiences of post-colonial Africa have mixed features when it comes to the issue of how the consolidation of the new nation state status stood in tension with the objectives of forming supra-national identity and unity. Pan-African nationalism has to contend with the newly acquired nationalist sentiments and the old ethnic and tribal loyalty that predominated much of the institutions of the continent. Much of the discussion about Pan-Africanism has focused on the continental and regional initiatives. Leaders of the liberation movement did not manage to replace the extractive political institutions of the colonial era with a more inclusive institution of pluralistic and democratic systems and the rule of law. Even those with aspirations to embrace the democratic rule soon fell to the temptations and appeals of continuing the coercive institutions of authoritarian and dictatorial rule. To support such an approach, most pursued economic policies that promote the interest of the few elite at the expense of the masses leading to stagnation and widespread poverty.

The macro perspective of pan-African movement was dominated by rhetorical statements by political leaders whose practical constraint at the national level would hardly allow them to delegate power to supra-national institutions. As a result, or perhaps despite the rhetoric, leaders of the newly independent nation states across the continent developed the infrastructure for centralization and authoritarianism. The ideals of the rule of law and the emancipation of Africans from the legacy of coercion were eventually shelved and a new brand of autocratic and dictatorial forces took shape in one form or another. Those who survived in the political cannibalism, with a few exceptions, were strong men with brutal legacies of repression of their own people.

The form of political leadership and the political institutions by which individuals and parties come to power shape the way decision are made both at national and continental levels. The continental and regional organizations increasingly became clubs of dictators and autocratic rulers with very limited, if any, involvement of the public in the process. This had limited the capacity of these organizations to engage the broad masses and to cultivate shared goals and identity across the continent.

Whereas the anti-colonial struggle was dominated by revolutionary currents and support from anti-European colonial and socialist movements, the liberation movement did not have the coherence and synchronization to share the system of newly emerging nation states (Padmore 1972; Young 1982). As a result, the new nations were typical in terms of peculiar national features and domestic forces that remained to preoccupy the new leadership after liberation. This trend was also accompanied by the realities of the cold war creating the incentive to align and experiment with socialism or operating with the non-alignment movement. These movements and experiments could not undo the legacy of extractive and coercive institutions that dominated the African continent during the colonial rule. Instead, more coercive and brutal institutions emerged orchestrated by the local elites with help from their foreign patrons.

The economic structure of the newly liberated countries were not only backward but also featured dual structures in which the majority of the population earned its livelihood from subsistence agriculture in rural areas whereas pockets of urban based industrial and mining industries operate with relatively small contribution in output and employment. These economies faced the challenges of how to industrialize and create employment opportunities for the masses by channeling labor power from low productive rural based agricultural sector to higher productive industrial sector in urban areas. The challenges of industrialization and the mobilization of the necessary investment resources from both domestic and foreign sources was the main policy challenge of the day.

This approach to economic development emphasized the role of the state in the development process and central planning to bring about concerted effort to economic resource mobilization and allocation. In the process, the private sector and market forces were marginalized and discouraged leading eventually for the government to control the commanding heights of the economy and crowding out the private sector. The African economies were poor and backward at the dawn of independence and post-colonial economic performance has been dismal where stagnation and poverty dominated the continent.

There have been competing theories with regard to explaining the poor growth performance of the African economies (Easterly and Levine 1997; Landes 1999; Venables 2010; Acemoglu and Robinson 2013; Beinhocker 2007). Most, if not all, agree that economic growth performance is highly dependent on economic policies and institutions in which economic agents undertake their decisions and respond to overall incentive structures. Sustainable economic growth and development requires countries putting their policies and institutions right and responsive. The central theme of the neoclassical economic theory is that individual decision makers to a large extent would promote collective social welfare by optimizing their choices under their respective resource constraints. In the long-term, the economy eventually moves to its stable potential steady state.

The role of the private sector is crucial in the process whereas the government sector could play only a supplemental role in basic but critical areas of infrastructure development, external relations and national defense, stable macroeconomic environment, the rule of law and the protection of property rights, and manageable system of taxation. The experiences of newly industrialized countries suggest that the

government sector can indeed play crucial role in industrialization process by addressing the challenges of market failure and weak private sector development. The relative role of the private-public sector in economic affairs is dynamic and should be viewed as ever evolving process where both sectors operate to address critical hurdles in the development process.

Market failures are pervasive in developing countries. So do government failures. The art of economic policy-making demands balancing the two forces in a pragmatic and realistic way. The private sector in Africa has been repressed and stunted to such an extent that it operates far below its potential in subsistence and informal sectors. Despite reform measures to liberalize their economies and allow market forces to play more active role in the allocation of resources and the private sector to play a leading role in their development effort, most African economies operate in an environment in which non-market forces are dominant and the state assumes a commanding role in their economies. Liberalization reform measures have improved the role of the market and the private sector in an increasingly large number of African countries and yet there is much more to be desired before these forces are given the roles that commensurate with their potentials.

African economies are fragmented and least integrated relative to other regions depriving these economies the benefits of production network and participation in the global value chains. However, these features have to be critically examined from the perspectives of deeply rooted economic and political realities of the continent that is not compatible with pan-African economic and political integration. By implication, current efforts to political and economic unity of the continent, despite its huge potentials, remains unattainable unless the underlying forces are addressed. Initiatives for economic and political integration under the auspices of pan-Africanism in post-colonial Africa, and the necessary reform measures that should be undertaken at national and regional levels to realize these goals, have not been rewarding enough to necessitate radical institutional reforms.

The extractive institutions that were set in pre-colonial Africa and consolidated during the colonial era have remained in place and the elite makes effective use of them for enriching itself at the expense of the majority of Africans. Whereas the cost of the conventional system is huge in terms of lost opportunities and standard of living for the masses, the cost is spread across powerless and voiceless families who are caught in the vicious cycle of repression, lack of opportunity, and poverty. However, as public choice theory argues, this system rewards the few extremely well and the intensity of protection of vested interest has been growing over time with what is at stake (Mueller 2003). This process consolidates itself with all available instruments of repression and the stake increases with the passage of time. It takes nothing short of radical change of revolutionary proportions to establish a functional institutional framework and do away with extractive economic and political institutions.

III. Development and Political Affinities

The theoretical perspective of the previous section strongly suggests that the economic rationale of Pan-Africanism, though continental in framework, should be established on optimal pillars that would facilitate both vertical and horizontal integration. The current national pillars are relatively weak and the political framework in which they operate does not allow effective cultivation of developmental affinity. In search of better framework, decentralized local clusters combined with de-fragmented intra-Africa production, trade, investment, and innovation network need to be considered. It is imperative that the overall objective of continental Pan-Africanism takes shape through horizontal and vertical linkages and mobility with shared institutions and gradual harmonization of policies.

The long term development hurdle of African countries has been the prevalence of extractive economic and political institutions that protected the few elite at the expense of the masses. These institutions were imposed on Africans either by foreigners or now by local elites by coercion. Africans have been deprived of economic development and condemned to abject poverty mainly because of the weaknesses of law and order, property rights, violation of political rights, and legacies of these systems. Africa is characterized by complex diversity, ethnic and linguistic fragmentation, and geographical variations (Easterly and Levine 1997; Venables 2010). Moreover, the legacy of slavery and slave trade across African communities has been such that there is a deep rooted suspicion and mistrust across communities. Slavery and slave trade were coercive and brutal systems of extractive institutions. Slavery operated on the basis of violence and deprivation of the weak in society who fall victim to the brutal and the powerful. Slave trade was possible only in a system of slavery and it was undertaken with active participation of the local elite who traded slaves for repressive instruments and weapons to consolidate the relative power violence of the elite. Creating political, cultural, and institutional affinity across African countries by necessity involves remodeling, reforming, completely changing, and replacing with new policies and inclusive economic and political institutions. This is a slow and challenging objective but there is no short cut to achieve a sustainable basis for continental approach that serves the economic and social development of Africa.

Whereas extractive economic and political institutions may not necessarily prevent episodes of economic growth, such an approach could not generate sustainable and shared economic growth and development. After all, the elite has vested interest to grow the economy so long as they are in a position to extract more and enrich itself and sustain the system. However, by depriving property rights and security, the system prevents creative innovation and progress in structural transformation processes of their economy.

As the experiences of developing countries with extractive institutions and relatively huge inflow of foreign investment resources indicate, sustainable economic growth and development could hardly be achieved by the inflow of investment resources from abroad. The effectiveness, sustainability and

reliability of foreign aid and capital flow for initiating and sustaining economic growth and structural transformation of African economies has been the weak link in the development experience of African countries (Easterly 2006; Easterly and Levine 1997).

Creating cooperation among individuals and communities within nations or across national boundaries requires shared affinity and identity which nationalism came to serve in various ways. Strong nationalism had caused various problems and was considered as one of the underlying causes of the conflicts and violence within and across countries. However, nationalism in terms of its sense of oneness and belongingness serves important purpose for the community of people to pursue shared objectives and aspirations for the common good beyond the individual (Collier 2013). Apparently, the weakness of nationalism and reliance on tribal identity is considered one of the challenges that most African nation states faced in creating an integrated and coherence system of governance without which national development efforts could be frustrated. However, the hurdles for economic and socio-political development are not dominantly caused, even if they might have some contribution, by ethno-linguistic fragmentation but rather by the prevalence of extractive economic and political institutions that formed a system of exploitative relation which serves the few at the expense of the majority (Acemoglu and Robinson 2013). This robs society the opportunity to initiate and sustain inclusive economic system that rewards innovation and effort as well as promotes the accumulation of physical, human capital, and innovation in the system.

In the context of pan-Africanism, the ultimate motivating and uniting force would be the emergence of a vibrant pan-African nationalism that would make possible member countries and communities to cultivate shared developmental, social, and political affinities across the continent (Nantanmbu 1998; Walters 1993). African nationalism could emerge only if the ethnic and tribal loyalty gives way to a new consciousness among the African communities and this remains the daunting task facing pan-African movements. The new consciousness could express itself in the eventual freedom of Africans to move across countries and boundaries without losing their linkage with their community of origin and exploring the opportunities that the continental economic and socio-political environment provides.

Economic activity and international trade in general and intra-African trade in particular plays important role in establishing the process of integrated pan-African economic space. Table 1 highlights the economic and demographic features of Africa which exhibits the economic challenges as well as potentials for further growth. African economies have recently exhibited remarkable growth rate in productivity as well as merchandise trade. The value of trade increased from about \$298 billion in 1995 to \$349 billion in 2000 and further expanded to \$1,460 billion in 2013 (UNCTAD 2014). Africa exported to the rest of the world about \$700 billion worth of goods and services whereas the continental economies collectively imported about \$760 billion worth of goods and services by 2013. The continental economies exhibited significant growth in trade than the rest of the world both exporting to the world and serving as market for a whole range of imports from the rest of the world. The total value of African international trade exhibited

Table 1: Africa: Basic Economic and Demographic Indicators

Description	1960	1990	2000	2011	2060*
1. Demographic Indicators					
Population (Total) (millions)	283	627	803	1,034	2,797
Population ages 0-14 (% of total)	42.9	44.5	42.4	40.14	29.7
Population ages 15-64 (% of total)	54	52.4	54.3	56.32	63.2
Elderly Africans ages 65+ (% of the total)	3	3.1	3.3	3.55	7.1
Urban Population (% of total)	18.7	32	34.5	39.7	55.9**
2. Economic Indicators					
GDP Total, PPP, (Constant 2005 International Dollar), (billions)	139.4	449.1	584.9	953.9	
GDP per capita, PPP, (Constant 2005 International Dollar)	493	717	729	922	
Labor Force (Total) (millions)	na	225.3	299.7	404.9	

Source: World Bank. 2014. World Development Indicators Database; United Nations.2013.

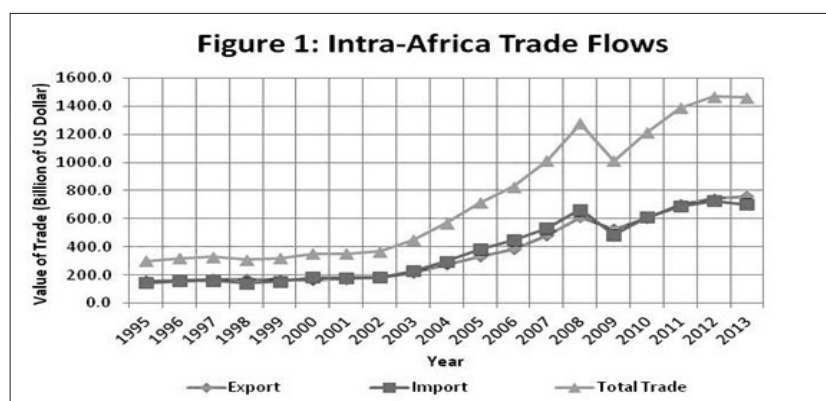
Note: * Population projection data for 2060 are based on median variant projection of world population prospects for 2012 revision

** Projection for urbanization refers to the year 2050.

an average growth rate of 8.8 percent during 1995 to 2013 setting a healthy trend among African economies towards openness to international trade. The pace of trade expansion accelerated since 2002 reaching a remarkable annual growth rate of about 11 percent. This is particularly important as the prime drivers of the growth in international trade both in terms of export destination and origin of imports are emerging market economies such as China and India opening up new opportunities and economic cooperation among developing countries. However, the share of African trade in global trade remains very low as it remains at about 3 percent in world trade indicating a significant potential for further growth in the future.

There is also an important expansion in trade activities among African economies. Total intra-African trade increased from \$28 billion in 1995 to \$31.6 billion in 2000 and to \$147.5 billion in 2012 representing a remarkable average growth rate of 9.8 percent during the period under consideration and a corresponding average of 12.9 percent from 2000 to 2012. International trade within the continent, as Figure 1 illustrates, has expanded with the orientation of most economies towards exports both to other African markets as well as to the rest of the world. Economies that have some manufacturing and processing capabilities have benefited from the recent trend that opened opportunities for new market or expansion of existing market outlets.

It is also notable that trade activities within the continent remains relatively small and most of the international trading partners of the economies in the continent are elsewhere in the rest of the world. This trade structure is partly the reflection of the nature and characteristics of the commodity composition of economies in the continent and the lack of forward and backward linkages and infrastructure that could



promote production network and value-added chain. A larger share of expansion in the value and volume of trade happened with the rest of the world than within the continent itself. This relatively weak intra-African trade could expand further with the expansion of more efficient and cost effective transportation network across the continent and the processing and manufacturing capabilities of local enterprises in the continent. This will open more expansion in the size of the market not only for final products but for raw material and intermediate inputs in the production process and expansion of the value-added chain.

Intra-African trade is growing and yet, as Table 2 summarizes, the share of trade activities that is flowing within the continental economic and market space remains relatively small and the dominant market and source of imports for African economies are outside the continent. It takes sustained structural transformation of the production and technological capability of African businesses to change the content and diversity of the production activities that would enable trade and hence investment to focus on the local economies and sustain their growth. The economic and trade regimes of developing countries are typical in their reliance on export of primary products and the import of manufactured products and services from the rest of the world and this is fully reflected in the collective continental trade flows of Africa. There are some regional and national variations within the African continent and yet the overwhelming picture reflects the trade regime and overreliance on a few primary export commodities destined for markets outside the continent. In comparison, developing Asia and America perform relatively better in orienting their international trade activities more on their regional economic space.

The weakness of intra-Africa trade flows is closely related to the fragmentation of the African economies and the high cost of tariff and non-tariff barriers to trade across borders (World Bank 2012). The high cost of transportation and trade barriers discourage African economic agents to engage less in mutually beneficial exchange activities. This is particularly important in commodities, staple food items, and intermediate inputs that have a rising demand across African countries. It is also important to note that the structure of these economies and the trade relationship that correspond to them is such that it does not facilitate trade flows within a rather similar and rival economic activities linked with export destinations

Table 2: Africa: Intra-African Trade Flows (percentage of total exports or imports)

	Export Trade		Import Trade	
	2001-2006	2007-2011	2001-2006	2007-2011
Africa	9.8	10.9	13.5	12.7
Eastern Africa	14.1	13.9	9.3	7.1
Middle Africa	1	1.3	2.5	3.1
Northern Africa	2.9	3.9	3.7	3.8
Southern Africa	2.1	2.1	10.7	7.9
Western Africa	10	9	12.5	10.2
Developing America	17.6	20.6	19	21.1
Developing Asia	45.1	50.1	49.3	53
Developing Oceania	3	3.3	2.3	2.7
Europe	71.4	70	67	64.4

Source: UNCTAD, 2013

Note: Intra-regional trade indicates the flow of imports and exports by their origin and destination within the respective regional economies.

outside the continental economy.

Foreign direct investment has served as important mechanism in creating economic integration across national economies and forming value chains that have been instrumental in improving productivity and serving as vehicle for introduction of new technology. The African continent has for long failed to attract foreign direct investment both in terms of volume as well as quality of technological innovation to better exploit the potentials of the continental economies. The share of Africa in the global FDI inflow remains depressing low at about 4 percent of world FDI flows or about \$57 billion as of 2013 (UNCTAD 2014b). This has not shown tangible improvement over the years and the local capacity to generate investment resources through domestic saving and channeling to investment purposes remains weak. The African region hence largely remains starved of investment resources for sustainable economic development.

There are some encouraging trends in recent years that indicate rising FDI inflows from other developing countries of Asia into African economies and better performance in intra-Africa FDI flows. Investment by South African, Kenyan, Angola, Egyptian, and Nigerian companies in other African economies has created wider opportunities and deeper economic integration across countries within the continent and given the current state of cross border investment initiatives much more could be achieved once this processes get momentum. The healthy growth rate of African economies over the last decade and the rapid population growth have been factors in the rapid growth of the size of the African market attracting further investment and innovation by continental as well as other potential foreign investors. The tendency of intra-African investment projects to focus on manufacturing and services, unlike the focus of other FDI inflows to natural resource extractive projects, has created better linkages and employment

opportunities in African host countries (UNCTAD 2014b). The volume and share of intra-African investment flow is not yet large enough to make its impact on the value chain of African economies and yet its features and composition attests to the fact that effective economic integration could be supported by deeper and sustained investment initiatives within and across African economies.

The issue of population mobility within countries and across political boundaries has been a topic of recurrent discussion with implications on the migrants, the host communities, and those communities left behind. The advancement of transportation and communication technology has made both the pull and push factors accessible to individuals to make their decision with regard to their place of residence and work. Conventionally, migration from rural to urban areas and employment in emerging industrial and services sector was a typical reflection of economic and social transformation in developing countries.

This process of mobility of labor force from agriculture to the modern sector necessitated adjustment in life style and educational training that facilitated the transition. African societies have predominantly been agrarian and rural and yet there has been rapid urbanization in recent decades and the process of urbanization is bound to continue for the foreseeable future. As Table 1 indicates, nearly 40 percent of the African population resides in urban areas whereas the majority still lives and works in rural areas. This is a remarkable growth of urbanization from the situation at the dawn of independence in 1960 where less than 20 percent of the population in the continent was living in urban areas. Current projections suggest that by the middle of the current century, more than half of the African population is expected to live in urban areas suggesting significant mobility of population from rural to urban areas.

There is also an emerging trend in population mobility across national boundaries with an overall tendency of net migration of people from less developed to more developed regions of the world. This situation has set a new trend and it is driven by both opportunities that advanced countries offer to people in less developed countries and the push factors that necessitated families and individuals to migrate away from their country of origin.

International migration has accelerated over decades with a typical feature of people migrating from less developed regions to more developed regions. Accordingly, as Table 3 summarily depicts, there is a net outmigration from Africa to the richer countries of the world. This is part of a global trend and the host countries generally have a more prosperous economies and standard of living which serves to attract more people to consider migration for economic reasons. The future policy choices of host countries in terms of attracting and welcoming immigrants will exert significant influence for the foreseeable future (Collier 2013; Kelly 2004). The divergence of income between the developed regions and the less developed regions made it more appealing for people in poor countries to migrate and increase their opportunities. Whereas migration is driven mainly by economic reasons, its implications stretch to social and political spheres both in the host countries and countries of origin.

There are three reinforcing processes that have been considered important factors behind the acceleration of international migration since the 1960s. These are the growing income gap between

Table 3: Africa: Net Population Migration Trend (thousands)

Year	Africa	Sub-Saharan Africa	More Developed Regions	Less Developed Regions
1960-1965	-950	-237	2287	-2287
1990-1995	-1015	-450	11558	-11558
1995-2000	-3417	-1137	13923	-13923
2000-2005	-2099	-429	17142	-17412
2005-2010	-1779	-184	17412	-17412
2010-2015*	-2481	-741	13170	-13170
2045-2050*	-2492	-1763	11596	-11596
2060-2065*	-1740	-1230	8145	-8145

Source: United Nations. 2014. World Population Prospects: The 2012 Revision. Note:

* projection based on median variant estimation on fertility rate.

countries in general but between the rich countries of West and the rest. This has produced significant pulling factor attracting a significant share of the brightest and most capable youth in poor countries to search for opportunities away from their countries of origin. Moreover, migration involves significant investment on the part of would be migrants and the risk of establishing themselves into a new environment. With gradual rise in the income of developing countries, it became increasingly affordable for aspiring migrants from poor countries to make it to the rich countries. Finally, the cost of adjustment somewhat eases with the size of the diaspora community in the host countries providing the logistical and adaptation process more accessible to future migrants (Collier 2013). This also has indirect influence in motivating future migrants in the countries of origin to get informed and generate exposure that will be helpful in the adjustment process. In a sense, the diaspora community and especially family members in the diaspora start to play as role models to future aspirants. These features are important in understanding the process and pace of migration from poor to richer regions of the world.

Migration affects in various ways people left behind. The diaspora exerts influence in the economic and political life of their country of origin, their community, and collectively their continent. One of the important spheres of influence of the diaspora community in their countries of origin is the flow of remittances to family members and to a certain degree in investment activities. Remittances are significant and increasingly important for poor countries and families. Official remittance inflow to Africa has reached about \$56 billion in 2012 as compared to about \$11 billion in 2000 (World Bank 2014). This represents about 3 percent of the total GDP of the continent.

This is a modest ratio and yet it compares significantly with the inflow of foreign direct investment or net ODA inflow to the continent. The relative importance of remittances in small countries, such as Senegal Cape Verde with remittance to GDP ratio of about 10 percent, is even more significant than the average African remittance inflow suggests. These observations indicate that there is significant role that the

African diaspora can play in the economic dynamism and growth of Africa. These macro perspectives would have magnified impact at micro and family level since most of the remittance inflow is directed to helping family members at the country of origin. Remittances are even more significant and critical in the family budget of poor countries to manage their life. Whereas prestige spending and basic consumption expenditure dominates the use of remittance inflows, its impact is being felt in real estate investment in an increasingly large number of urban areas across the continent from Dakar and Accra to Addis Ababa and Nairobi. In the process, the remittance inflow help recipient countries in terms of earning hard foreign currency that are important to finance the import requirements of their economies.

IV. African Union: Policy Coordination and Renaissance

The driving force behind the pan-African movement was political aspiration that sought to unite Africans against colonialism and racism. The projects of the Organization of African Unity (OAU) and now the African Union (AU) closely follow this political philosophy and how to mobilize Africans for their political and economic independence and collective welfare. The ultimate goal has remained to promote political unity across the continent and establishing a United States of Africa. The contemporary version of the aspiration for pan-Africanism and unity comes from the urgent priorities for economic and social development, areas where the African continent lags far behind most other regions. Can pan-Africanism promote economic and social development of Africa and what kind of approaches could Africans pursue to realize their aspiration?

The African Union and its effective operation could be instrumental in enabling the continent better manage the challenges of a rapidly changing world. This also enables Africa not to be left behind in the recent global trend towards international economic integration extending from the European Union, North American Free Trade Area (NAFTA), and the Association of South East Asian Nations (ASEAN). The third perspective is related to forming a coalition of resistance among African countries to minimize unwarranted pressure from abroad in dealing with African governments. This pressure comes not only from the West but also from emerging powers such as China and India that tend to exploit the weakness of African countries. A united Africa hence can speak in one voice and synchronize its agenda on a number of regional and global issues.

The manner and speed of establishing a political union of the continent has remained a contentious issue. The first articulation of the idea was formed in 1960 in a pan-African conference in Cairo, Egypt, in which both radical and gradual approaches were argued in favor or against the immediate formation of a United States of Africa. The radical views were promoted by leaders like Kwame Nkrumah of Ghana whereas the gradualists were championed by Julius Nyerere of Tanzania. Both sides made their passionate arguments and yet the experience of the past half century suggests that the formation of a political union has been a daunting task. It is also imperative to note that both sides have important regional power

supporters making the continental agenda to be nothing but a gradual movement. This was followed by a somewhat compromised agreement with the formation of the Organization of African Unity (OAU) in 1963. The recent reincarnation of the aspiration of pan-Africanism and forming the United States of Africa has quite similar division of opinions and priorities as well under the auspices of the African Union (AU), which was established in 2002, replacing the OAU.

Whereas immediate formation of a federal structure of government has some proponents, the regional powers such as South Africa, Nigeria, and Egypt have consistently supported a gradual approach to unity. The main players contend that Africa has to address its immediate challenges such as weak governance, democratic institutions, poverty, and marginalization of the African economies in global trade, investment, and innovation processes. The change in priorities of the African integration project suggests the route for pan-Africanism necessarily takes regional economic integration processes that would eventually lead to a synchronized and unified economic, political, and social space.

In the absence of a definite agenda and program of action to immediate political union, intermediate actions that range from regional integration and economic community have taken the main feature of international measures within the continent. Whereas regional integration projects and their effective operation could serve as a stepping stone towards African economic community and eventually to African Union, most of them largely failed to achieve even their modest objectives of promoting economic cooperation and development (Young 1982; Easterly and Levine 1997; UNCTAD 2013; 2013b).

It is imperative to emphasize, however, that the regional economic integration approach could hardly be successful until and unless African countries are seriously implementing the measures to do away with extractive economic institutions that are supported by extractive political institutions. A progressive continental institution could not be built by the sum of extractive national institutions that dominate the continental political economy landscape. It takes learning and adapting the experiences of successful inclusive institutions from Africa and elsewhere, such as Botswana, to make the transition from economic and political stagnation to sustainable economic growth and democratic political system.

There are renewed efforts in recent years to accelerate regional integration across the continent in a bid to prepare the environment for the eventual emergence of the African Economic Community. The policy coordination effort to harmonize the priorities and objectives of the regional economic communities and expanding the scope and domain of existing regional institutions into a continental sphere is getting support from continental institutions. This is backed up with an increasing flow of intra-Africa investment which is growing at modest rate from very low level. Once this process takes momentum and the continental value chain of local enterprises increases, the depth and linkage of the African production units would have more opportunities to expand sustained growth in output, investment, factor mobility, market expansion, and employment opportunities. There are still considerable hurdles towards realizing these potentials as national economies are very slow to opening up their economic domains for the continental players to operate at full potentials (UNCTAD 2014b; World Bank 2012).

However, even if deeper trade and investment integration across the continental economic space provides opportunities for improved productivity and growth in the enlarged economic space, in the absence of inclusive economic and political institutions that engage and reward the majority of Africans reform efforts might end up further empowering a few elites across the continent to spread their exploitative network across the continent. It is therefore important to emphasize that pan-Africanism in the economic and socio-political sphere requires setting the necessary conditions for inclusive economic and political institutions at national and sub-national levels. The path towards pan-Africanism could therefore be built on the foundations of inclusive institutional benchmarks across member countries.

V. Concluding Remarks

The economic rationale for pan-Africanism is faced with strategic challenge and its prospects depends on the policy choices that African countries make at national and continental level to operationalize the ideals into practical policy actions. The current strategy has focused on building national building blocks that are expected to develop into regional economic communities which in turn ultimately realize an African economic community that will serve as the basis for pan-African political and social development. However, this approach has in built features that weaken the pan-African nationalism and identity and hamper mutually beneficial and economically sound initiatives. Realizing the economic potentials of pan-African domain requires building inclusive economic and political institutions and their supportive system of laws and norms that would serve as engine for building an integrated and sustainable African economic growth process.

The current series of extractive economic and political institutions are the central bottlenecks for growth, investment, market size, infrastructure, human capital formation, property rights, human security, and improvement in productivity and standard of living of the African population. It is imperative for African countries to pursue reforms that address these challenges in time before pursuing decentralization and supra-national initiatives and institutions. Pan-Africanism does make economic sense provided that it is based on new political and economic institutions that motivate and rewards all Africans. The immediate task is to cultivate a shared and commonly implementable framework of policy reform that enable African communities replace extractive institutions by decentralized, participatory, and inclusive institutions that would support sustainable and continental economic development.

References

- Acemoglu, Daron and James Robinson 2013 *Why Nations Fail: The Origins of Power, Prosperity and Poverty*
London, Profile Books.

- Beinhocker, Eric 2007 *The Origin of Wealth: Evolution, Complexity, and The Radical Remaking of Economics* Cambridge, Harvard Business Review Press.
- Collier, Paul 2013 *Exodus: How Migration is Changing Our World* New York, Oxford University Press.
- Easterly, William 2006 *The White Man's Burden: Why the West's Effort to Aid the Rest Have Done So Much Ill and so little Good* Cambridge, MA, MIT Press.
- Easterly, William and Ross Levine 1997 "Africa's Growth Tragedy: Policies and Ethnic Divisions", *The Quarterly Journal of Economics* 112(4), pp.1203-1250.
- Fosu, Augustin Kwasi 1999 "An Economic Theory of Pan-Africanism", *The Review of Black Political Economy* 27(2), Fall, pp.7-12.
- Kelly, Paul 2004 "Punching Above Our Weight", *Policy* 20(2), pp.29-34.
- Kodjoe, Ofori 1986 *Pan-Africanism: New Directions in Strategy* Lanham, University Press of America.
- Landes, David 1999 *The Wealth and Poverty of Nations: Why Some Are So Rich and Some So Poor* New York: W.W. Norton & Company.
- Mueller, Dennis 2003 *Public Choice III* Cambridge, UK, Cambridge University Press.
- Nantambu, Kwame 1998 "Pan-Africanism versus Pan-African Nationalism: An Afrocentric Analysis", *Journal of Black Studies* 28(5), May, pp.561-574.
- Nkrumah, Kwame 1963 *Africa must unite* London, Panaf Books.
- Padmore, George 1972 *Pan-Africanism or Communism. The coming struggle for Africa* New York, Anchor.
- Rostow, W. Walter 1960 "African Economies: Lessons of History", *Africa Today* 7(7), pp.5-8.
- UNCTAD 2013 *Economic Development in Africa: Intra-African Trade- Unlocking Private Sector Dynamism* New York, United Nations Publication.
- UNCTAD 2013b *Global Value Chains: Investment and Trade for Development* New York and Geneva, United Nations Publication.
- UNCTAD 2014 UNCTAD statistics Database, available at www.unctad.org. Accessed on August 14, 2014.
- UNCTAD 2014b *World Investment Report 2014: Investing in the SDGs-An Action Plan* New York and Geneva, United Nations Publication.
- United Nations 2013 *World Population Prospects: The 2012 Revision*. CD-ROM Edition.
- Venables, Anthony 2010 "Economic Geography and African Development", *Papers in Regional Science* 89(3), pp. 469-483.
- Walters, Ronald 1993 *Pan Africanism in the African Diaspora: An Analysis of Modern Afrocentric Political Movements* Detroit, Wayne State University Press.
- World Bank 2012 *De-Fragmenting Africa: Deepening Regional Trade Integration in Goods and Services* Washington D.C., World Bank.
- World Bank 2014 *World Development Indicators Database*, available at www.worldbank.org. Accessed on August 18, 2014.
- Young, Crawford 1982 *Ideology and Development in Africa* Connecticut, Yale University Press.

機織りと村落開発

—マレーシア・サラワク州村落地におけるイバンの生業からの考察—

Weaving and Development:

A Study from the Livelihood of the Iban in Rural Sarawak, Malaysia

長谷川 悟郎

HASEGAWA Goro

Abstract

The purpose of this study is to examine hand weaving textile of the Iban in Sarawak State of Malaysia, its current stagnant situation of commercialization under the rural development program. For the purpose, their notions of livelihood should be understood in reference with the national development context and empirical field data.

Weaving used to be seen widely among the many native societies of Borneo that are made for ritual use, however the practice rapidly died after modernization. Out of those cultures, the Iban *pua kumbu* textile is today presenting one of the images of the ethnically diversifying flourishing Sarawak besides its image also circulates on the mass media for Malaysia national tourism that states their multiculturalism. The national media has given an impression that weaving is still today popularly practiced among the Iban, however the situation cannot be generalized. From the Iban's point of view, the situation of weaving is rather multifaceted, as it is seemingly dying, or still firmly persisted until the present day.

The paper attempts to look at contemporary socio-economic factors that are mostly important for their daily lives such as migration to towns as well as regular farming activities. Thereby, it may grasp the multifaceted situations and go beyond conventional representations of weaving that lead to understanding further the intermixing dynamic states of dying and developing.

The investigation of the study reveals that textile weaving is deeply embedded in their daily lives based primarily on farming, however only given low priority just as a pastime. This is creating the gap between the idea of commercialization and their reality. Further, the weaving process is not divided into phases but the whole process normally be carried by one weaver to produce their own works. This can be one of the obstacles for the industrialization.

The study recommends looking at weaving as embedded within their composite economy. That is, the means of livelihood in rural areas is in reality composed of a number of different activities. Considering this, it may be an unreasonable expectation of the government project to replace their rice farming for weaving. It does not accord with their common sense.

Keywords : Handloom weaving; Rural development; Swidden agriculture; Iban people; Malaysia Sarawak.

キーワード：機織り；村落開発；焼畑農耕；イバン人；マレーシア・サラワク州

1. はじめに

本稿は、マレーシア・サラワク州の村落地域における農耕民イバン人の機織りについて、その商業開発のはかどらない状況を、国家の開発文脈および現地フィールドワークによる実証的データを照らし合わせ、彼らの生業観からの理解を試みる。

染織は、元来ボルネオ島の多くの在来民族の間で、とくに自分たちの日常生活における儀礼用の布づくりとしてひろく行なわれていたが、近代以降、多くが急速に衰退していった状況にある (cf. Gittinger 1979; Heppell 1989)。その中で、イバンのプア・クンプ *pua kumbu* とよばれる染織布は、公式に27種を数える民族集団からなるサラワク州の代表的な文化として表象され、さらに今日の多文化社会をうたうマレーシアツーリズムにおける様々な媒体にもその視覚イメージが流布する (Leigh 2000 : 46)¹。そういった国家メディアの影響により、現在も機織りがイバンの間ではごく一般的に行われている印象をうけるが、実際にはそう一概に言いきれものではない。機織りの現場では、むしろ衰退し消えゆくような、かつ現在に至って根強く残っているような多面的な状況がうかがえる。

本論では、そのような衰退と発展が混交するかのような機織りの実践について、人びとの生活のもっとも重要な農耕活動や今日的な町への移住など社会・経済的文脈に広く位置づけることで、国家の開発文脈にしたがった一枚岩的な表象をこえて多面的実態にせまりたい。染織という文化的営為を当事者らの生業観に位置づけて捉え直す試みは、これまでの民族誌研究では見えてこなかった染織および伝統文化に対する彼(女)らの取り組みと文化理念を理解することにつながる。

本研究は、おもに西欧人によって書かれた民族誌および現地の新聞記事等を参考文献とし、また筆者自身が2001年以来継続的に行なっている現地フィールドワークによる聞き取りデータを資料とする²。

1 イバン染織布は主に3種類にわかれるが、その中で経緋(たてかすり *ikat*) 技法によるプア・クンプはもっとも代表的なものといえる (Ong 1986; Gavin 1996; Heppell 2005; 長谷川 2007)。サラワク州でイバンは州人口の最多29.1% (60万3,000人) を占める。

2 現地フィールドワークは、2003年2月から12か月間のシブ市滞在と、2008年7月から11か月間カピット県カピット町およびバレー川の村落地滞在を実施した。またその他短期の訪問を散発的に実施し、長期滞在とあわせて、2001年から現在までの間にのべ2年半行なった。それぞれ支援下さった個人および組織に深く感謝する。

II. 機織りの衰退と発展の混交状況

イバン染織がさかんな地域として、イバンの主要な居住地である沿岸のベトン県 (*Daerah Betong*) と内陸のカピット県 (*Daerah Kapit*) がこれまでとくに知られてきた。ベトンでは、当地でつくられていた技術の高い布が、19世紀半ば以降、英国人らによって多く蒐集されてきた。しかしベトンにおける機織りは、第二次世界大戦以後に衰退にむかい、1980年代には農業局など開発行政機関による復興支援がはかられたものの、今日にかけてほぼ衰退したといわれている。筆者が2003年に現地で行った聞き取り調査でも、機織りはもう行われていないとの見方が、多くのイバンや行政職員の間でほぼ通念化されていた。

また一方のカピット県は、人口約60,000人のうちイバンが8割を占めるもっともイバン色が強い地域とされ、商品開発が推奨される1980年代以前から、とくに技術的にすぐれたプア・クンプがつくられることが知られていた (Berma 1996: 149)。また1980年代後半でも、カピット県のなかでもっとも後背地のバレー流域において染織は伝統的な社会威信をもとめる女性の重要な活動として根づよく行われ、さらに開発の流れにのりユネスコから国際的な賞を受賞するなどの例も出て、以来カピットはイバン伝統染織の代名詞ともなった (長谷川 2007)。

しかし農村の女性開発や観光開発などからめて農業局主導によって推進される染織布の商品化事業は、今日にいたるまで小さな規模にとどまったままであり、一概に成功とも失敗ともどちらとも言いきれない。1枚のプア・クンプを織りあげるには最短でも1か月を要し、また織り手の技量センスによってまちまちだが、プア・クンプ1枚の売り値はおおよそ5千円から3万円程度である³。またカピットではかつて1980～90年代は村落を訪れた欧米からの多くの観光客が値切ることなく高値で買っていったというが、観光客の減少した近年では、町の商店や農業局の一部門である「農協組織」(Farmers' Organization) が主な売り先であり、そこでは品質に対する選り好みは激しくまた値も大きくたたかれるという。現在カピットで著名な高い技術をもつ織り手は、政治家から直接に注文を絶えず受けるが、機織りを実際に日々行っているかといえそうではなく、米づくりを生業の中心に据えて制作は片手間に行う程度である (長谷川 2007)。

この10年ほどの間に、カピットの村落地でも機織りの光景は徐々に見られなくなった印象を受けるが、当地域の30～40歳代以上のイバンの間では「イバンの女なら機織りは誰でもできる」と往々にして現在も語られるほど、機織りとは女性の社会規範として重んじられ、かつ極めて一

3 筆者の調査では、普段あまり眠れないと訴える高齢の女性が連夜夜通し機織りを行い1か月で織りあげることができると話した。しかし1年を通してみればせいぜい4枚程度である。また上木 (2012) によれば、首都クアラルンプールにおける労働者の月額賃金は以下になっている。法定最低賃金RM900 (約23,000円)、製造業ワーカー (一般工職) RM1,026 (約26,300円)、製造業エンジニア (中堅技術者) RM2,902 (約74,300円)、製造業中間管理職 (課長クラス) RM5,744 (約147,000円)、非製造業スタッフ (一般職) RM2,744 (約70,200円)、非製造業マネージャー (課長クラス) RM6,448 (約165,100円)、店舗スタッフ (アパレル) RM1,500 (約38,400円)、店舗スタッフ (飲食) RM470 (約12,000円) (出所: 日本貿易振興機構JETRO「アジア・オセアニア主要都市・地域の投資関連コスト比較」)。しかしサラワクにおいては、これらの額よりも、幾分下がるものと思われる。また町近郊の農村女性が町の市場で野菜を販売すると1日で1,500～2,000円程稼ぐこともできるが、毎日販売することはない。

般的な営みであった。しかし今日ではイバン女性のすべてが行うわけではなく、また地域によっても、そして地域内においても、衰退と発展の状況は決して一枚岩的に捉えることはできず、様々なバリエーションが存在する。サラワクでもっとも染織が盛んと言われるカピットの中だけでも、彼らの記憶に照らせば、今日では機織りはあきらかに減少している。これはボルネオの多くの染織文化が衰退していったように、イバン染織もまた消えゆく伝統文化と見なされる現実と捉えることもできる（たとえばLeigh 2000）。

ただ伝統文化をめぐる衰退の言説は今に始まったものでもなく、20世紀初頭の英国人の記した民族誌のなかでも、イバンの伝統染織についてそういった状況が語られ（Howell 1912）、また社会が近代化にむかう1960年代以降では、イバン民族そのものさえ「消えゆく伝統に生きる人びと」として語られてきた（Jones 1966; Wright et al. 1972; Sutlive 1991）⁴。しかし現在にいたるまで、イバンはサラワク最大人口をほこる民族として発展をつづけている。これに従えば、伝統染織をただ消えゆくものと見なすのは的確ではない。

Ⅲ. 開発言説における村落住民像

本章では、現在のマレーシア国家およびサラワク州政府による開発言説について整理し、開発への積極的な参加が求められている村落住民像をみてゆく。

マレーシアは、1991年、マハティール当時首相が2020年までに先進工業国入りをはたすことを定めた21世紀を展望する社会経済開発構想「VISION2020」（*WAWASAN 2020*）を掲げ、近代・工業化への明確な目標を打ち出した。これは経済成長率7%維持といった具体的な経済目標とあわせて、マレーシア人の国民意識の形成といった多民族社会の統一を理念の骨格に据え、経済だけでなく、国民の精神的側面、文化、政治もふくめた社会の総合的開発計画となっている⁵。2020年にむけて、民族の統一、マレーシア民族の生成、公正な社会の構築、生活水準の向上、収入増加、所得分配、環境保護、政治の安定など広義の開発が目標とされている（cf. Rauf 1994; King and Parnwell 1999 : 162）。

経済発展だけでなく社会文化側面にも開発の重点がおかれるのは、マレーシア国家のアイデンティティの模索であり、そこではマレーシアの国および国民のありかたが問われている（Sani 1994）。たとえば、マハティール当時首相は、森林のなかで生活する在来民族に対しつぎのよう

4 たとえばライトらは、イバン人のしめるサラワク総人口の割合は1985年までに3分の1から4分の1に減少するといった人口学による予測をもとに、イバンの消え行く伝統社会を説明した。そこでは都市化や職の多様化、経済競合といった背景に華人がサラワク人口の4割をしめ、また多様な社会的プレッシャーから伝統社会にいきるイバンの人口は急速に減少し社会は衰退してゆくことが論じられている（Wright et al. 1972 : 152）。人口統計学者のジョーンズも同様に、人口調査が体系的に行なわれるようになったマレーシア国家成立以後、1960年にイバンは32%、華人は31%をしめたが、1985年にはイバンが25%に減少し、華人は40%に増加すると予測した（Jones 1966 : 170-171）。

5 経済成長率7%の維持により10年ごとにGDPは倍加し、2020年までに一人当たり国民所得は先進国基準の\$16,000となる。成長は1991年以来順調にすすんできたが、近年は成長率が7%を若干下回り、マハティール元首相はさらなる開発の必要を訴えている（Borneo Post 12/8/2006）。

に生活スタイルの変革をもとめる。「欧米のNGOは、マレーシア人のとくに在来民に対してジャングルのなかで生活しつづけることを望んでいる。動物のような生活を強いることで、生活水準向上のすべての機会が奪われている。しかし、今こそ我々自身が向上をもとめ、より良い生活を与えるためにジャングルから出て自分たちの文化を変革しなければならない」(*Borneo Post* 10/8/96, cit.in King and Parnwell 1999 : 167)⁶。このように、開発を推進する国家は、森林のなかの生活に価値を認めることなく、住人に対し彼ら自身のよりよい生活、またひいては国の発展のための大胆な意識の変革をもとめる。

さらに、マレーシアと同様にサラワク州の発展もこれまで順調にすすんできたが、石油や木材など天然資源に大きく依存した経済の脆弱性が課題とされてきた (Hamid Bugo 1988 : 54-55)。そういった課題を抱えながら、サラワク州では、VISION 2020が発表される1991年よりも以前に、タイプ4代目州首相 (Abdul Taib Mahmud) が、1981年の就任時に「開発のポリティクス」を掲げた。タイプは、この政策をサラワク州すべての住民が共有すべき理念と位置づけ、「我々は、なによりも共通の使命として開発を最優先課題と認識すべきである。そして経済、社会、文化、精神面において生活の変革を促し発展を実現させる。我々は決してパン (米食) だけでは生きていけない」とのべ、人びとの積極的な生活の変革向上をもとめた (cf. Rauf 1994 : 215)⁷。つまり「開発のポリティクス」では、住民自身が開発の主体として意識改革が問われ、それぞれに新たな知識とスキルを獲得してゆくことが望まれている。今現在こそが明日にむかう子どもたちの門出であり、そんな未来を先導する大人たちが、今の現実社会における変化と挑戦に応じてゆかねばならないのである (Rauf 1994 : 216)。

このように、差し迫った変革の時代が強調されるなかで、さらにVISION 2020の目標達成にむけてタイプ当時首相は「サラワク再生エネルギー回廊計画」 (SCORE : Sarawak Corridor of Renewable Energy) を2008年2月に発表し、州内の数々の大規模開発プロジェクト計画をあきらかにした。この計画では、アルミニウムやニッケルの精錬、製鉄やガラス製造などエネルギー多消費型産業の展開をもくろみ、2020年までに6,200 MW (メガワット) の新たな電力供給源を立ち上げるとする。全体の8割を水力発電がまかない、その他2割を石炭による火力発電によってまかなう (*Borneo Post* 28/6/2011)。また州内の利用だけにとどまらず、半島マレーシアへ供給するために海底ケーブルの敷設も構想されている。2009年の州政府の公式資料では、28,000MW (水力発電だけで20,000MW) が計画されたが (*Borneo Post* 26/10/2008; Chang Ngee Hui 2009)、その後計画の見直しによって大幅な縮小がなされたようである。いずれにせよ、サラワク州の電力供給力である966MW (そのうち水力発電94MW) という現状をふまえれば、SCOREの大きさと開

6 1980年代以降、とくにマレーシアは、熱帯林の伐採反対をうったえる欧米の自然保護NGOによって厳しく非難されてきた。サラワク民族誌においても、開発政策と自然保護という世界規模の関心にしたがい、グローバリズムに侵害される森林とまたそこに住む人びとはまもるべきものとして捉えられてきた (たとえばホン 1989)。

7 その内容は、1991年の「VISION 2020」と互いに合致したものとなっている (Rauf 1994 : 215)。「パンだけでは生きていけない」は、英語の慣用表現 “man cannot live by bread alone” である。

発への強い信念を読みとることができる (*Borneo Post Online* 6/7/2011)⁸。

ところで、現在においてサラワク州は国内で開発に取り残された地域としてイメージが定着しているが、そのおもな理由の1つには、英国人ブルック家のサラワク王国統治時代 (1846-1946年) に社会経済開発が蔑ろにされてきた点がこれまで指摘されてきた (cf. Pringle 1970)。それは2代目のチャールズ・ブルック (1868-1917年在位) が、海外の開発業者による土地や資源の搾取を懸念し、東南アジアの地域にひろくみられるようなプランテーション型開発を容認せず、住民の農業活動を小規模にとどめたことによるとされる。在来住民の慣習的土地権は、この時代に土地所有法のなかに成文化され、そこでは、1家族につき焼畑休耕地をふくめた100エーカーまでの土地保有と、土地保有者の子孫らにその権利が相続されることがみとめられた。ブルック3代目のヴァイナー期 (1917-1946年) においては、開発にもようやく力が入れたが、それでもサラワク州土の5分の1といわれる在来住民の慣習的土地権利が開発のまえに立ちのぼってきた (King 1990 : 163; Chew 1994 : 85; Sutlive and Sutlive (eds.) 2001 : 933)⁹。

さらにサラワク州の開発を拒む主たる要因には、内陸地の複雑な地形と、人口分布のまばらさゆえにインフラ開発の効果が地域住民にひろく浸透しえない点を指摘することができる (Masing 1988 : 57; *Borneo Post* 26/10/2008)。サラワクは、1963年のマレーシアへの統合以来、医療福祉や教育分野における設備サービスの充実化において着実に発展してきたことは間違いない。しかし、それらは沿岸都市部に偏り、サービスへのアクセシビリティをめぐるのは、内陸村落地域の住人らは経済発展の恩恵をうけることなく政治経済的に周縁化されてきたといつてよい (Jawan 1993 : 99; Chew 1994 : 86)。イバン人らサラワクの村落地域の住民は、教育と社会施設へのアクセスや公務員への就職をもとめながらも、連邦政府が支持するイスラームにしたがったサラワク政治から疎外され、州内の木材伐採など開発プロジェクトがうみだす潤沢な利益から十分な恩恵を受けられず、また森林の破壊によって自分たちの生活が脅かされ貧困生活を強いられている (Avé and King 1986 : 114)。サラワク村落地の住民は、開発からつねに周縁化されてきたのである。

サラワク州の村落人口は、1980年のセンサスでは、対都市人口の比率が82対18となり圧倒的多数であることがわかる。とくにサラワク州のイバンにおいては、村落居住者の割合が、1947年の99.4%から1980年の95.0%と依然として高く維持されてきた (Masing 1988 : 57)。こういった現状をふまえても、マレーシアのとくにサラワクにおける開発の成否は村落開発にかかっているといつてよい。

また現在サラワク州は、SCOREによって2030年までに150万人の新規雇用が見込まれるが、その内訳は、専門職および管理職3万人、工学技術職7万人、熟練工14万人、そして126万人が半

8 サラワクでは1998年に、バルイ川流域の15の村落 (ロングハウス) の15,000人が移転を強いられ、69,500ヘクタールの土地にバクン・ダム建設が開始された。最大2,400MWの出力をもつバクン・ダムは、2011年8月に稼働している。州内ではさらに4か所でのダム建設が計画されている (*Borneo Post Online* 6/7/2011; 1/1/2012)。またべつの資料では、15,000人ではなく6,000人となっている (Masing 1988 : 65)。

9 イバン人の教育の機会と、政治経済への参画が自由化されていくのはヴァイナー期後半になってからであった (Sutlive 1972 : 379, 457)。

熟練・不熟練工となる。サラワク州地元での専門職および技術者の雇用増加を見込んで、今後教育機関の整備がもてめられている。一方では、正規の学校教育を受けてこなかった35歳以上（2008年現在）の年齢層は、開発によって今後うみだされてゆく新たな職業雇用機会に対応できないため、そういった住民たちのために農業開発が見込まれている。とくに科学技術と近代的経営法の導入による農業の推進が挙げられる（*Borneo Post* 26/10/2008）。

以上のように、現在マレーシアおよびサラワク州では、社会経済開発が強力に推し進められるなか、とくに村落地域の住民は開発への積極的な参加と意識改革がもてめられ、それまでの自分たちの生活を一変させる新たな挑戦に駆り立てられている。つまり、サラワク村落住民の小規模農業や自給経済における貧困への対処として、自らの意識改革と開発への積極的な参加がもてめられているといった言説が成り立つ。

IV. 村落地の焼畑農耕と農業開発推進

つぎに、サラワク州の村落地域に居住する人びとにとってもっとも生業の中心であり続ける焼畑農耕と、それにまつわる農業開発の推進をみていきたい。

サラワクの内陸村落地が開発にとり残されてきた理由の一つには、すでにのべたように、地形の複雑さと人口分布のまばらさゆえにインフラ開発の効果が地域住民にひろく浸透しえない点など、地勢的な要因があげられてきた。たとえばマシンは、道路整備がすすまず、主たる移動を河川交通に依存した内陸村落居住者の市場へのアクセスの困難さについて具体的につぎのように説明する。インドネシア・カリマンタンとの内陸国境付近にある村落ロング・ジャウェLong Jaweでは、最寄りの市場があるブラガBelaga町まで、船等を利用して往復1人あたり150リンギット（およそ5,000円）がかかり、また自前の小船を利用すればガソリン代600リンギット（およそ2万円）を要する。しかし村で採取したゴムの240キログラム程度を町で換金しても280リンギット（およそ9,000円）にしかない。このように、村落地の住民は、市場や行政との物理的距離によって各種開発プロジェクトや援助プログラムから遠のき、発展から確実にとり残されてゆく（Masing 1988 : 58）。程度の差はあれ、こういった孤立した村落居住者は、サラワク州人口の半数を占めながら、国による開発プロジェクトの割り当てがつねに低い程度にとどまる（Masing 1988 : 62; Wee Chong Hui 1999）。

国家開発の成否をにぎる村落開発だが、マレーシアは1957年の国家成立以後、国内のコメ自給率をあげることを目標とし、村落住民を自給農業への依存から脱却させるべく、より近代的な農業の推進に取り組んできた。サラワクにおいても1973年に正式にコメの自給自足政策が発表され、水田耕作のための水利灌漑設備や高収量品種が導入されてきたが、内陸地の住民のあいだでは本格的な商業的取り組みにはいたっていない（Solhee 1988 : 93）。とくにイバンの大半は村落地に居住し、陸稲を主作物とする自給を基本とした焼畑農耕をいとなむ。1960年代の統計では、イバン人の98%と、華人の2%、そしてマレー人の71%が陸稲を主作物とする農耕を生業とする（Jones 1966 : 157-158）。また1980年の統計では、サラワク労働人口の32%が稲作に従事

するが、GDPに対する貢献はわずか3%のみである (Solhee 1988 : 69, 99)。この数値が、サラワク農耕民の稲作がいかに自給型農業として小規模にとどまっているかを示しているであろう。

移動焼畑は、口語的英語において“slash-and-burn”（「森林を伐採して焼き払う」の意味）や、フランス語では「ノマド農法」などとよばれ、森林を使い捨て浪費するものとして、長らく軽蔑的に捉えられてきたものである (Cramb 2007 : 74ff.)。歴史を振り返ると、20世紀初頭、当時のブルック政府は移動焼畑民に土壌のより豊かな沿岸低地へと定住するよう促したが成功していない (Cramb 2007 : 126)¹⁰。そして英国の植民地社会調査の一環として行われた先駆的イバン研究においても、「イバンは森の蚕食者である」とのべられてきた (Freeman 1955)。さらに林業開発がサラワク州の急務の課題とされた1970年代からは、焼畑民は、伐採業者および政府にとって高価かつ貴重な熱帯林固有のメランチ材やラミン材などをかまうことなく切り倒して焼き払い、また後始末もせず森を荒廃させると厄介視されてきた (Avé and King 1986 : 27)。つまり、焼畑とは、収穫量が低だけでなく、環境や土地の疲弊と劣化をまねく悪習的農法と見なされ、サラワクではそれに代える水田耕作への積極的な転換が促されてきたのである (Freeman 1955; Ridu 1994)¹¹。

彼ら焼畑農耕民とは、開発にのりきれずにある犠牲者のようでもあり、またなぜ行政の期待に応えることもなく不便な土地に住みつづけ生産性の低い焼畑を基本とした生活をやめないのか。これは、商業的に儲かると行政担当者が説明する機織りになぜ取り組まないかという疑問とかさなる問いである。開発言説からだけでは、彼らの主体性はなかなか見えてこない。

本論以下では3つの村落を事例にあげて、焼畑農耕民イバンの生業観と機織りの取り組みについて、経験的データをもとに概観していきたい。最初にあげる事例は、ベトン県において機織りがかつて当地ではもっとも盛んに行なわれていた村だが、ここでは、サラワク州農業局の農業エコノミストとして1977～1983年にベトン県内の調査を行なったクラム (Cramb 1988) の資料をもとに、当村の商業的農業への取り組みをみてゆく。ただし当村の機織りにかんする具体的なデータはない。そしてカピット県の事例では、筆者の調査村を2つあげて農耕および機織りについてみていきたい。

V. ベトン県スタンバック村におけるゴム商業栽培と焼畑の両立

すでにのべたように、ベトン県では現在機織りはほぼ衰退しているが、ここでみてゆくスタン

10 下流デルタ地域においては、伝統的に水稻 (*padi raya*) も行われてきた (Pringle 1970 : 26 cit. in Cramb 2007 : 79)。ここで指摘できるのは、内陸地の住民が移動焼畑をすてて沿岸低地へ移り住むことがなかったという点である。

11 このように、とくに開発をめざす国家にとって移動焼畑に対する否定的見方は強化されてきたが、実際には土地を使い捨てるのではなく、休閑期を経て土壌の栄養分が回復したのちに再利用する正当な農法であったとして近年見直しもはかられてきた。たとえばクラムは、「低投入持続的地域密着型農法」 (low input sustainable, community-based agro-forestry) であるとして、科学的な視点にもとづいてその農法の正当性を分析する (Cramb 1985; 1988; 2007)。ただし移動焼畑が環境に適合した農法であれ、人びとはなぜより高い収穫が得られると説明される水田を選ばないかという疑問への答えにはならない。

バック村は、地域の有力村としてかつて機織りが盛んで、また技術の高いプア・クンプをつくることで知られてきた。またこの村は、サラワク州内の他のイバン村落に先立って20世紀初頭にゴムの商業栽培に取り組んだ経緯を持つことでも知られている。

ゴム（パラゴムノキ：*Hevea brasiliensis*）は、サラワクでは、1902年にボルネオ会社（Borneo Company）によってはじめて商業栽培が行なわれたが、プランテーションが展開した半島マレーシアや東マレーシア・サバ州とは異なり、ヨーロッパ人による開発を拒みつづけたブルック政策のもとで、おおむね小規模農業としてとどまってきた。イバンによる商業栽培は、スタンバックにおいて、住民が1909年に着手し、8ヘクタールの土地に4,000株の苗を植えたことが初めてとなる（Cramb 1988：113）。ゴムの商業栽培は、その後地域周辺のイバンの間にひろまり、スタンバックでは苗を商業的に供給するようにもなっていた（Cramb 1988：113）。

ゴムは、栽培して8～12年の後に採取が可能となり、その後数十年のあいだ採取することができる。またやせた土地でも植えつけることができ、焼畑の休耕地を利用するなど手間がかからない。一方でコショウなどは、労働集約的な性質と、とくに病虫害対策において手間とコストが多大にかかることとされ、すでに19世紀後半にはベトンのイバンによって栽培されたが、ゴムほどには好まれることなく、イバンの間で一般的に広まるには至らなかったといわれている（Cramb 1988：121）。

スタンバックにおけるゴム栽培は、サラワクのイバンのなかでもっとも早く取り組まれ、商業規模に発展成功してきた。またそれによって、壮麗なロングハウス¹²の建造や祭宴の盛大な開催をはたし、イバン社会では傑出した威信を獲得してきたとされる。またイバンのあいだでもっとも早くキリスト教（英国国教会：アングリカン）を受け入れたことで、子どもの学校教育への参加を早期に果たし、その後イバン人では初のサラワク州首相を輩出するなど、多くの村出身者が政治やビジネスの分野で活躍している。ただしここで特筆すべき点は、たとえゴムで儲かることが分かってもそれを専業とする者はなく、商業的農業が発展しても焼畑稲作をけっしてやめることはなかったことである。しかし時代を経て、住民の町への転居が進んだ1960年代を境に、ベトンにおける農耕および機織りの衰退はすすんだと考えることができる。

スタンバック村の事例は、20世紀初頭のイバン人の状況だが、とくにこれまでのボルネオ民族誌において注目され、後の「ボルネオ在来民にとって稲作はもっとも重要な社会経済活動である」（Avé and King 1986：30）や、「イバンが所持するものでイネ（*padi*）はもっとも尊いものとされ家の繁栄と幸福安寧の源とされる」（Freeman 1970：50）など、稲作を不可欠とするイバンらの生業観の定説化を導いてきたのではないだろうか。これによって現在に至るまで、自給稲作を営む村落居住者の依然とした比率の高さとも相まって、人びとの米づくりを主とした一面的な

12 ロングハウスは、狩猟採集民をのぞく内陸在来民のほとんどが居住する、多家族同居型のボルネオ島固有の家屋様式である。建築構造は、一般的には75～150メートルの長さがあり、また700メートルに達するきわめて長大なものも1900年に報告されている（Rousseau 1990：104; Waterson 1990：60）。イバンのロングハウス（*rumah panjai*）では、基本的に一軒によって1つの村落共同体が形成されるが、階層性をもつ中央ボルネオのクニヤKenya人やカヤンKayan人の社会では、いくつかのロングハウスが集合して1つの村落を形成することもある（Hose and McDougall 1993：vol.1. 203; King 1993：220; Sutlive 1972：353; 内堀 1994：182; Sather 1996：77）。

生業観が民族誌的に表象されてきたといえる。つまり、商業収益をもとめることはイバンの生業観とは相容れないゆえに、行政が儲かると推奨する様々な開発プロジェクトには関心を示さないという現在においても流布する一枚岩的説明とつながる。

VI. カピット県L村における町への転居と農耕ばなれ

つぎにカピット県の後背地にあるバレー川流域のL村を事例にあげ、近年地域内に広くみられる町への転居とそれとともなう農耕ばなれおよび機織りの衰退についてみていきたい。

カピット県の2005年の統計では、町と村落間の人口比率は24対76となり、現在も村落居住者が圧倒的に多い。またそれら村落居住者とは、ロングハウスに居住し、ほとんどが焼畑をいとなむ自給農耕民である（*Year Book of Statistics Sarawak* 2005）。

L村は、カピット町からバレー川を上流へ高速船で3時間半、およそ90kmの距離にある。県内では町からもっとも遠隔に位置する村落だが、これは20世紀初頭にサラワク王ラジャから信頼を受けてサラワク・イバンの最高首長トゥメンゴン*temenggong*を任命された首狩りの名士であったコーKoh（1870-1956）が、民族の境界を管轄するよう依頼をうけて居住した地である。当時は、コメの豊作を約束する原生林が無限にひろがり、そんな土地を貪欲にもとめたイバンにとっては最高の名誉であったといわれている。このトゥメンゴン・コーの政治力によって、村にはカピット県でははじめての公立小学校が1950年に開校され、それ以後、カピット県内のイバン社会では際立って早くから教育を修得し、エリート村として、多くの人材を政治やビジネス分野へ輩出してきた。また今日においても、カピット県内で機織りが盛んな1つの村としてひろく知られている。

筆者は、2003年以来、L村を短期滞在で何度か訪れてきたが、とくに2007年には住民のカピット町への転居が急速に進んでいたことを知った。これは国内経済の好況が一因にあるが、またL村にかぎらず、この10～15年ほどの間、カピットに広くみられる現象といっていよい。ただ近年では、とくに好景気にわたった2007年あたりが1つの傾向にあったといえる。以下では、L村における住民の町への転居と、必然的ともいえる農耕離れおよび日常実践としての機織りの衰退について、筆者の体験をもとに記述したい。

L村の村長は、かつて2005年の筆者の訪問の際に、彼の家（*bilek*）は毎年コメの収穫に恵まれ、村内でコメづくりに長けていることを誇りにして語っていた。コメづくりに長けることは、イバンにとって伝統的な美德であり、高位の社会ステータスである「米を知る者」（*tau padi*）と呼ばれる¹³。ところが、筆者が2007年に再訪した際には、様々な状況の変化がみられ、村長の家ではもはや米づくりは行われていなかった。

状況の変化とは、第一に、2007年に一戸建ての家を町に建てたことである。村長は、村の近

13 *tau*は、‘able to’, ‘can do’, ‘knows how’, ‘may’ をしめす形容詞である（Sutlive and Sutlive 1994 : 264）。この霊的庇護のもとに獲得する特別な能力はセレガー*seregah*といい、イバンは、そうした能力を人生のなかで獲得してゆく者を尊敬の対象と見なした（Sather 1996 : 95）。

所にある木材伐採キャンプ地にて現場監督としての仕事を持ち、船外モーター付きの自家用ロングボートで毎日通勤しているために町へ移り住むことはできないが、夫人は1か月のうちほぼ半分を町の新家で過ごし、村と町を行き来するようになった。なぜ町に家を買ったのか訊ねたところ、4人の子どもの末子がついに村の小学校を卒業し町の中学校へ入ったのと、両親が老齢にて病院通いを強いられるので町に住むのが便利であるということ。そして、町で家を借りれば月300リンギット（およそ10,000円）もの家賃が掛かるため、むしろ買ったほうが安いと説明した¹⁴。米づくりはとくにそれまで両親が率先して担っていたが、2人がついに老齢により体力的限界にきたこと、また夫人は妹の3歳の娘を預かり育てていることで手がまわらないなどの理由から農耕をやめていた。妹の娘を預かるというのは、妹夫婦がカピットの木材伐採キャンプ地に住み込みで働いており、砂ぼこりが多いなど環境の悪さを嫌って頼まれているという。そして夫人はこの3歳の姪子連れて町と村を往来していた¹⁵。

また農耕ばなれについて、夫人はつぎのようにものべていた。すなわち、コメづくりには肥料や農薬などを買わねばならないことを考慮したら、今日ではベトナム産米を買うほうがむしろ安くて便利だとの理由である。カピット町での販売値をみると、サラワク産米は約110円/kgと、ベトナム産米は約80円/kgだった¹⁶。

農耕をやめると、コメだけでなく、生鮮野菜も町での購入に頼ることになるが、町へはそれほど頻繁に行くわけではないので、必然的に普段の食事は野菜不足となる。魚は、木材伐採会社が上流域に進出してからは川が濁り、今日ではそれほど多くはとれない。また大きなものがとれた場合には町で販売し現金化する。イノシシ肉が地元での狩猟により時に豊富に出回り、米飯とイノシシ肉の塩漬けが多く食される。2007年に筆者もL村に1か月の滞在中、ほぼ毎食白飯とイノシシ肉を食べ、それ以外のおかずは一切ない日もかなりつづいた¹⁷。野菜を求めてみたところ、野菜づくりを行なう村の住民がときに余剰分を売ってくれるというのが、滞在中は一度もその機会にめぐまれず、村内はあきらかに野菜の供給不足にあったといえる。

以上、L村の事例では、近年の経済の好況によって促された町への転居とそれにとまなう農耕ばなれをみた。ここでは学校や病院など町のアメニティが米づくりをやめる大きな誘因となっているが、それは内陸カピットのイバン社会ではこの10～15年ほどの現象だといってよい。町へ転居した者は、村落地での米づくりに代えて賃金労働に就くようになる。彼らにとって、米づく

14 家 (*bilek*) を完全に捨てることは「炉を捨てる」(*buai dapur*) と呼ばれるが、そうすることは比較的稀だといえる。カピット中の多くのイバンが同じような理由から町内に生活拠点を移すが、それはけっして村の家を捨てて移住をするのではない。なぜなら家財や畑地などがそこに残され、また休暇期には家族メンバーがもどる故郷となっているからであると説明される。

15 高速船の運賃は、大人が片道10リンギット（約330円）と決して安くはない。

16 ベトナム産米など安価なコメは風味においてはまったく異なる。イバンの農耕民は自分たちのつくるコメを最高と見なす。

17 ブッシュミートの売買は本来違法であるが、2009年当時、イノシシ肉は村においては8リンギット/kg程度（約240円）で売買されていた。一方カピット町の市場では15～16リンギットの値段で出回っていた。需要と供給のバランスによるが、25リンギット/kg（約800円）に高騰することもある。

りはもはや生命線とは見なされていない状況を示している¹⁸。

また機織りに関して、村長夫人は、これまで子どもの時から、村生活では農耕の合間に実母と一緒につねにつづけていたという。政治家が村へ訪問にくると、染織布だけでなくビーズ細工など伝統工芸品を多く買い込んでもらえるので、そういう機会にあわせて住民女性はみな制作に励んできたと語る。とくに布などは急につくることはできないので、つねに日ごろからつくりつづける必要があるという。ところが、町のほうの家では、妹家族も同居しており、村の住居と比較して圧倒的に空間がせまく、機織りには適した環境とは決していえない。実母は、寝込みがちな老夫のベッドのとなりで介護をする傍らに小さめの機で機織りを行っていたが、夫人が機をひろげるほどのスペースはなかった。

VII. カピット県E村における水田の取り組みとキリスト教信仰

つぎにみるのは、カピット町からおよそ56kmの距離に位置し、バレー川の支流河川を入ったところにあるE村である。支流河川では高速船はなく、ロングボートと呼ばれる自家用の船外機付き小舟で往来しなければならない。L村の事例でみたように、近年バレー流域のイバンの間でとくに町への転居が増えるなかで、E村内においても、1990年代の半ばあたりから町への転居者は増加し、筆者の2008年の調査では、77世帯 (*bilek*) のうち10世帯が空き家の状態にあった。ただし完全な離村 (*buai dapur*) は一世帯であった¹⁹。以下では、筆者が2008年9月から9か月滞在した経験から得た資料をもとに、とくに住民のキリスト教信仰との関連において農耕と機織りへの取り組みをみていきたい。

E村では、2009年現在、村長をはじめとする3世帯が行政の指導にしたがい水田耕作 (*padi raya*) を手掛けている。しかし、その取り組みは村内全体に浸透するには至っていない。住民の1人は、当地が丘陵地ゆえに水田のための平地を開墾することは困難であると説明する。村長ら3世帯は、平坦な土地を所有し、それぞれ世帯単位の自給規模において水稻を10年来つづけている。焼畑と同様に小規模な自給稲作であるなら焼畑に代える利点は何であるかとの質問に対し、村長は、水田では灌漑を整備する必要があるが焼畑のように毎年開墾する労力が省け、また急斜面での危険な作業もないと説明する。またさらに、水田はイバンの文化ではないため、焼畑サイクルにまつわる多くの儀礼活動が省けてよいとも話す。このイバン文化に対する否定的見解

18 町への転居には、上述した理由のほか、家族をささえる男たちの就労がある。とくに多いのが、カピットで木材伐採の仕事を経験した若者は、エキスパートとしてアフリカやロシア、パプアニューギニアなどの海外キャンプ地へ赴く。学歴をもたない村落地出身のイバンがもっとも高い給与がえられる仕事である。

19 E村では、町など遠隔に住むなどで家 (*bilek*) を1か月以上離れた者は、帰郷時に再び炉をつかう際、村長に30リンギット (約1,000円) を支払うことが規定されていた。しかし、炉を使わないのなら30リンギットは支払わなくてよいが、炉は必ず1年に一度は火をいれなければならないとされていた。守らない場合も罰則金が科せられる。帰郷者は、大体6月の正月 (ガワイ・ダヤック *gawai dayak*) または12月のクリスマスを楽しんで帰郷する。同様に、クラムは、ビレックを長らくあけることは "*pemali chelap dapur*" (「炉を冷ますことの禁止」の意味) とし (Doveとの私信)、かつては月に最低2回は炉に火を入れることが規定されていたが (Richards 1963 : 57, cit. in Cramb 2007 : 332 n.13)、その後規定は緩和されているとのべる。しかし、村 (ロングハウス) ごとにおいて規定 (*adat*) は異なるというのが筆者の理解である。

は、村長ら3世帯が村内においてもっとも熱心なキリスト教メソジスト派の信者であることから説明できる。

サラワク在来民族の間では、ボルネオ福音教会（SIB：*Sidang Injil Borneo*）やローマカトリック教会、またイバンでは、先のベトン県など沿岸部における英国国教会（アングリカン）と、カピットではメソジスト教会などが普及している。カピットにおけるメソジストの活動は、ようやく1939年に始まるが、第二次世界大戦をはさみ、先のL村のサラワク・イバンの初代最高首長トゥメンゴン・コーらが、1949年に初めて入信するに至った²⁰。E村では1979年に普及が始まっている。

メソジスト教会の特徴は、厳格な規則をもつボルネオ福音教会などと比べて、機織りをふくめた民族の慣習文化に対する許容範囲が広いことである。しかしそれでも、教会としてはキリスト教の精神にしたがうことをもとめるがゆえに、E村の村長をはじめ教会よりの住民の間では、神霊への供物をともなう農耕儀礼などを自ら開催することには消極的であったといえる²¹。

またキリスト教にしたがうこととは、教育や経済活動の優先を得るための政治的方策でもある（cf. Varney 2011：129-130）。現在州内の55%のイバンがキリスト教信仰者という状況においても、キリスト教入信とは社会的名声を獲得する1つの手段として広く捉えられているといつてよい（Saunders 1995 cit. in Varney 2011：128, 137）。実際に、村長は住民のために町の農業局へ定期的に赴き、発電用の小規模ダムを裏山の溪流に建設してもらうよう話を持ち掛けている。また一方で、E村の住民の30歳の男は、キリスト教には寄付金をとられるだけで得がないと話す。

そしてキリスト教との関連において機織りとは、E村の村長は、日中にするものなら「怠惰な女の趣味活動」であると明言する。それは、キリスト教の理念に従えば、仕事とは、つまり汗を流して働くことであるからと主張する。村長自身も、村内ではとくにコメづくりに長けているように、村長夫人とともに積極的に農作に取り組んでいる。しかし農閑期に入る12月ころになると、村長が何を言おうと、夫人は頻繁に昼間にも隣近所の女性同士でおしゃべりをしながら機織りを楽しむ様子をみせていた。ただそれは経済活動としての取り組みではない。

以上、自給農業を営みつづけるE村の事例をみた。ここでの米づくりは、行政の指導とさらにキリスト教の倫理観にもそって取り組む水田稲作であるが、商業規模には至らずあくまでも自給レベルにとどまったものである。これは一枚岩的には捉えきれないイバンの生業活動の多様なあり方を示している。またそのようなイバンの米づくりに対する伝統的美徳観とキリスト教的な仕事観からは、決して彼（女）らの生業活動には従うことのない機織りのあり方が見えてくる。

20 晩年を迎えたコーの入信はただ単に政治的関心にしたがったとの見方もある（cf. Varney 2011：129-130）。

21 教会や行政の間では、民族の伝統信仰についていかに扱うべきかつねに議論されているが、とくに教会が非難する要素として、首狩りやシャマン療法、離婚、深酒、ギャンブルがあげられる。また霊への供物などは、それぞれ牧師によって意見が分かれる（Varney 2011：151-168）。またイバンのキリスト教信仰については、土着の多神信仰に融合したシンクレティズム様式と捉えるべきかもしれない。

VIII. まとめ ―商業開発が期待される機織りの生業観からの理解

本論では、マレーシア・サラワク州の村落社会をとりまく開発言説と、村落居住のイバンが主たる生業として取り組む稲作の一端をみることにより、村落生活における機織りの社会・文化的位置づけを捉え直すよう試みた。

村落居住のイバン女性によって営まれてきた機織りは、1980年代から地域の産業振興や女性開発などの目的の下に商業開発がすすめられてきたが、一部ではユネスコから国際的な賞を受賞する例もあったものの、米づくりに代えて主たる稼業として取り組む者がなく、行政が求めるような産業としての発展には程遠い状況にある。

元来プア・クンプ染織布は、焼畑農耕サイクルにあわせた各種儀礼活動に用いられ、そういった機会に合わせて年に数枚程度がつくられるものであった。L村のようなある程度の規模をもつ村では、村を訪問する政治家が布を買い込むこともあったが、それはカピット県のイバン村落地を広く見渡せばごく例外的ケースである。ただし、このような政治家による取組みと支援がビジネスの芽として育たなかったという不可解な状況は、本研究の主たる関心と重なる点である。

そしてE村の事例からみたように、機織りは通常農閑期もしくは農耕を終えた夕刻にせいぜい行われ、ロングハウス居住における農耕活動のサイクルと密接な関係にあることがいえる。また整経などの製織の準備工程では、空間スペースに加えてロングハウス内の女性同士の協同が不可欠である。L村の事例から、町の個人の軒家においては作業の困難さを容易にうかがい知ることができる²²。つまり機織りは、村落地のロングハウスに居住する農耕民の生活様式に根差して培われてきたが、ただし生活上の優先度は総じて低いといえてよい。

このように、農耕生活における機織りの位置づけが理解できたが、ではなぜ村落居住者のあいだで米づくりに代えて機織りを生業とする者が出ないのか。決してその答えは、行政が儲かると推奨するプロジェクトに関心を示さないからではない。また、商業収益をもとめることはイバンの生業観とは相容れないといった一枚岩的な説明でも理解することはできない。ここでは明確な答えなどはないが、理解の核心に近づくための2つの点をのべて本論をまとめた。

1つは、機織りは、織り手個々人が糸の染めから織りまでほぼ一貫して遂行し生産性を求める工程間の分業はない。織り込む模様には、詩的な題名が付されるなど、農耕民の農作物とは違い、唯一無二の作品であり、またこれは産業化に立ちはだかる壁だといえる。筆者は、L村の村長夫人が所有する技術センスの高いある1枚のプア・クンプをぜひ売ってほしいと度々願ったことがあった。それを夫人は頑なに拒み続け、なぜ売ってくれないかとの問いに「売ったらなくなってしまうから」と答えた。彼女らの布づくりに対する考えを垣間見せる貴重な言葉である。政治家や外国人観光客など他人に売るものとは品質において区別していることがわかる。唯一無

22 ただし本論で示したL村の事例とは、筆者が参与観察した1家庭のケースであり、村に残る多くの住民のなかには機織りを続ける女性もいる。またE村で機織りを行なう女性とは、ロングハウス住民全体でわずか2～3%程度であり、それぞれ2例ともすべての住民女性にあてはまるものではない。

二の作品づくりとして、売るためにつくっているのではないことが明白となる²³。

2つめは、彼ら農耕民が生業とする稲作とは、独自の複合型経済システムに組み込まれた農耕活動であるということ。そこでは稲作だけでなく、漁猟や狩猟、森林産物の採集、ゴムやコショウなどの換金作物栽培、そして出稼ぎなど就業労働を組み合わせた複合型経済によって成り立っており、そういった実態が近年注目されてきた²⁴。つまり、村落社会の生業活動とは、生存経済と市場経済をまたぎながら、自分たちの生存領域の足場を完全に捨て去ることなく、豊富な市場機会を最大限に利用する、そういった複合的経済活動によって成り立っていると考えることができる (cf. Dove 2007)。機織りもまた同様に、複合型経済システムに組み込もうと考えるとき、農耕に代えて機織りに取り組んでもらうという期待は、イバンからすれば反常識的ですらある。それはまた、農村社会・文化の消滅を一枚岩的にうたってきた開発言説が見落としてきた視点ともいえるだろう²⁵。



図1 ロングハウス通廊空間における機織り（絣り作業）の光景

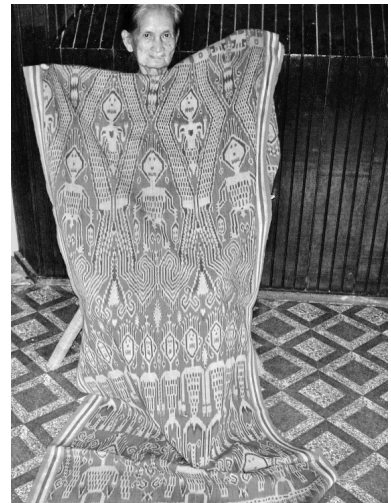


図2 家宝とするプア・クンプを誇らしく見せる女性

23 模様の題名「タイトル」(Gavin 2003) について、拙著 (Hasegawa 2015) を参照。

24 また焼畑稲作だけをみても複合的性質がみられる。それはコメだけでなく、タロイモ、サツマイモ、キャッサバ、トウモロコシ、ショウガ類など各種野菜の種も同時にまき、また畑の周辺に植えつけられる多くの果樹は休閑期も管理維持される (Avé and King 1986 : 30)。

25 村落社会、染織文化について、そういった相関的な関係性への視点に立つことを今後の研究ではとくに留意していきたい。

引用文献

- 上木 貴博 2012 「マレーシア—イスラム18億人市場の扉」『日経ビジネス』2012年10月15日号, 日経マグローヒル社, 82-85頁。
- 内堀 基光 1994 「森の資源の獲得戦略とその象徴化」大塚柳太郎 編『資源への文化適応：自然との共存のエコロジー』雄山閣, 171-194頁。
- 長谷川 悟郎 2007 「クリシェをこえて—‘首狩りの布’ マレーシア・サラワク州イバン染織布ブア・クンプの今日的展開」『南方文化』第34輯, 49-70頁所収。
- ホン, イブリン 1989 『サラワクの先住民：消えゆく森に生きる』（北井一, 原後雄太訳）法政大学出版局。
- Avé, Jan B. and King Victor T. 1986 *People of the Forest: Tradition and Change in Borneo*. Leiden, National Museum of Ethnology.
- Berma, Madeline 1996 *The Commercialization of Handicraft Production among the Iban of Kapit Division in Sarawak, Malaysia: Constraints and Potential*. Ph.D. thesis, the University of Hull.
- Chang Ngee Hui 2009 “High-Growth SMEs & Regional Development: The Sarawak Perspective State Planning Unit”, Chief Minister’s Department Sarawak.
(http://www.epu.gov.my/c/document_library/get_file?p_l_id=12577&folderId=44603&name=DLFE-3210.pdf)
- Chew, Daniel 1994 “Social and Cultural Trends in Sarawak”, *Sarawak Museum Journal*, Vol.XLVII. No.68 (New Series), pp.85-100.
- Cramb, R. A. 1985 “The Importance of Secondary Crops in Iban Hill Rice Farming”, *Sarawak Museum Journal*, No.55, pp.37-45.
- 1988 “The Commercialisation of Iban Agriculture”, in R.A. Cramb and R. H. W. Reece (eds.), *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives*, Melbourne: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.105-134.
- 2007 *Land and Longhouse: Agrarian Transformation in the Uplands of Sarawak*. Nordic Institute of Asian Studies, Copenhagen: NIAS Press.
- Dove, Michael R. 2007 “Foreword”, in Cramb, R. A., *Land and Longhouse: agrarian transformation in the uplands of Sarawak*, Nordic Institute of Asian Studies, Copenhagen: NIAS Press, pp. xi-xiv.
- Freeman, J. Derek 1955 *Iban Agriculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. London: Her Majesty’s Stationery Office.
- 1970 *Report on the Iban of Sarawak*. London: Athlone Press.
- Gavin, Traude 1996 *The Women’s Warpath: Iban Ritual Fabrics from Borneo*. UCLA Fowler Museum Cultural History.
- 2003 *Iban Ritual Textiles*. Leiden: KITLV Press.
- Gittinger, Mattiebelle 1979 *Splendid Symbols: Textile and Tradition in Indonesia*. Washington D.C.: The Textile Museum.
- Hamid Bugo 1988 “Economic Development since Independence: Performance and Prospects”, in Cramb, R. A. and Reece, R. H. W. (eds.), *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives*, Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University pp.49-55.
- Hasegawa, Goro 2015 “label, title, and *juluk*: naming system for weaving designs of Iban ritual fabric”, *Borneo*

- Research Bulletin*, vol. 46, Williamsburg, Virginia: Borneo Research Council. (in press)
- Heppell, Michael 1989 "Whither Dayak Art?" *Sarawak Museum Journal*, Vol.XL, No.61 (New Series), pp.75-91.
- Heppell, Michael, Limbang anak Melaka and Enyan anak Usen 2005 *Iban Art: sexual selection and severed heads*. Amsterdam: KIT Publishers.
- Hose, Charles and McDougall William 1993 (1912) *The Pagan Tribes of Borneo*. Singapore: Oxford University Press.
- Howell, William 1912 "The Sea Dayak method of making thread from their home-grown cotton", *Sarawak Museum Journal*, Vol.1-2, pp.62-66.
- Jawan, Jayum A. 1993 *The Iban Factor in Sarawak Politics*. University Pertanian Malaysia Press.
- Jones, L. W. 1966 *The Population of Borneo: A Study of the Peoples of Sarawak, Sabah and Brunei*. London: Athlone Press.
- King, Victor T. 1990 "Land Settlement Programmes in Sarawak: A Mistaken Strategy?" in King, V. T. and Parnwell, M. J. G. (eds.), *Margins and Minorities: the Peripheral areas and Peoples of Malaysia*. Hull University Press.
- 1993 *The People of Borneo*. Oxford: Blackwell.
- King, Victor T. and Parnwell, Michael J. G. 1999 "Environmental Change, Local Responses, and the Notion of "Development" in Sarawak' *Rural Development and Social Science Research: Case Studies From Borneo*, Borneo Research Council, Inc. pp.159-191.
- Leigh, Barbara 2000 *The Changing Face of Malaysian Crafts: Identity, Industry, and Ingenuity*. Oxford University Press.
- Masing, James 1988 "The Role of Resettlement in Rural Development", in Cramb, R. A. and Reece, R. H. W. (eds.), *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives*, Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.57-68.
- Ong, Edric Liang Bin 1986 *Pua: Iban Weavings of Sarawak*. Kuching: Society Atelier Sarawak.
- Pringle, Robert 1970 *Rajahs and Rebels: The Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941*. London: Macmillan.
- Rauf, Abang Haji Abdul 1994 "Planning for Wawasan 2020" *Sarawak Museum Journal*, No.68, pp.191-221.
- Richards, Anthony (Compiled) 1997 (1981) *An Iban-English Dictionary*. Fajar Bakti: Oxford University Press.
- (ed.) 1963 *Dayak Adat Law in the Second Division*. Kuching: Sarawak Government Printer.
- Ridu, Robert Jacob 1994 "Social and Cultural Change: Trends among the Dayaks in Sarawak" *Sarawak Museum Journal*, No.68, pp.137-143.
- Rousseau, Jérôme 1990 *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*. Oxford: Clarendon Press.
- Sani, Rustam A. 1994 "Aspirasi Socio-Budaya Bangsa Malaysia dari Perspektif Wawasan 2020", *Sarawak Museum Journal*. No.68, pp.165-179.
- Sather, Clifford 1996 "All Threads Are White: Iban Egalitarianism Reconsidered" in Fox and Sather (eds.), *Origins, ancestry and alliance: explorations in Austronesian ethnography*, Canberra: Dept. of Anthropology, Australian National University, pp.70-110.
- Saunders, Graham 1995 "The Anglican Mission and the Brookes", in V. T. King and Horton A. V. M. (ed.), *From Buckfast to Borneo*, Hull: University of Hull.
- Solhee, Hatta 1988 "The Rice Self-Sufficiency policy: Its Implementation in Sarawak", in Cramb, R. A. and Reece,

- R. H. W. (eds.), *Development in Sarawak: Historical and Contemporary Perspectives*, Victoria: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University, pp.69-103.
- Steinmayer, Otto 1999 *Jalai Jako' Iban*. Kuching: Klasik Publishing House.
- Sutlive, V. H. 1972 *From Longhouse to Pasar: Urbanization in Sarawak, East Malaysia*. Michigan: Ann Arbor, University Microfilms International.
- 1991 “Preface”, in Sutlive (ed.), *Female and Male in Borneo: Contributions and Challenges to Gender Studies*, Williamsburg: Borneo Research Council, pp.vii-viii.
- Sutlive, Vinson and Joanne Sutlive 1994 *Handy Reference Dictionary of Iban and English*. Kuching: Tun Jugah Foundation.
- Sutlive, Vinson and Joanne Sutlive (eds.) 2001 *The encyclopaedia of Iban studies: Iban history, society, and culture*. set v. 4. Kuching: Tun Jugah Foundation.
- Varney, Peter 2011 “The Methodist Church in Sarawak and its Work among the Iban, 1939-1968”, *Borneo Research Bulletin*, Vol. 42, Borneo Research Council, pp.127-171.
- Waterson, Roxana 1990 *The Living House: an Anthropology of Architecture in South-East Asia*. Singapore; New York: Oxford University Press.
- Wee Chong Hui 1999 “Sabah and Sarawak in the Malaysian Economy”, in King, Victor T. (ed.), *Rural Development and Social Science Research: Case Studies from Borneo*, Borneo Research Council Proceedings Series, Borneo Research Council, Inc, pp.93-139.
- Wright, Leigh and Hedda Morrison, K. F. Wong 1972 *Vanishing World: The Ibans of Borneo*. New York: Weatherhill.
- Yearbook of Statistics Sarawak 2005*, November 2005, Department of Statistics Sarawak.

新聞記事

- “Five million foreign workers by 2010?” August 12, 2006 *Borneo Post*.
- “SCORE to push Sarawak towards industrialised state”, October 26, 2008 *Borneo Post Online*
<http://www.theborneopost.com/2011/06/28/sarawak-govt-plans-to-build-up-to-6200/> (2012年8月13日アクセス)
- “Bakun Hydroelectric Dam”, July 6, 2011 *Borneo Post*.
- “Bakun offers huge tourism potential”, January 1, 2012 *Borneo Post Online*.
<http://www.theborneopost.com/2012/01/01/bakun-offers-huge-tourism-potential/> (2012年8月13日アクセス)

図版出典

- 図1 2014年8月カピット県バレー流域村落にて筆者撮影。
商業生産ではない、織り手個人の唯一無二の作品づくりとして、農耕作業の合間をぬって取り組む。
- 図2 2008年12月カピット県バレー流域村落にて筆者撮影。
プア・クンプ染織布は、先祖伝来の家財として家に受け継がれ、日常の儀礼活動に用いられる。家宝級のプアは1970年代以降に西欧人の博物館関係者らに買いつくされたと言われていたが、じつはそうでもない。彼（女）らは売れるものと売らないものを分別していることが筆者のこれまでの調査で分かってきた。

陣中旗の神学

—真理と十字架—

Theology of the “Flag in the Camp of Amakusa-Shirō”: Truth and the Cross

秋山 学
AKIYAMA Manabu

Abstract

The famous “Flag in the Camp of Shirō Amakusa” (the so-called “Jin-Chū-ki”; in possession of the Amakusa Christian Palace) is one of Japanese National Important Cultural Patrimonies. This Flag was used as the Camp Flag of Hara-jō during the time of the Shimabara-rebellion (1637-1638), but it was originally produced as the mark-flag of “Brotherhood of the Sacrament”, namely of the community of the Saint Mass, organized in Nagasaki or Arima (ca. 1590). In the center of this Flag there are depicted both a large Host with a Cross and a Chalice under that Host, as well as two angels adoring the Host and Chalice from the right side and left below.

The theology of the Sacrament in the background of this Flag is based on that of the Trident Council (1545-1563). The chief point in that Council on the comprehension of the Saint Mass is that “the Saint Mass is the sacrifice of the crucified Christ for our salvation”. After this Council, the understanding of the Saint Mass was changed in the II. Vatican Council to the effect that the Saint Mass on the one hand is a feast, in which the faithful are invited to participate, on the other hand it is traditionally the sacrifice of Christ. I will suggest that here could be added the meaning of the cross as “glory” as it is stressed in the Fourth Gospel, because in this Gospel the cross surpasses all temporality in this world and has already become the sign of the Holy Trinity.

When we think about the meaning of this Flag, that it has been designated as one of Japanese National Important Cultural Patrimonies, I will compare this meaning with our method of interpretation of the Old Testament scriptures. These scriptures have already existed before the arrival of Christ. However, when we interpret these scriptures through the typological interpretation, they will attain universal significance. If we meditate on the meaning of the cross described on the Flag, the designation itself of the Flag as one of Japanese National Patrimonies, though based on the mere fact that it testifies to the “Shimabara-rebellion”, will have an important meaning. We, the Japanese people, are invited to have an experience of the cross of Christ through this Flag.

Key Words : “Flag in the Camp of Shirō Amakusa”; the Cross; Host; Sacrifice; Glory

キーワード : 陣中旗 ; 十字架 ; 聖体 ; いけにえ ; 栄光

Ⅰ. キリシタン史概要

1. 序. 2014年9月 ローマからブダペシュトへ

2014年秋、筆者はまず、ローマで開催された第13回ニュッサのグレゴリオス国際学会（9月17－20日開催）において、「ニュッサのグレゴリオス（335－394）による『雅歌』の終末論的性格」と題するイタリア語の口頭発表を行った（9月20日）。この大会での口頭発表を終えると、筆者はハンガリーの首都ブダペシュトに移動し、パーズマニ＝ペーテル・カトリック大学のクラニーツ・ミハーイ教授（1959－；基礎神学）による招きに応じて、同大学で日本のキリシタン殉教者に関する講演を行った（9月23日、ハンガリー語）。したがって筆者は2014年の夏、『雅歌』とニュッサのグレゴリオス」および「日本のキリシタン殉教者」という、一見大きく異なる二つのテーマに関して、同時に原稿を準備するという経験をするようになった。

しかしながらこの夏を終えて感じたのは、これら二つのテーマは、前者は教父学もしくは聖書学、後者は教会史学もしくは教義学という相異なる二つの分野に関わりながらも、両者とも神学研究という面で通底させて準備しうるものだったということである。本稿は、ブダペシュトで行った講演を骨子に、ローマでの研究発表で得たものを加味し、この間に得た実りを総括的に記述しようと試みるものである。

ところで2014年9月17日午前、外務省や文化庁など、世界遺産条約に関わる関係省庁の連絡会議が開かれ、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」をユネスコの世界文化遺産登録に推薦することが正式に決定された。9月中旬に推薦書がユネスコに提出され、2016年の登録を目指すとのことである。「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、現存する国内最古のキリスト教会で国宝でもある長崎市の大浦天主堂や、隠れキリシタンが潜伏し信仰を守った熊本・天草市の「天草の崎津集落」など13（その後14に分割変更）の文化資産で構成されている。

さて、本文の主題に掲げた「陣中旗」が、この「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」に含まれるのかどうか、2014年9月下旬の段階ではまだ確認できていないが、言うまでもなく両者は大いに関連している。「陣中旗」は、正式には「綸子地著色聖体秘蹟図指物」という名を持ち、通称の「天草四郎陣中旗」の名で知られる（図1）¹。江戸時代のキリシタン農民一揆として著名な「島原の乱」（1637－1638）において一揆軍が使用し、原城に掲げられていたものである。鎮圧軍の先頭を切った佐賀の鍋島氏が戦功の証しとして代々所蔵していたが、現在では国の重要文化財に指定され、熊本県天草市の天草切支丹館が所蔵している。日本国内では、この旗はもっぱら「島原の乱の生き証人」としての位置づけを得ており、国の文化財に指定されているのもその経緯による。けれども、その正式名称からも明らかなように、この旗は元来、16世紀後半から17世紀前半にかけてのキリシタン時代において、次第に圧力を増すキリシタン弾圧に抗する意味で積極的に設立された「組」、すなわちヨーロッパのカトリック教会における「信心会」ある

1 本稿で使用した写真（図1）は、カトリック島原教会に掲げられた同旗レプリカの絵葉書から画像処理したもので、天草切支丹館にある現物には、弾痕や血痕が生々しく残る。そのほか彩色にも、両者の間にはかなりの相違が認められる。

いは「兄弟会」のうち、長崎ないし島原半島の有馬に設けられた「聖体の組」の徴として用いられていたものである。この旗が「島原の乱」の一揆軍旗として用いられていたということからも明かなように、この乱の意味づけ・位置づけが歴史学・文化史的にいかなるものとなろうとも、乱がキリシタンによる一揆であったことは動かしがたい。筆者はこの点に着目し、冒頭に述べたブダペシュトでの招待講演では、もっぱらこの「陣中旗」を神学的、ないし教義史的に捉え出すことに努めた。

本稿においては、日本のわれわれにとってこの「陣中旗」がいかなる意味を持ちうるのかを考えてみたいと思う。その際、この「陣中旗」が国の重要文化財に指定されていることの意味を大きく捉え、日本人にとっては異質と考えられる秘跡神学のための貴重な資料として意義づけることを目的とする。



図1 天草四郎陣中旗

2. 「陣中旗」について

本稿は、島原の乱に関する歴史学的な考究ではなく、また「陣中旗」をめぐる美術史的な考察でもない。本稿で展開しようとするのは、この旗が描き出す神学的な背景と、現代に生きるわれわれがこの旗をどのように受け止めるかをめぐる考察である。そのような考察に際して、この旗が軍旗であったということは、ほとんど意味を持たない。したがって「陣中旗」という呼び名自体が適切でないとも考えられるが、この旗の通称として人口に膾炙していることにかんがみ、旗の呼び名としては一貫して「陣中旗」を用いることにする。

それはさておき、まずはこの旗に関する一般的な解説が必要であろう。

この「陣中旗」は、現在でもなお、島原市にあるカトリック島原教会の聖堂内にそのレプリカが掲げられていて、聖体行列が行われる教会暦上の祝祭日には、その行列の先頭を導きもする。この旗の大きさは、一辺108センチメートルの正方形であり、その中央には葡萄酒に満ちた聖杯と、ラテン十字形を刻んだ聖体（ホスチア）が大きく描かれている。またその聖体と聖杯を、下方左右から一対・有翼の天使が仰ぎ見る姿勢で崇敬している。

この旗の上部にはポルトガル語で“Louvado seja O Santissimo sacramento!”、すなわち「いとも聖なる秘跡は讃美されんことを」と記されている。ここで「秘跡」と呼ばれているのは、教会における7つの秘跡のうち最大のものすなわち「聖体の秘跡」のことである。この旗は元来、長崎あるいは有馬（島原半島南島原市）に組織された「聖体の組」と呼ばれるものの徴であり、それがキリシタン禁教令（1614）に伴い、秘蔵されたのちに島原の乱（1637–1638）における一揆軍の軍旗として用いられることになったものである。

この陣中旗の図柄を描いたのは、伝承によれば山田右衛門作とされているが、定かではない。製作年代は、「聖体の組」が組織されたのが豊臣秀吉による「伴天連追放令」（1587）であるとすれば、1590年代ということになるであろうか。右衛門作は、当時セミナリウムに併設されていた聖画美術学校で画術を学んだとされる。この画術学校で画法を教授していた人物の名が明らかになっており、それはジョヴァンニ・ニコラオ・ダ・ノーラである。このニコラオとは、1560年にナポリ近郊のノーラに生まれ、長じてイエズス会に入会した修道士であり、彼は1583年来日している。彼は「ニコラオ派」と呼ばれるような画風を伝えたとされ、「陣中旗」も、このニコラオ派の代表的な作品の一つと考えられている。ちなみにニコラオは当時イタリアにおいて隆盛を極めていたマニエリスム派の影響を強く受けたとされる（五野井 2012 : 198 -211）。

右衛門作は島原の乱に参加して捕えられたものの、一揆軍の中ではただ一人許されて生きながらえた。この「陣中旗」は、上にも記したように一揆軍鎮圧の日に、原城内にいち早く突撃した鍋島氏が戦功の証として代々秘蔵していたものを、明治期になって政府が文化財に指定したものである。

3. キリシタンと日本の殉教者たち—教皇フランシスコの説教（2014）より

ところで、筆者がパーズマニ＝ペーテル大学で講演を依頼された背景には、2013年に着座した教皇フランシスコ（1936—）が、2014年1月15日（水曜日）の一般謁見において、洗礼の秘跡がどれほど重要であるかの例として、日本の潜伏キリシタン時代を挙げたということがある。教皇によるこの説教を通じて、全世界的に日本のキリシタンに対する関心が高まったのである。

以下にまず、この教皇フランシスコによる説教の概要を紹介することにしよう。「日本の教会は17世紀初頭、激しい迫害に遭っていました。多くの信徒が殉教しました。司祭たちは国外追放に遭いました。何千人もの信徒が殺害されました。司祭は日本に一人も残らなくなりました。皆追放されたのです。こうしてキリスト教の共同体は秘密裏に自らの信仰を実践することを余儀なくされました。地下教会となり、自らの信仰と祈りを保持したのです。子供が生まれると、父親ないし母親が洗礼を受けました。われわれはみな、洗礼を受けることができますからです。250年後、宣教師たちが日本に戻ってきたとき、キリスト教徒の数は数千人になり、教会は再び繁栄の時を迎えました」。

こうして教皇フランシスコは、信徒にとって、洗礼によってもたらされる恵みがいかに大きいものであるかをめぐり、250年にわたる司祭不在の時代を潜り抜け、信を守り抜いた江戸時代の隠れキリシタンを模範とするよう説いたのである。

そこで、日本のキリシタン史を、殉教者の歴史として少しく概観しておきたい。

4. キリスト教と日本人の出会い（1549）

まず、日本におけるキリスト教の歴史について、殉教者の紹介を中心に概説しておこう。カトリック教会の日本における布教は、周知のように、イエズス会士であるフランシスコ・ザビエル（1506—1552）によって1549年に始められた。布教とともに宣教師たちは日本という国について

の知識を広げた。当初、16世紀を通じてキリスト教は急速に国内に普及したが、それは当時の神道や仏教の信仰との競合を経て行われたものであった。宣教師たちによる布教とともに、西欧近代科学や芸術の実りが日本国内に広まった。もっともポルトガル人やスペイン人は、次第に布教とともに政治的な勢力の拡大を考えるようになった。またキリスト教は17世紀の初頭には、島原の乱（1637-1638）のように、封建主義と対決する一揆のイデオロギーともなった（Szentirmai 1999 : 99）。

5. 「伴天連追放令」以前（1549-1587）

ついでイエズス会士ヴァリニャーノ（1539-1606）が1579年に来日すると、1580年豊後府内にコレジオを建てるとともに、セミナリオを安土と有馬の二カ所に置いた。これらの教育施設は、後に迫害のため、ある土地から別の土地へと絶えず移動することを余儀なくされ、ついに1614年、長崎にあったものが閉鎖されてマカオおよびマニラへと移動した。このほかイエズス会は、ノヴィシアド（志願院）をも建設した。

当時の安土桃山時代（1573-1603）における文化史的な重要事項としては、能の上演が盛んにおこなわれたこと、茶あるいは生け花の流行、さらには禅仏教の隆盛などが挙げられよう。1573年に織田信長（1534-1582）が、内乱に明け暮れた国内の統一に着手し、1582年に信長が本能寺の変に斃れた後は、豊臣秀吉（1536-1598）が秩序の回復に努めた。これと同じ1582年、天正遣欧使節として4人の少年たちが日本を発ってローマに向かい、彼らは1585年、ローマ教皇グレゴリウス13世に謁見している。

1587年、当初キリスト教を保護していた秀吉は、突然「伴天連追放令」を發布して宣教師の国外追放を布告する。それにもかかわらずイエズス会士たちは国内に留まり、布教活動は更なる成果を挙げる。つまり追放令は当初、それほど厳格なものではなかった。もっともその10年後の1597年、秀吉はキリスト教徒26人を処刑し、彼らが最初の日本人殉教者となったのである（Nemeshegyi 2005）。

6. 「キリシタン禁教令」まで（1587-1614）

1590年に遣欧使節の4人が帰国した。そのうちの一人中浦ジュリアンは、その後イエズス会に入り、1608年に司祭に叙階されると、1633年に殉教することになる。彼は、2008年に列福された188人の殉教者たちの一人である（『ペトロ岐部と187殉教者』2008）。遣欧使節はグーテンベルク（1400-1468）によって1445年に発明された印刷機の一台中浦に持ち帰ったため、この印刷機はその後、キリシタン書の印刷に多大な成果を挙げることになる。

「伴天連追放令」以降、その後の十数年間にわたり、日本のキリスト教徒たちは、自らの活動を秘密裡に継続し始める。そのため、キリスト教共同体を導くイエズス会士たちは「コンフラリア」（ラテン語confraternitas）と呼ばれる信徒組織の拡充に努めた。これは、たとえ司祭不在の状況となっても、キリスト教共同体が存続しうようとの目的に沿った行動であった。

1584年にはアウグスチノ会士が、1593年にはフランシスコ会士が来日する。1600年には徳川

家康（1542－1616）が関ヶ原の戦いにおいて、豊臣家による支配に終止符を打った。1602年にはドミニコ会士が来日している。1603年、家康は徳川幕府を開き、秀吉の死（1598）によって混乱した国内の平和的統一を成し遂げる。これによって江戸時代が幕を開けた（1603－1867）。1614年に家康は「キリシタン禁教令」を發布し、1641年にはオランダ商館を平戸から長崎出島に移して鎖国を完成する。

7. 日本の聖人たちと福者たち

日本の殉教者たちの系譜は、1597年2月5日、長崎西坂において磔刑に処せられた26人の殉教者たちによって開始される。彼らは、教皇ピウス9世が1862年に列聖している（祝日は2月5日；「日本26聖人殉教者」）。一方1867年には、205人にのぼる日本の殉教者たちが列福されている（記念日は9月10日；「日本205福者殉教者」）。この列福は、キリスト教迫害期におけるすべての殉教者たちを記念する意味を持っている。

これらの列聖・列福式は、日本が鎖国体制を解かず、キリスト教徒迫害をやめないことに抗して、ヴァティカンがこれを融和させる目的で行ったものである。

1世紀余りを経て1981年、教皇ヨハネ・パウロ2世が訪日し、日本のキリスト教に対して覚醒を呼びかけた。この年ローマにおいて、聖トマス西（1634年殉教；ドミニコ会士）と15殉教者（1633年から1637年までの間の長崎における殉教者たち）の列福が行われた。その後1987年、彼らは列聖されている。彼らの祝日は9月28日である。

また2008年11月24日には、長崎において「ペトロ岐部と187殉教者」の列福式が行われた。彼らの記念日は7月1日である。彼らを年代で総括するならば、熊本八代において1603年12月に殉教した11人から、1639年7月に江戸で殉教したペトロ岐部かすい神父までの188人の殉教者たちということになる。この列福式の特徴を挙げるとすれば、一つには日本のカトリック教会がこの列福運動を主導したという点、もう一つには、今回列福された殉教者たちはすべて日本人であり、その大半は一般信徒であって、彼らの中には女性や子供たちも多く含まれているという点である。

8. 「キリシタン禁教令」以降（1614－1644）

1614年2月、徳川家康は「キリシタン禁教令」を發布した。当時日本に居住していた司祭の数は150人、信徒の数は約65万人であったと言われている。家康はあらゆる手段を用いてキリスト教徒たちを迫害し始めた。家康らは、外国との交易が発展し西欧人の姿が頻繁になったことが民衆に大きな影響を及ぼしていること、またキリスト教の力が多大であることに気づいていた。そしてそれらが、自分たちの影響力を制限しうることを危惧し始めたのである。こうして彼らは、宣教師たちを長崎に集合させ、その後彼らを追放した。それと同時に司祭養成の神学校等を閉鎖させた。キリスト教大名の一人、高山右近（1552－1615）もこの時マニラへと追放された。しかしながら実際のところイエズス会の首脳陣は、18名の司祭と9名の修道士を選出し、彼らを日本国内に留めることを決議した。一方右近は翌年の2月5日にマニラにて病没した。現在、

彼のための列福運動が進められている。キリスト教到来以降、何人かの戦国大名が、いわゆる「キリシタン大名」となったことが知られている。その中には右近のほか、大友宗麟（1530－1587）、大村純忠（1533－1587）、小西行長（1558－1600）などがある。しかしながら高山右近以外は、1614年のキリシタン禁教令以降、強いられる結果、信仰を捨てざるを得なくなった。

1625年、長崎島原において、非常に厳しいキリスト教迫害が開始された。その2年後、1627年2月にはパウロ内堀と15人の信徒が殉教し、同年5月には雲仙地獄において10人が殉教、またそれに先立ち同年2月には内堀の3人の息子たちが有明海に沈められた。彼ら29人の信徒たちは、2008年に列福された188人の殉教者たちに含まれている。1633年には長崎西坂において、前述の中浦ジュリアンが殉教している。

9. 島原の乱（1637－1638）

1637年の10月、「島原の乱」が勃発し、翌年の2月末に鎮圧されるまで継続する。これは天草半島から島原に拠点を移しつつ生じたキリシタン一揆であると捉えることができる。すでに17世紀の前半から、度重なる重税にあえぐ農民たち、および財を持たない下級武士たちが、神の前での平等を旗印に一揆を起こしていた。大規模な飢饉と重税がこの「島原の乱」の一因だったことは確かであるが、この乱の首謀者たちが、例外なくキリシタンであったことも確実である。この「島原の乱」における一揆軍の旗となったのが、本稿で取り上げる「陣中旗」であるが、この旗は上述のように、元来は「聖体信心会」のしるしを起源とするものであった。この旗から展開しうる神学については、本稿第Ⅱ部で取り上げることにする。

この乱の勃発と同じ1637年の11月には、アウグスチノ修道会の金鰐神父が長崎において殉教している。彼もまた、2008年に列福された一人である。

「島原の乱」以降、キリスト教徒に対する迫害は、その激烈さを一段と増し、江戸でも多数の殉教者が出た。1639年7月には江戸でペトロ岐部かすい神父が殉教した。彼も2008年に列福されている。この年、ポルトガル船の来航が禁止され、鎖国がほぼ完結する。1644年には、最後の潜伏司祭であるマンショ小西神父が殉教を遂げ、日本に司祭は皆無となった。

10. キリシタン潜伏の時代（1644－1865）

かくしてキリシタン共同体は、自らの信仰を秘密裡に保持することを余儀なくされ、地下組織化した。子供が生まれると、父親ないし母親が洗礼を受けた。キリスト教徒であれば誰であれ、他者に洗礼を授ける場合、その洗礼は有効である。

いわゆる「隠れキリシタン」は、次の各地にあったことが知られている。それは平戸、生月、外海、五島、天草、筑前、それに摂津である（チースリク1997）。この中で生月島には、現在でもなお「カトリック教会に一致しない隠れキリシタン」の人々が住んでいることが知られている。ただ、彼らの間には人類学・民俗学的に貴重な習俗が保持されており、その意味は大きい。

「潜伏キリシタン」に対する公的な迫害の方法としては、次の3点を挙げることができる。1）「絵踏み」。これは毎年、年の始まりにあたって行われたもので、キリストないし聖母などの聖画

を、検閲官の前で踏ませる儀式である。2) 寺請制度。これは、万人に対し、身分上いずれかの仏教寺院の門徒として登録することを義務づける制度である。3) 「五人組制度」。これはすなわち、キリスト教の勢力拡大を防止するため、相互に見張り役を務めるべく定められた制度である。

潜伏キリシタンたちはこうして、表向きは仏教徒を装い、絵踏みをも実行した。ただし彼らは帰宅すると、「こんちりさん（ラテン語contritio）のおらしょ」と呼ばれる痛悔の祈祷文を唱えるのが常であった。教会で定められている「赦し（告解）の秘跡」は、司祭でなければ与えることができない。ただ日本のキリシタン教会にあっては、当初より司祭の数が極端に限られていた。したがって当時の教会指導者であった宣教師たちは、「赦しの秘跡」において不可欠とされる「痛悔」の要因を強調し、日本のキリシタンにとっては「痛悔」の心情とその祈祷のみで足りる、と決議していた（正確に言えば「痛悔」の心情を抱くとともに、直近で次に告解しうる機会には、必ず司祭から「赦しの秘跡」を授かること、という条件が設けられている）（川村 2011：234-296）。このような決議と併せ、宣教師たちは上述した「こんふらりあ」（信心兄弟会）の組織づくりを進めていたのである。

また同様に隠れキリシタンたちは、葬儀を行う場合にも仏式に則ることを強いられていた。しかしそのような場合にあっては、彼らは仏式での葬儀が終わると、「こんちりさんのおらしょ」を唱えるとともに、改めてキリスト教式で葬儀をやり直したのである。こうして彼らは、自らの信仰を保持したのであった。

彼らはどのようにして信仰の教義を保持したのであろうか。基本的には『どちりいな・きりしたん』（ラテン語*Doctrina Christiana*）という、ポルトガル人イエズス会司祭マルコス・ジョルジェ（1524-1571）による基本教理書（リスボン、1566年初版）が用いられていたことが明らかとなっている。それと併せ、上述のように1587年の伴天連追放令以降、イエズス会士たちの指導により、「組」と呼ばれる信心会の組織づくりが積極的に行われていた。信心会としては「慈悲の組」「ロザリオの組」「聖体の組」などがあった。これらの「組」にはそれぞれ、役割を帯びた3人の主導者が定められていた。それは1)「帳方」、すなわち毎年初めに、教会暦に従って祝日・記念日をいつ行うべきかを定める役、2)「水方」、すなわち生まれてきた子供に洗礼を授ける役、そして3)「聞役」、すなわち洗礼が行われる際に水方を補助する役、であった。彼らが用いていたのは1634年版の「ばすちゃん暦」であったことが知られ、また水方には各村落で最も重きをなす人物が選ばれた。

われわれが「潜伏キリシタン」について考える際、忘れてはならないのは、彼らの間で信じられていたいわゆる「ばすちゃんの予言」なる大変興味深い予言である。その内実は、1)「7世代の後には、神父が船にのってローマからやって来る」、2)「その神父は独身である」、3)「その神父は聖母の像を携えてやって来る」というものであった。実際、キリシタン禁教令から251年後の1865年、驚くべき「信徒の発見」が起こったのである。

11. 「信徒発見」(1865)

1854年の12月8日、教皇ピウス9世は回勅「無謬なる神」(*Ineffabilis Deus*)を発布し、聖母の「無原罪の御宿り」の教義を定める。聖母は1858年の2月11日から7月16日にかけてルルドにおいて少女ベルナデットに現れた。このように聖母に対する信心が高まる中で、その信心に培われたパリ外国宣教会のジラル神父は、1859年に横浜に来航すると、1862年に同地に聖堂を建設した。彼はこうして霊的司牧を開始すると、1863年には同会に所属するプティジャン神父を長崎に派遣した。プティジャン神父は長崎で聖堂の建設に着手する。すると聖堂完成から一か月後、1865年の3月17日に、落成した大浦の聖堂へと何人かの婦人たちが子供たちを伴ってやって来た。彼女たちはプティジャン神父に対して「わたしたちの信仰はあなたの信仰と同じです」と打ち明けた。まだ絵踏み制度も解かれていない中で、彼女たちが危険を顧みずこのように告白したことは多大な称賛に値する。それから神父に向かって「聖母の像はどこ？」と尋ねると、続いて「あなたは独身ですか?」「現在の教皇様のお名前は?」と問うたと言われる。

ここから判ることは、潜伏キリシタンたちにとってカトリック教会であると判別する基準としては、聖母、司祭の独身性、ローマ教皇の3点が伝承されていたということであり、これらは上掲の「ばすちゃんの予言」と合致する(高見 2014)。これが著名な「信徒発見」の出来事であり、この出来事を記念し、2013年10月28日には「日本の信徒発見の聖母」の記念日が認可され、3月17日が祝日に指定された。潜伏キリシタンたちは、生月島の隠れキリシタンを別にして、ほとんどその全員が普遍教会の共同体に戻るようになったのである。

II. 「陣中旗」の神学

1. 「陣中旗」をめぐる一われわれが「陣中旗」の十字架から学びうること

さて、本稿で取り上げる「陣中旗」は上述のように、元来「聖体の組」の旗印であったこともあり、その図柄のモデルとして、ローマのサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会に設けられた聖体信心会のマークが用いられたということが指摘されている(川村 2003: 74)。ここにその図柄を示すことは控えるものの、確かに両者にはホスチアと聖杯、そして二人の天使が登場する。もっとも、二つの絵柄の間に存在する明白な相違点をも指摘することができよう。それはホスチアと聖杯の大きさ、ホスチアを崇敬する天使の姿勢、また「陣中旗」にあっては、ホスチア(と聖杯)が地上から浮かんでいるように見えること、などである。

さて、この「陣中旗」が描かれたのは、トリエント公会議(1545-1563)以降の期間である。したがってこの旗の構図・図柄等々には、ミサ(聖体祭儀)に関してトリエント公会議で公にされた神学が反映されている。それは「いけにえとしてのミサ」という神学である。ローマ典礼によるミサの意義づけと形態は、それ以降第1ヴァティカン公会議(1869-1870)を経ても変わることなく、第2ヴァティカン公会議(1962-1965)における根本的な典礼改革へと至る。したがって、今日のわれわれが知る第2ヴァティカン公会議でのミサ神学からアプローチすると、「陣中旗」に込められた神学の意味をいささか見誤ることになる。

第2 ヴァティカン公会議において、1962年に発布された文書「聖なる典礼について」（「典礼憲章」；原題は*Sacrosanctum Concilium*）の第2章「ミサの神秘」にあっては、典礼行為の意味づけが2つの軸を基に行われている。それは「いけにえ」（奉獻）と「過越の宴」である。したがってもとより「ミサの神秘」における捉え方は、当初より二面性をはらんでいることが指摘されていた（Pákozdi 2002 : 49）。そして実際には、第2 ヴァティカン公会議では、「過越の宴」すなわち「最後の晩餐」ないし「キリストと共なる食事」としてのミサの性格が、「いけにえ」としてのあり方よりも前面に置かれていると言える。なぜなら第2 ヴァティカン公会議における神学によれば、過越の食事に与かることこそ、最後の晩餐を記念する行為の頂点を意味するからである。この記念にあっては、信徒の側からの積極的な参与が前提とされている。「教会は、信徒が、部外者あるいは無言の傍観者としてこの信仰の神秘に列席するのではなく、儀式と祈りを通してこの神秘をよく理解し、意識的に、敬虔に、行動的に聖なる行為に参加し、神のこことばによって教えられ、主のからだの食卓で養われ、神に感謝し、ただ司祭の手を通してだけではなく、司祭とともに汚れのないいけにえを捧げて自分自身を捧げることを学び、キリストを仲介者として、日々神との一致と相互の一致の完成に向かい、ついには神がすべてにおいてすべてとなるよう細心の注意を払っている」（「典礼憲章」第48項）（第2 バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会 2013 : 73）。

かくして第2 ヴァティカン公会議は、ミサに関して「民がともに集い献げる」という性格づけを特記しているのである（同第49項）（Szakos-Várnagy 2000 : 38）。

では、この陣中旗から今日のわれわれは何を学び取ることができるのであろうか。

2. 十字架の中心性

ここで改めて、潜伏キリシタンの状況を思い起こしてみたい。上述したように、まず彼らにあっては、司祭不在という状況のもと、「赦しの秘跡」に先立つ「痛悔」の要因が特別な形で意識されていたと言える。その一方で彼らは、洗礼という行為と伝承を、250年間にわたり世代を超えて保持した。これは教皇フランシスコが強調した点である。

これらの点以外に、本稿においてわれわれが注目したいのは、「キリストによる救いの業は十字架上で完成される」という理解が、潜伏キリシタンが信仰を保持する上で、まったくき意味をもって機能したという点である。「陣中旗」の中央には、ホスチア（聖体）の上に大きな十字架が記されている。このような「十字架の中心性」こそ、トリエント公会議の中心をなす神学であった。なぜならトリエント公会議の神学によれば、われわれを贖うためのキリストの救いの業とは、十字架上でキリストが自らをいけにえとして献げたという行為によるものだからである。ミサが「過越の宴」であるという認識は、司祭不在の状況下にあって、ほとんど意味をなさないものとなることが十分に予想されよう。

1562年、トリエント公会議で発布された文書「至聖なるミサのいけにえに関する教義」には、次のような規定が見られる。「キリスト、すなわちわれわれの主にして神である方は、十字架という祭壇において、たった一度、死によって自らを父に献げた。それは、人間のために永遠の贖

いをもたらすためであった。しかしながら自らの死の後、司祭職が途絶えることのないように、最後の晩餐において、引き渡される夜、愛する伴侶である教会のために、目に見えるかたちでのいけにえを遣した。それはこのいけにえが、十字架上でたった一度行われる血によるいけにえを表すようにするため、またその記念が、世の終わりまで継続されるようにするため、そして救いの力が、罪びとたちの罪の赦しのために、日々それに与かる者に働くようにするためである」(DS 1740) (Jedin 2009 : 112)。

すなわちトリエント公会議の理解によれば、キリストが最後の晩餐の記念を遣したのは、「司祭職」が「途絶えることのないようにする」ためであったと言いうる。しかしながら、たとえ司祭職が途絶えようとも、キリストが十字架上で自らをいけにえとして献げたという行為は、事実として遣されたのである。

3. 十字架はこの世から隔絶しているのか？

次にわれわれが考えてみたいのは、この「陣中旗」に描かれた十字架を伴うホスチアは、明らかに地上から隔たっているという点である。このような構図が明らかにするのは、いけにえとして献げられたキリストの体もまた、この世から隔たっているということである。信徒にとっては、いけにえとしてのキリストの位置をめぐる理解は、世における自ら自身の状況をめぐる理解に負っている (エフ1、23；マ16、21)。十字架上に磔となったキリストの像は、この世に対し、わずかに十字架の木のみによってつながっており、いかなる土地も自らの所有とはなっていない。したがってこの世の富、あるいはこの世におけるいかなる可能性をも自ら完全に断念するとき、われわれもまた、「玉座に坐す者の傍らにある小羊」(黙示録5、6) すなわちキリストの状況に与えられるのかも知れない (秋山 2014)。かくして十字架の描かれたホスチアがこの地上から隔たっているということは、われわれもまた、自ら進んでこの世から離れ、この世のあらゆる価値から身を引き離すべきだとの理解を示しているとも捉えられよう。潜伏キリシタンにとって、このような心情は、いついかなるときにも、殉教を神からの恵みとして受け入れることのできるあり方を生み出したとも考えられよう。

「陣中旗」は、鎮圧軍の戦利品と化したため、キリシタンたちの手許には残らなかった。しかしながらキリシタンの心は、17世紀の初頭、すでにトリエント公会議の神学によって十二分に培われていた。それは、ミサに関するトリエント公会議の理解を反映した上述の『どおりいな・きりしたん』(第9章)に「ミサとは十字架のいけにえである」として表されている。かくして十字架上のいけにえは、彼らにとって「この世には属していない」(ヨハ18、36) ものであったと言えるだろう。

4. 十字架の持つ「栄光」の意味

したがって、トリエント公会議で公布された神学に基づくなら、われわれもまた、殉教をも恵みとしてより容易に受け入れることができるのかも知れない。しかしながら公会議の歴史は、われわれに次のことを教える。第2 ヴァティカン公会議は開催されることが必然であった。その理

由は何であろうか。

まず第1には、トリエント公会議の神学それ自体が、すでに信徒の心から隔絶していたということを考えるべきであろう。信徒の自発的なミサへの参加が要請された理由は、何よりもまずこの点に求められるからである。

そしておそらく第2の理由として、思うにトリエント公会議の理解のうちには、十字架の持つ贖いと救いの意味（マテ1、7）しか見出されておらず、十字架が秘める栄光の意味（ヨハ13、31）が盛り込まれていないという点が挙げられよう。『ヨハネ福音書』にあっては、十字架はまず何よりもキリストの栄光を表すものである。なぜならば、十字架上で磔刑に処せられたキリストのわき腹からは、一兵士による槍の一突きによって血と水とが流れ出し（ヨハ19、34）、この「血と水」は、第4福音書にあって聖霊の流出のしるし、つまり復活の証となったからである（秋山2010；Akiyama 2011）。それゆえ十字架上のキリストの像には、イエスの受難・死・復活・昇天そして聖霊の降臨が同時に表されることになり（Akiyama 2013）、十字架を通じてあらゆる時間的な限界、ないしあらゆる地上の権力が克服されることになる。かくして、十字架こそ全能なる三位一体の徴だとすることも可能であろう。

5. 「真理はあなた方を自由にする」（ヨハ8、32）

十字架の持つこのような全能性は、逆に、十字架を見つめる者に対し、十字架を完全に自由な理解のもとに意味づけてよいというまったく自由を与えることになる。すなわち十字架は贖いと救いの徴であり、受難の徴でもあるが、間違いなく復活と勝利の徴でもある。『ヨハネ福音書』の一節には「真理はあなた方を自由にする」と記されているが（ヨハ8、32）、その意味はおそらく、いついかなる時であれ、われわれが真理を前にして立つとき、真理すなわち十字架は常にわれわれを受け入れる、ということであろう。十字架の持つこのような全能性、死にも打ち勝つ勝利については、ビザンティン典礼のイコノスタシスの頂点がよく表現している（Ivancsó 2001）。たとえば、ハンガリー・マリアポーチのバジリカ聖堂の頂上部では、キリストの墓の上に十字架が立っている（秋山2010；図1参照）。すなわち十字架は、われわれの贖いのためのキリストの死を意味するばかりでなく、すでにキリストの復活と勝利をも表しているのである（ヨハ16、33）。このようなビザンティン典礼における十字架の意味に関しては、第2ヴァチカン公会議後に編纂された新しい『カテキズム』（要理書）にも注記されている（日本カトリック司教協議会教理委員会 2002：1182項）。

われわれは、日本のキリシタン時代の信徒たちが、以上のようなことを観想していたかどうか、知る由もない。ただ第2ヴァチカン公会議後の時代に生きるわれわれとしては、16世紀末の産物でありトリエント公会議の神学を反映した「陣中旗」に対しても、以上のような十字架の多面性、その全能性を併せて思い起こすべきであろう。われわれによるこのような観想においてこそ、日本の隠れキリシタンたちも、キリストの十字架の全能性のうちに必ずや蘇ることであろう。

6. ニュッサのグレゴリオスの旧約聖書理解—ローマにて

以上が、ブダペシュトで講演した内容ほぼ全体の再録である。しかしながら本稿の冒頭にも記したように、ブダペシュトでのこの講演の前、筆者はローマでのグレゴリオス学会を済ませていた。そこでの筆者の発表は、十字架を基点とした『雅歌』の解釈を内容とするものであったが、このローマ学会での体験は、筆者にとって、本紀要原稿の完成のために寄与することとなった。以下、2014年9月20日にローマで筆者が行った発表の主旨をまとめることにしよう。

『雅歌』1、3において、ギリシア語七十人訳聖書の訳文は「あなたの名は注がれた香油」“μύρον ἐκκενώθεν ὀνόμα σου”となっているが、ヘブライ語による原文は“šemen tûraq šmekā”であり、この原文の解釈は困難を極める。tûraqは2人称男性もしくは3人称女性の動詞活用形である一方、šemen（香油）はふつう男性名詞であるため、tûraqを3人称女性の動詞活用形と理解することは難しい。したがって原文の変改の可能性を問い、tûraqを分詞形のmûraqとし、「あなたの名は注がれた香油」と解するのが慣例である。ただヘブライ語原文に忠実に読むなら、šmekā（あなたの名）と「あなた」を同格に置き「あなたは、あなたの名のかたちで、香油のように滴る」と理解する可能性がありえよう。われわれは、ニュッサのグレゴリオスの神学に基づきながら、原文のテキストをより良く理解することを望みうるだろう。

一方『雅歌』1、4に関しても、ヘブライ語テキストの原文は「わたしをあなたの後に引き寄せて下さい」となっているのに対し、ギリシア語七十人訳テキストは「彼女たちはあなたを引き寄せた」となっていて、相違が見出される。さてグレゴリオスは、全15講話より成る『雅歌講話』の後半部において、しばしば「引き寄せる」という意味の語彙を用いている。それは、『雅歌』に登場する花嫁が、神の恵みによってどれほどの霊的高みに引き上げられているかを表現するためである。この点において、グレゴリオスが『ヨハネ福音書』の神学に依拠しつつ、十字架の持つ栄光の意味を深く理解していたことが想起される（Maspero 2013: 218）。『ヨハネ福音書』における終末論的次元は、同福音書においてイエスの語る言葉「わたしは、地上から引き上げられるとき、すべての人々をわたしの許へ引き寄せよう」（ヨハ12、32）によく表現されている。本稿でも先に触れたように、十字架上で磔刑に処せられたイエス像（ヨハ19、34）は、地上におけるあらゆる時間的制約を超越し、永遠性すなわち全能なる三位一体の内実を表している。こうしてグレゴリオスに導かれつつ『雅歌』を読むとき、われわれは、このような神と人との出会いの場所が、十字架上で磔刑に処せられた「キリスト」という「あなた」の名のうちに（雅歌1、3）、すでに明らかにされているのを見出すのである。

7. 「陣中旗」の解釈と『雅歌』の解釈の同次性

以上が、ローマでのグレゴリオス学会における筆者の発表の要旨である。その詳細は、いずれ何らかの形で公にする欧語論文に譲るが、ここで敢えて「陣中旗」の神学をめぐる論者と、ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』を通じての『雅歌』の解釈研究とを比較勘案してみたい。すると、「陣中旗」そのものと『雅歌』のヘブライ語テキストとが等しい位置に置かれ、その注釈者としてトリエント公会議とニュッサのグレゴリオスが位置づけられ、さらにそれらをわれわれ自身の

問題として意義づけるために、『ヨハネ福音書』に基づく「栄光の十字架」の神学が置かれる、ということになるだろう。そう考えるならば、筆者によるこれら二つの発表は、『ヨハネ福音書』に示される栄光の十字架のうちに焦点を結ぶ。

そこで、ちょうど筆者がニュッサのグレゴリオスを通じての『雅歌』の解釈研究を、『雅歌』そのものの予型論的読みへと収斂させ、旧約聖書の一書である『雅歌』のうちに、すでに神と人との終末論的な一致の場所が記されている、と結論づけたのと同じ次元に、「陣中旗」をめぐる研究を収斂させることをも試みたい。すると、重要文化財に指定されている「陣中旗」のうちに、実は文化財指定云々の経緯の中では意識されていなかった事柄、すなわち公会議史や教義史といった神学的内容が盛り込まれている、という事実を指摘することが課せられるだろう。

8. 結. 「陣中旗」が日本の重要文化財であることの意味

ここで改めて「陣中旗」がわれわれに投げかける意味について問うてみたい。おそらく一般の日本国民にとって、教会での聖体祭儀・聖餐の次第がどのようなものなのか、それがどんな意味を持つものであるのかといった事柄に触れる機会は、まずありえないだろう。それはまさしく「秘儀」であり「秘跡」なのであって、まず秘されるべきものではある。

しかしながら、国のレベルでは純歴史資料として価値づけられた「陣中旗」に関しても、それを見る者の目には、大きく描かれたホスチアと聖杯が映ることは確かである。そこに潜在するものの意義、その意味と沿革を問うてゆくならば、カトリック教会における聖体の意味づけをめぐる教義史の変遷に通じ、キリシタンたちの伝承にさらに深く分け入ることができるだろう。十字架に殉じた者たちの精神的地平は、「陣中旗」のうちに沈黙の形で示されている。したがって、この「陣中旗」が重要文化財に指定されたことは、そこに描かれた十字架が、すでにキリシタンの枠を超えて国民に秘儀のあり方を証しし、その理解へと招く物証として位置づけられたことを表していると言えよう。旧約聖書の解釈の場合と同様、すでに「存在し」「在る」(出エジプト3、14)もののうちに、真理が十全に明らかにされている。「陣中旗」は、まず「島原の乱」の生き証人として位置づけられてはいても、その事実それ自体が、描き出された十字架の奥に潜む「真理」にまで、われわれの目を届かせるべく招いているのである。

参考文献

- 秋山学 2010『ハンガリーのギリシア・カトリック教会－伝承と展望－』創文社。
 ——— 2014「言葉による「証し」－『ヨハネ黙示録』の射程－」『地域研究』35号, 37-58頁。
 川村信三 2003『キリシタン信徒組織の誕生と変容』教文館。
 ——— 2011『戦国時代宗教社会史』知泉書館。
 五野井隆史 2012『キリシタンの文化』吉川弘文館。
 高見三明 2014「『日本の信徒発見の聖母』を祝うことについて」『カトリック新聞』3月16日号(4234),

3月23号(4235)。

第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監訳 2013『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』カトリック中央協議会。

チースリク, フーベルト 1997「徳川幕府時代のキリスト教徒迫害」『キリスト教史 6 バロック時代のキリスト教』第6章, 平凡社。

日本カトリック司教協議会教理委員会 2002『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会。
『ペトロ岐部と187殉教者』2008 ドンボスコ。

Akiyama, Manabu 2011 „A »közösségért saját életet adó Jézus lelke« János Evangéliumában: a bizánci rítusú egyházban való biblikus és liturgikus teológia tükrében”, „Testben élünk”: XXII. *Nemzetközi Biblikus Konferencia*, 2010. szeptember 9-11. (Benyik György szerk.), Szeged, JATE Press, pp.161-169.

——— 2013 „Istennek a világ iránti szeretete János Evangéliumában: a bizánci teológia tükrében”, „Jézustól Krisztusig”: XXIV. *Nemzetközi Biblikus Konferencia*, 2012. augusztus 21-23. (Benyik György szerk.), Szeged, JATE Press, pp.29-40.

Ivancsó, István 2001, „Ikonsztázion”, *Görög Katolikus Liturgikus Kislexikon*. Nyíregyháza, Szent Atanáz Görög Katolikus Hittudományi Főiskola.

Jedin, Hubert 2009 *A zsinatok története, Viz, László* (ford.). Budapest, Ecclesia.

Maspero, Giulio 2013 *Essere e relazione: l'ontologia trinitaria di Gregorio di Nissa*. Roma, Città Nuova.

Nemeshegyi, Péter 2005 „Japán vértanúk”, *Magyar Katolikus Lexikon*. Budapest.

Pákozdi, István 2002 “Sacrosanctum Concilium: Konstitúció a Szent Liturgiáról (1963)”, Kránitz, Mihály (szerk.), A II. *Vatikáni Zsinat dokumentumai negyven év távlatából 1962-2002*. Budapest, Szent István Társulat.

Szakos, Gyula-Várnagy, Antal 2000 „Bevezetés: Sacrosanctum Concilium - Konstitúció a szent liturgiáról”, A II. *Vatikáni Zsinat dokumentumai*. Budapest, Szent István Társulat.

Szentirmai, József 1999 *Japán*, 2. átdolgozott kiadás. Budapest, Panoráma könyvkiadó.

Lost in Translation? :

On Using Conversation Analysis to Examine Cross-Linguistic Data

Cade BUSHNELL

Abstract

An increasing number of conversation analytic studies since the mid nineteen-nineties examine interactions involving what may be termed “cross-linguistic data,” or data featuring interactions between first and second language speakers of a common language(s), or between second language speakers of a lingua franca. To complicate matters, the language(s) of the interaction may or may not be native to the researcher. In this essay, I discuss some of the issues surrounding the use of conversation analysis to examine both foreign language data (i.e., data where the researcher is not a first language speaker of the language(s) used in the interaction), and second language data (i.e. data where one or more of the participants is not a first language speaker of the language(s) of the interaction). In particular, I consider issues specific to cross-linguistic data that are potentially problematic for conversation analysis. In discussing these issues, I give consideration to both potential problems and corresponding counter arguments, and proposed solutions. Then, I expand upon some of the counter arguments and solutions mentioned in a discussion of the (new) analytic requirements for approaching cross-linguistic data. I also comment on possible analytic gains offered in and through examining cross-linguistic data.

Keywords: Conversation analysis; Cross-linguistic data; Second language users; Analytic requirements; Ethnography

I . Introduction

Since the mid nineteen-nineties, an increasing amount of conversation analytic research is being focused to *cross-linguistic* data (CL below), or interactional data featuring foreign language(s) (i.e., data where the language of the interaction is not native to the researcher), and second language data (i.e. data where one or more of the participants is not a first language speaker of the language(s) of the interaction).¹ Below, I examine some of the issues involved in bringing conversation analysis to bear on such data. First, I consider potential problems for conversation analysis in examining CL. In so doing, I give consideration

1 For the purposes of this essay, I use the term cross-linguistic to encompass both of these situations. I will indicate points when the scope of my discussion narrows to only one or the other (i.e., foreign language or second language) in particular.

to both potential problems, and corresponding counter arguments and proposed solutions. Then, I expand upon some of these counter arguments and solutions in a discussion of the (new) analytic requirements for approaching CL. I also comment on possible analytic gains afforded by the nature of the data examined.

II . CA and cross-linguistic data: Potential problems

A general analytic goal of conversation analysis (CA) is to uncover the generic resources by which participants engage in social actions in and through their talk, and create and maintain intersubjectivity concerning both what they are doing and what they mean. CA was conceived in the 1960s by Harvey Sacks and subsequently developed by him and his colleagues. These foundational studies typically examined English talk-in-interaction by predominantly adult² members of what might be very broadly (and over simplistically) referred to as “middle-class North American” society.

CA is underpinned by an ethnomethodological view of social order as an ongoing members’ accomplishment (Garfinkel 1967). It is important to note, however, that the concept of “member” in ethnomethodology is a technical and highly specific one. It refers not to a person, but rather to a “mastery of natural language” (Garfinkel and Sacks 1970:342). Thus, as both Firth (1996) and Wagner (1996) note, CA has been developed upon an assumption of the participants in talk (and the analyst) having an equal and extensive knowledge of a common linguistic code, comparable levels of interactional competence, and a common cultural frame of reference. These assumptions raise at least three³ distinct but related issues in terms of analytical resources for CA researchers seeking to examine CL. First, second language (L2 below) interaction, by definition, is likely to involve participants whose linguistic and interactional abilities and common cultural frames of reference are not equal, and possibly not extensive. This fact may result in interactional peculiarities that could be difficult for CA to grapple with because the participants themselves either do not or cannot orient to them, or because the orientations of the participants remain ambiguous. Second, in the case of foreign language (FL below) data, the availability various kinds of members’ knowledge to the researcher becomes problematic. Third, issues surface concerning the appropriateness of applying the assumptions and findings from CA research conducted on English interactions to CL. I consider each of these issues in turn below.

1 . Ambiguities in participant orientations

Firth (1996) argues that since participants in L2 talk-in-interaction are not likely to have linguistic and interactional competencies that are “fully developed, shared, and stable” (1996:252), the potential for linguistic problems, mutual misunderstanding, and ambiguity is omni-present. It may thus be difficult,

2 Notably, however, Sacks also examined data from English-speaking children (e.g., Sacks 1995:256-7).

3 A fourth issue that I do not discuss at length below centers around potential difficulties in producing transcripts that will allow the reading audience to access the data adequately to follow the researcher’s analysis and argument, and to conduct independent analyses of their own (see, e.g., Jefferson 1996; Moerman 1988; 1990; ten Have 2007).

Firth argues, for CA to handle with such data. Firth suggests two possible complications. First, he observes that L2 interactions may be characterized by such tactics as *let it pass*, and *make it normal*. According to Firth, *let it pass* is a passive tactic employed by the hearer when “faced with problems in understanding the speaker’s utterance” (1996:243), wherein the problem utterance is not oriented to in hopes that it will be made clear in the subsequent interactional sequences. *Make it normal*, on the other hand, is an active tactic whereby an interactant actively works to “divert attention away from the linguistically infelicitous form of the other’s talk” (1996:245).⁴ Second, Firth argues that the “interactional significance” (1996:245) of actions such as restarts, gaps, filled pauses, and so forth, may be difficult to establish analytically because it may not be easy to tell whether or not the recipient of such actions is orienting to them as being related to issues of linguistic proficiency, or in the same manner in which such actions might be oriented to in L1 interaction. As an illustration of the second complication, Firth presents two analyses of a single data extract taken from an over-the-phone business interaction between two users of English as a lingua franca. The business-at-hand in the interaction is that of buying and selling cheese, and the extract begins with H (the seller) inquiring as to whether the estimate G (the buyer) had received was for fixed or variable weight cheese. Firth first performs a conventional conversation analysis on this data, and follows this with an analysis taking into account the possible limitations in English proficiency of the L2 participants. Firth’s data is reproduced as Extract 1 below.⁵

Extract 1 (reproduced from Firth, 1996: 250)

```

1  H → yes .hh eh uh the quotation you have received, is that with fixed weight
2      (0.4)
3      because uh: we can get it with ah: (.) eh: ↓uh:: different weights
4      on (.) each unit=but an average around four hundred
5      'n' fifty=but (.) they can be from four hundred to five
6      ↓hundred gram:m. ↓
7      (0.7)
8      but we have decided to=
9  G → =NO ↓no. one uh ↑fix uh: this
10     four 'undred fifty ↓gram [m.
11  H → [it's a fixed uh
12     (0.5)
13  G → f [ixed]
14  H   [ (*)
15  G   yes
16  H   yes °ah uh°
17  G → four hundred fifty gram fixed

```

Extract 1 shows two L2 speakers of English, G and H, engaging in business negotiations over the phone. In the first analysis (i.e., the conventional one), Firth notes that H’s line 3 action of accounting for his line 1 question seems to be occasioned by the fact that the second-pair part to H’s question is not forthcoming

4 It should be noted that Firth also claims that participants may often not employ these two tactics in order to attend to contingencies that “must be dealt with immediately” (1996:250).

5 See the appendix for transcription conventions.

(noting in particular the .4 second pause in line 2). Firth cites Heritage (1988) in offering an explanation of this action, arguing that such accounts may indicate the delicate nature of an action being performed by the talk (in this case, an inquiry about the weight of cheese).⁶ Firth emphasizes that H's account explains that his (H's) company is capable of supplying various-weight cheese, which, according to Firth, is more desirable than fixed-weight cheese. Following this accounting, when G again passes on taking the floor at line 7, H continues by producing "but we have decided to=." At this point, G starts up with "NO↓no. one uh ↑fix," which, according to Firth's first analysis, seems to be doing the work of correcting H's displayed assumption that the price quote in question is based on various-weight cheese. Then, as Firth also notes, H and G go on to mutually confirm that the quote is actually based on fixed-weight cheese.

In his second analysis, however, Firth analyzes H's actions in line 3 as orienting to "the possibility that G has not adequately understood the question" (1996:251), as a result of problems related to language proficiency. Firth notes that H's stressed "different weights" appears to be working to create a contrast between the other possible option (i.e. "fixed weight", cf. line 1), and cites this as a warrant for such an analysis. He also suggests that H's continuation in line 8 may be seen to treat G as being still unable to understand. Firth further notes that H's line 8 marks a topic change, and proposes that G's line 9 interjection may be understood as G's efforts to prevent topic change before he is able to deploy his utterance in the relevant context of H's line 6. Finally Firth notes that G's self correction from *fix* (line 9) to *fixed* (line 13) seems to support the notion that G may indeed have been unfamiliar with this word, and was thus experiencing difficulties with understanding.

Firth concludes his analytic illustration by arguing that it shows that CA's typical analytic approach of using the "next-turn proof procedure" (see Sacks, Schegloff and Jefferson 1974) in order to develop a participant-relevant understanding of the interaction may be of ambiguous usefulness in the case of L2 interactions. He argues that this is because the participants' linguistic and interactional competencies are not necessarily equal or stable, and that as a result they may employ tactics such as *let it pass* or *make it normal*, or display ambiguous orientations to peculiarities in their interaction. Firth stresses that this fact may make it difficult for CA to clarify the interactional implications of the participants' actions.

My analysis of Extract 1 is commensurate with Firth's on many points. I agree, for example, that H's line 3 is occasioned by the lack of a second-pair part from G, and that H's "different weights" works to create a contrast between the line 1 "fixed weight." I analyze H's line 3 as being a repair of his line 1 in light of a displayed problem with understanding (in this case possible *non*-understanding) by his interlocutor in line 2. Thus, as Firth notes in his second analysis, H's actions in line 3 *do* appear to orient to

6 It must be noted, however, that H's account beginning in line 3 of Extract 1 is quite different from the accounts examined by Heritage (1988). While H produces his account in reference to the absence of a response from G, the accounts that Heritage (1988:133) is concerned with involve "a range of instances in which a second speaker's failure to accomplish a projected, or looked for, action is accompanied by an explanation or account of some kind."

G's actions (or lack thereof) as displaying a problem with understanding.⁷ However, I do not find Firth's analyses to be entirely unproblematic. In particular, Firth's second analysis seems to attempt to invoke the psychological states of the participants (i.e., their intentions) as an analytic resource. As Heritage (1990) argues, however, the intentionality of participant actions is beyond the analytical scope of the CA program. Thus, assigning intention (whether such intentions be related to an assessment of G's language proficiency, or to a wish to sell a more desirable kind of cheese) to H's actions in lines 1 through 8 is problematic from a CA perspective. On the other hand, the issue of language proficiency *is* a warrantably-oriented-to concern of at least one of the participants: G. In line 9, as Firth also notes, G produces "fix," and does so notably in an environment which also indicates some interactional trouble (note the speech perturbations and filled pauses before and after "fix"). In line 11, H produces "it's a fixed uh," from which G then uptakes the item "fixed" into his own utterance in line 13 (note also the identical stress pattern). By this action, G treats H's line 11 as performing an "embedded correction" (Jefferson, 1983) of his line 9 "fix." In so doing, G notably orients to his own linguistic ability (regarding this specific item) as being at fault. My analysis thus does not find the same kinds of ambiguities suggested by Firth (1996). Such ambiguities, it would seem, stem from an attempt to get at the intentionality of participant actions.

2. Members' knowledge

A key concept in CA is the importance of basing analyses on the actual hearable/visible phenomena in the data (Schegloff 1991; 1997c). However, a number of researchers (e.g., Schegloff in Wong and Olsher 2000, and especially ethnomethodologists such as Francis and Hester 2004; Hester and Francis 2000; Watson 1997) also maintain that the analyst's understanding of the actions in which the participants engage in their interactions is necessarily informed by members' knowledge. According to Francis and Hester (2004:26), a basic and fundamental starting point for ethnomethodological inquiry is "common sense appearances of the social world." I would argue that, in order for a researcher to draw upon such "common sense appearances," he or she must meet the ethnomethodological requirement of "unique adequacy" (Garfinkel and Weider 1992), that is, he or she must have obtained a level of competence in the social practice being examined.

The requirement for unique adequacy poses a special problem for conversation analysts examining FL interaction. Such problems are at least two fold. First, CA requires an exceedingly high level of detail and precision in its data transcripts. However, as Bilmes (1996) and Moerman (1996) note, problems with correctly hearing and transcribing naturally occurring FL interactional data may be extensive and pervasive even for those with highly advanced proficiency in the language of the interaction.⁸ In dealing with this

7 As discussed in Schegloff, Jefferson and Sacks (1977), the mechanism of repair is systematically implemented by the participants to deal with problems in speaking, hearing, or understanding in their talk-in-interaction. In the case of line 3, by not providing a restating or paraphrasing of line 1, H's self repair is notably not treating G's lack of response as displaying a problem with hearing.

8 Indeed, these tasks often pose formidable difficulties even for L1 speakers.

problem, Moerman (1996) admits that he initially considered delegating transcription to an L1 speaker of the language(s) of his data. However, unlike some other kinds of discourse analysis, CA views the process of transcription as a vital part of the analysis itself, and therefore requires that the analyst transcribe his or her own data (Moerman 1990; see also ten Have 2007). Instead, Moerman recommends “working with a native colleague or consultant” (1996:150) during the process of transcription and analysis in order to ensure accuracy.

A second problem, beyond the relatively simple matter of being able to hear and transcribe the sounds of the language of the interaction, is that a researcher must be able to draw upon the kinds of cultural knowledge and resources that members use to comprehend and create implicatures, create, negotiate, and maintain intersubjectivity, and assemble social actions. Without meeting this requirement, the analyst will be blinded to the “common sense appearances” mentioned by Francis and Hester (2004:26). Some researchers (e.g., Bilmes 1996; Moerman 1988; 1990; 1996) have therefore argued for the necessity of the inclusion of ethnographic information to provide both the analyst and the reading audience with the members’ knowledge required to see and hear the interactions from the eyes and ears of the participants. Working with Northern Thai data, Bilmes (1996), for example, demonstrates in detail how the absence of members’ knowledge (available, in Bilmes’ case, through ethnographic research) concerning the Thai legal system and the customs and laws involved in dividing rice among sharecroppers and landlords would significantly alter the analysis of a particular interaction. He also notes that such problems may be very delicate because an ethnographically uninformed analysis may appear on its surface to adequately describe and account for the interactional practices visible in the data. However, Bilmes emphasizes, such an analysis would not permit an accurate or adequate understanding of the interaction from the viewpoint of its participants — a violation of a crucial construct of validity for CA research. I discuss the place of ethnography in CA in more detail in Section 3.

III. Applicability of findings from English data

In addition to problems concerning members’ knowledge and unique adequacy, there is also the related issue of whether or not CA findings and assumptions based on English data are wholly or partially applicable to FL interactions. A number of researchers have suggested that certain aspects of FL interaction may possibly differ from English interaction in various ways (e.g., Moerman 1988; 1990; Schegloff 2000a; Tanaka 1999; Wong 2000). As noted above, conversation analysts looking at English data have developed a considerable body of findings concerning various resources, devices, structures, and mechanisms⁹ in talk-in-interaction. However, the applicability of such findings to FL data is not entirely

⁹ E.g., turn-taking (Sacks, Schegloff and Jefferson 1974; Schegloff 2000b); repair (Schegloff, Jefferson and Sacks 1977; Schegloff 1979; 1992; 1997a; 1997b; 2000a); preference organization (Bilmes 1988; 1993; 1995; Pomerantz 1984; Sacks 1987; Schegloff 2007); “standard silences” (Jefferson 1989); discursive devices (Heritage 1984; 2002; Raymond 2004); etc.

clear. Research investigating this question is still underway, but preliminary findings suggest that, at least for the basic mechanisms of turn-taking and repair, for example, even languages as typologically removed from English as Thai (Bilmes 1996; Moerman 1988; 1990) and Japanese (Furo 2001; Tanaka 1999) are highly analogous to English. These studies thus suggest that the body of CA findings for English in these domains (i.e. turn-taking and repair) may be available as an analytic resource for researchers examining Thai and Japanese. It would be premature, however, to assume that the entire body of findings for English could be unproblematically applied to these or other languages. For instance, in Japanese discourse, it is very common for participants to deploy the utterance initial token α^{10} (often produced after a glottal stop). In some contexts, this token appears to function in manners very similar to the English token *oh*, as described by Heritage (1984; 2002). In the extract below, A and B, two bioscientists at a large national university in Japan, are discussing the mating behaviors of various species of ticks.

Extract 2

1. A: IXodes mo (.) ko- koo iu kanji da kara. (.2)
ixodes also this this say feeling C so
Ixodes also (.) are like th- this, so. (.2)
2. B:→ ^a soo na n desu k[a?
a that C N C Q
Oh is that right?
3. A: [soo (xxx) e.
that yeah
That (xxx) yeah.
4. ano [me- eh kyuuketu(n) mae kyuu]ketu(n) ato demo [(.) ano (.5)
um ma- uh feed M before feed M after even um
Um ma- uh even before (or) after (they) feed (.) um (.5)
5. B:→ [hoo : : : : : : : : : :] [m.
wow yeah
Wo:.....w Yeah.
6. A: = me:tingu dekuru [wake desu ne;
mating can reason C I
(they) can mate, you know?

In line 1, A makes a statement about the characteristics of *Ixodes*, a species of tick. In response, B produces “^a soo na n desu ka?” (*Oh* is that right?) in line 2. This deployment of the token *a*, along with the confirmation check/repair initiator *soo na n desu ka* is highly analogous to one common use of the token *oh* in English: both tokens accomplish a display of a “change of state” (Heritage 1984; see also Mori 2006 on the Japanese *hee* and *hoo*, which also appear to display change of state in certain contexts). In line 3, A appears to offer a confirmation in reply to B’s first-pair part, *soo desu ka*, and then self selects to begin a turn which makes the referent of “koo” (this; line 1) explicit by producing an explanation of the mating

10 I have been unable to find any substantial treatment of this topic in the CA research looking at Japanese data in both the English and Japanese literature. My tentative analysis here may therefore be a first. Unfortunately, however, I do not currently have the data to support a more systematic inquiry into this issue.

behavior of the *Ixodes* species in lines 4 and 6. In line 5, B further displays an orientation to this information as newsworthy by producing the news receipt token *hoo* (Mori 2006), greatly emphasized by elongation. This action offers further support to an analysis of B's line 2 "*a*" as displaying a change of state.

Heritage (2002) examines another function of the token *oh* in English: to display a disagreement to a disagreement. The Japanese token *a* also appears to occasionally function in a similar capacity, as in Extract 3.

Extract 3

1. A: demo zu::tto un-deiru kara nan janai?
but all-along birth-ing so N NG
 But isn't (it) because (they are) laying (eggs) a::ll alo:ng?
2. B:→ .hhh ^a, demo zu::tto un-de↓-te: (1.4)
oh but all-along birth-ing-L
 .hhh oh, but (they are) laying (eggs) a::ll alo:ng ↓ a:nd (1.4)
3. aru jiki ni naru to, me:tingu suru janai ° desu ka. °
certain time G become if mating do NG C Q
 when (it) becomes a certain time, (they) mate don't (they).

Here, A and B (the same interactants in Extract 2) are discussing the reproductive practices of bees. In the prior turns, B has suggested that bees might be a special case among insects in that there appear to be relatively few timing restrictions on their mating behaviors. In line 1, A produces a *demo* (however)-prefaced disagreement with B's suggestion, maintaining that this is simply a function of the queen bee's perennial egg laying. B's response in line 2 is marked as opposition relevant by a turn initial *a* + *demo*. As Heritage notes, *oh*-prefaced disagreements are often used as a "holding a position" device, and that they "overwhelmingly manifest themselves as disagreements to disagreements" (2002:217). It would appear that B's use of *a* in Extract 3 functions in a way similar to Heritage's (2002) *oh*.

However, there also appear to be additional ways in which *a* is used in Japanese that does not resemble the use of *oh* in English. I will consider two instances below. In both of the extracts below, C and D are chatting over a dinner that D has prepared. Just prior to Extract 4, C and D had been discussing how it had been difficult for them to get together even though business had recently brought C near D's town several times. D apologizes for not being able to meet during those times, and in line 1, C produces "*isogaii mon ne::*" (it's that you are busy, huh.). Just prior to Extract 5, on the other hand, C and D had been talking about D's typical cooking routine.

In line 4 of Extract 4, C prefaces his utterance with *a* + *demo*. However, in contrast to the identical token deployed by B in Extract 3, C's utterance does not display opposition or disagreement with the previous utterance (which is notably not displaying disagreement either; cf. Heritage 2002). Instead, C's "*a*" seems to function as a kind of new topic opener (note the long gap directly preceding C's turn) — marking a shift to a topic which is obliquely related to talk from several sequences ago. Thus, in Extract 4,

Extract 4

1. C: isogasii mon [ne::.
 busy N I
 (You're) busy, huh::.
2. D: [uhheh heh heh
 uhheh heh heh
 uhheh heh heh
3. ? : ((long gap filled with eating sounds))
4. C:→ ^a demo, ima: ano: (sniffs) M-san n uti wa:
 a but now um M-title M house T
5. doko da kke.
 where C Q
 A but, u:h (sniffs) where is it that Mrs. M's house is no:w?

Extract 5

1. D: kekkoo tukutteru [yo,
 quite making I
 (I actually) often cook,
2. C: [a kore n- nan niti ka bun no:.,
 a this n- what day Q portion M
3. yatu?
 thing
 A (is) this s- several days worth?
4. D: u:h ↓u:h (.) kore: (.4)
 uh uh this
 No (.) this:=
5. C: iti niti?
 one day
 =One day?
6. D:→ ^a kore, u:h ↓u:h (j)itu wa kinoo tukutta.
 a this uh uh when oh yesterday made
 A this, no when= oh (I) made (it) yesterday.

α seems to be devoid of any implications of disagreement or change of state, and therefore not analogous to the uses of *oh* in English described by Heritage (1984; 2002).

In line 6 of Extract 5, D deploys α before the indexical expression *kore* ("this"). *Kore* here refers to the food that D had made. It seems unlikely that D would display a change of state regarding "kore" when it has already been topicalized by C in line 2, and when D himself has already deployed the term in line 4. The fact that C's line 5 seems to be a question in regard to the length of time the food Dan has prepared should last may suggest that Dan's α in line 6 could be analogous to English *oh*-prefaced responses to inquiry, described by Heritage (1998). According to Heritage (1998:296), however, such *oh*-prefaced responses "[i]ndicate that the inquiry being responded to is problematic as to its relevance, presuppositions, or context," and that they may "foreshadow reluctance to advance the conversational topic invoked by the inquiry." A closer examination of line 6 reveals that it does not fit well with the characteristics described by Heritage (1998) because, not only is it not interpretable as indicating that C's inquiry is problematic in some respect, it is not doing responding to C's question in the first place; note that the response to C's *yes/*

no question comes later in D's line 6 utterance as "u:h ↓u:h."

Sacks (1987:57-58) notes that participants work to maintain a "contiguity" across successive turns, such that "[a] question goes at the end of its turn, and [an] answer at the beginning of its turn." It may be noted that D constructs his line 6 as a continuation of his line 4 through the use of "kore." However, in so doing, he pushes the response to C's line 5 back further into his (D's) turn, thus breaking the contiguity mentioned by Sacks (1987). In this way, his deployment of *a* here seems to mark this momentary rupture in the contiguity of question/answer.¹¹ However, such a function has not been described in relation to the English token *oh*.

While this may seem like an insignificant bone to pick, I argue that it points to a larger problem concerning the straightforward applicability of English CA findings to interactions in other languages. Of course, as ten Have (2007:121) maintains, the previous findings of English-based CA provide the researcher with a "conceptual apparatus" that "would be silly to ignore completely." However, a fundamental and key concept in CA is that pre-held notions must be suspended during data analysis. I would argue that the free application of English CA findings to FL data is tantamount to the application of pre-held notions. As the above analyses have shown, it would, for instance, be problematic to attempt an importation of the notions of "change of state token" or "disagreeing to disagreement" and unreflectively associate them with the Japanese token α . Such an endeavor would result in (a) a reification of the notions themselves, (b) a researcher-relevant (i.e. "etic") analysis of the data for at least the token α , and (c) a failure to provide an understanding of the actual interactional work being done by α . Though there may indeed be many similarities between interactions in English and other languages, there will also be linguistically, culturally, and contextually sensitive applications of the context-free resources for talk-in-interaction, which result in important differences that may be consequential for analyses of data (see Moerman 1990). Thus, I argue that while analysts should certainly be guided by an awareness of the body of CA findings for English, they must also proceed in a cautiously exploratory fashion when dealing with FL data. Such data must be viewed afresh in order to uncover its own unique characteristics. I will further elaborate upon this argument in the following section.

IV. Analytic resources: New requirements, and possible gains

The preceding discussion has considered several potential difficulties for CA in examining cross-linguistic data. I have considered the issues of ambiguity in participant orientation in L2 interaction, difficulties with developing accurate transcriptions of the data when the language of the interaction is not the researcher's L1, the availability of members' knowledge to the analyst (and reading audience), and the appropriateness of applying CA findings from English to FL interaction. In addition to re-analyzing Firth's (1996) data in order to show that the "ambiguities" which he argues problematize the use of CA in looking

11 My analysis of this point benefits greatly from insightful comments by the anonymous reviewer.

at L2 data stem from an attempt to assign intentionality to the participants' actions, I have also alluded to several methods that have been suggested for ameliorating the remaining problems. In particular, in regard to the problem of members' knowledge for the analyst in the case of FL data, I noted that (a) Moerman (1990) advises working with an L1 speaker during the transcription process, and that (b) Bilmes (1996) and Moerman (1988; 1990; 1996) argue that ethnographic information must be used to provide the kind of members' knowledge necessary to see the interaction from a participant-relevant perspective. Furthermore, in the case of analyzing FL data, I argued that analysts must exercise caution in importing CA findings from English to describe and account for their FL data. I suggested that analysts must proceed in an exploratory manner while maintaining a general awareness of the English findings. In the sections below, I will further elaborate on each of these points. I will conclude the section by commenting on some of the possible analytic gains related to using CA in examining cross-linguistic data.

1. (New) requirements when dealing with cross-linguistic data

(1) Ethnographically informed analysis

Much debate has gone on over the relationship between conversation analysis and ethnography. Moerman (1988), advocates a "culturally contextualized conversation analysis," i.e., an ethnographically informed approach to CA. However, his proposal has been subjected to criticism by several "conventional" conversation analysts (e.g. Beach 1990; Heritage 1990; Mandelbaum 1990; Pomerantz 1990; see also Nelson 1994 for an overview). Such criticism has generally focused on two distinct issues. The first issue is concerned with how ethnographic data is regarded by CA in general. One of the most fundamental precepts of CA is that objects such as accounts, explanations, stories, tellings, etc. constitute data for analysis themselves, *not* analysts' resources. This means that typical ethnographic research methodologies such as interviews, self reports, questionnaires, fieldnotes, participant observations, etc. are viewed by CA as either possibly providing one form of interactional data for analysis (i.e., in the case of interviews), or as being of dubious value for providing a participant-based (i.e., "emic") view of interactional practices. In other words, CA requires that its data be constituted by the actual interactional practices themselves, and *not* by participants' accounts of such practices. The theoretical reason for this is that participants' accounts of interactional practices are never produced in a vacuum — they are always interactionally occasioned, and designed and formulated specifically and precisely for (a) the sequential context in which they are deployed, and (b) for their recipient(s). Therefore, such accounts are not treated by conversation analysts as unproblematic reflections of "what really happened" or "how things really are."

However, as Moerman argues, "how could the conversation analyst recognize an utterance as a pre-invitation, for example, without trading on covert native knowledge of dating practices and the special significance for them of Saturday night" (1988:4)? In other words, even the most mundane of talk-in-interaction is deeply and ineluctably embedded in and dependent for its interpretation upon members'

knowledge¹² — members' knowledge that is tacitly drawn upon by many CA analysts in examining their data.¹³ However, Hester and Francis (2000) and Watson (1997), for example, strongly criticize this tacit employment of members' knowledge by many CA researchers. They argue instead that such members' knowledge should be made a topic of analysis and explication itself.

The second criticism is based on the notion that interactional data is fundamentally describable and accountable from within itself. An important finding of CA is that every current utterance in talk-in-interaction is both context-shaped (i.e. displays an analysis of and is deployed in relevant relation to the prior utterance) and context-renewing (i.e. creates a context to which the next turn must orient, and of which it must display an analysis) (see, e.g., Heritage 1988). This fact is a fundamental principle of talk-in-interaction, and provides for the interactional co-accomplishment of intersubjectivity. It is also the foundation for the CA practice of basing analytic claims on the orientations of the participants themselves, which they publicly document for each other (and thus simultaneously make them available to the researcher) in their interactions (Sacks, Schegloff and Jefferson 1974). Because of the availability of the participants' orientations in the actual interactional sequences, it is argued that the unwarranted invocation of exogenous information may be superfluous, or even obstruct the development of a participant-relevant view (see Schegloff 1991; 1997c).

Recognizing that within their publicly documented actions participants also often display orientations to a second kind of context, i.e. "social structure" (in a macro sense), however, Schegloff (1991) does allow for the *data-warranted* inclusion of exogenous contextual information. However, in order for an analyst to warrant such an inclusion, Schegloff requires that the participants themselves make such contextual information *relevant* (e.g., by demonstrably orienting to it in their interaction), and that the context-so-made-relevant has *procedural consequence* (i.e. repercussions on the "shape, form, trajectory, content, or character of the interaction" [1991:53]). Drawing upon Schegloff (1991), Maynard (2003:65) proposes that CA researchers develop a "limited affinity" with ethnography. Maynard argues that such a limited affinity would allow for ethnographic support on three occasions: for describing settings and identities; explicating unfamiliar terms, phrases, or courses of action; and to explain "curious" sequential patterns. However, Maynard's notion of limited affinity seems to be mainly concerned with data presentation, that is showing the data in a form which will facilitate an objective reading and independent analyses by the reading audience. Thus, while I fundamentally agree with Maynard's argument in regard to this point, I would additionally argue that an analyst must also work to gain members' knowledge in the

12 This fact is amplified significantly when the data under examination is FL, but it remains equally true in the case of English data.

13 One possible reason for a general lack of recognition of this point by conventional CA may be that it has been developed by researchers examining interactions in their own L1, thus leaving the intertwined relationship between talk and members' knowledge "seen but unnoticed" (Garfinkel 1967). However, in my opinion, there is somewhat of a double-standard at work here. CA researchers that criticize the inclusion of ethnographic information while tacitly drawing upon members' knowledge in their own analyses have failed to consider from whence they themselves have obtained such members' knowledge. We are all, in a sense, ethnographers of our own cultures.

form of the kinds of social and linguistic competencies that will facilitate seeing and hearing the interaction as the participants do, i.e. in terms of “common sense appearances of the social world” (Francis and Hester 2004:26) — especially in the case of FL data. Thus my stance may be more harmonious with Bilmes (1996), who relaxes Schegloff’s (1991) strictures one step by requiring only that the participants make exogenous context relevant in their interaction. Such a modification, Bilmes maintains, allows for an ethnographic accounting of even the kinds of members’ knowledge (of possible interest from an anthropological perspective) which are “seen but unnoticed” by the participants themselves (i.e., they are made relevant in the interaction, but do not necessarily have procedural consequence — like Moerman’s (1988:5) pre-invitation/Saturday night date scenario).

(2) Data sessions

Moerman (1996) advises analysts looking at FL interactions to enlist the aid of an L1 speaker of the language. In addition to this, I would argue for a requirement to present the data at CA data sessions which have a significant population of L1 and near-native speakers of the language of the interaction.¹⁴ I personally have benefited greatly from presenting my data to audiences of L1 speakers of Japanese, even if it has only ended up confirming my own intuitions and observations. Such support makes available a certain kind of epistemic authority, which may be a critical form of “credibility” for analysts looking at FL data. Furthermore, presentation of one’s data to other conversation analysts also allows for a dialogue in which new, fresh views of certain sequences may be brought to light. Through this process, a researcher may come in touch with and draw upon a much more comprehensive socially distributed body of knowledge concerning the research literature, etc. than would be available on an individual level.

(3) Ethnomethodological indifference and unmotivated looking

I have argued above that, in the case of FL data, an attempt by the analyst to import CA findings from English instantiates a violation of the analytical requirement to suspend pre-held notions. I would like to expand my argument to include L2 data. This is because L2 participants may potentially use certain established linguistic resources in ways that diverge from their established use, or accomplish interactional work typically accomplished through deploying certain established resources by deploying novel resources instead. In an examination of interactions between Japanese novice L2 speakers of English, Carroll (2005), for example, focuses on a practice not typically observed in L1 interaction, i.e. vowel epenthesis (e.g. “dogu” instead of “dog”). Although vowel epenthesis has generally been viewed by non-CA research simply as a phonological error stemming from L1 transfer, Carroll (2005) shows that the participants were actually deploying it in a socially organized way as a floor-holding device — a finding not likely to have

14 It may of course be argued that this is not a new requirement in that it is considered “best practice” for all CA researchers regardless of the nature of their data (see ten Have 2007). I maintain, however, that it may be more of an imperative practice in the case of analysts dealing with interactions in languages other than their L1.

been made without the suspension of pre-held notions through applying the principles of unmotivated looking and ethnomethodological indifference. Thus, I argue that researchers must maintain a strict adherence to the fundamental CA principles of ethnomethodological indifference and unmotivated looking in the case of L2 data as well (see, e.g., Mori 2007; Schegloff 2000a).

2. Possible analytic gains

I believe that there are at least two important analytical gains involved with using CA to examine cross-linguistic data. The first gain comes to the conversation analyst from the nature of the data, and especially relates to the case of FL data. When analysts are L1 speakers of the language(s) used in the interactions they examine, the CA requirement for the suspension of any pre-held notions when performing an analysis can be challenging, as researchers often may not even be aware that they are using such resources. In my opinion, however, when the interaction is not conducted in the researcher's L1, it may put the researcher at an analytical advantage. I believe that the task of suspending pre-held notions becomes much easier when analysts can approach the data somewhat with the eyes and ears of an "outsider." In other words, it may be easier for the analyst to set aside any pre-held expectations and engage in unmotivated looking because the data is already made "anthropologically strange" (Hammersley and Atkinson 1983:8) by its very nature.

The second analytic gain comes to the data from CA, and is related to the fundamental principle of unmotivated looking — especially in cases where at least one of the participants is a L2 speaker of the language(s) used in the interaction. Firth and Wagner (1997), for example, note that non-CA research on such data has tended to assume that the interactants are linguistically and interactionally "deficient." According to Scott Saft (p.c.), however, though "it might be true that [such participants] have not yet acquired some desired aspects of language such as vocabulary and grammar," CA has the analytic capability to show us "how interactionally competent L2 speakers actually are." I would therefore argue that an important analytic gain is afforded in the sense that CA can allow analysts to avoid *a priori* seeing the interaction in terms of deficiencies, and thus uncover unexpected new findings (cf. Carroll 2005). Furthermore, CA allows analysts to develop a participant relevant perspective through which they can understand "non-target" language use in light of the interactional work it performs rather than in terms of prescriptive linguistic appropriateness.

V. Conclusion

In this essay, I have discussed a number of issues related to using CA to examine cross-linguistic data. In particular, I have considered three issues that have been suggested by some researchers to be potentially problematic for CA. First, I discussed Firth's (1996) argument that certain ambiguities and special practices present in L2 interactions may make it difficult for CA to rely on its "conventional" analytical practices. In

a reanalysis of Firth's data, I showed that Firth's "ambiguities" appear to stem from an attempt by Firth to assign intention to the participants' actions. Next, I discussed the problem of members' knowledge for analysts who are not L1 speakers of the language(s) of the interactions they examine. I proposed that such difficulties are at least two fold. First, the CA requirement for detailed and accurate transcriptions of spoken interaction may be problematic for such analysts. Second, I discussed the issue of members' knowledge in light of the ethnomethodological requirement for unique adequacy, i.e. a functional competence in the social practices under examination. In a preliminary consideration of possible solutions to these two problems, I touched upon Moerman's suggestion to secure the assistance of a L1 speaker associate and upon the argument made by some researchers (e.g., Bilmes 1996; Moerman 1988; 1990; 1996) for the necessity of informing conversation analysis with ethnographic research. Finally, I discussed the issue of the applicability of CA findings for English to FL interaction. In relation to this problem, I provided a discussion of the Japanese token α . In an analysis of Japanese interactional data, I showed that although α is highly analogous to the English token *oh* in some contexts, there also appear to be several domains of usage that are dissimilar. I argued that this fact points to the problematicity of attempting to import CA findings from English when dealing with FL data. Instead, I argued, analysts should cautiously explore FL data on its own terms.

In the third section, I turned to a discussion of some (new) requirements for CA created by cross-linguistic data. First, I expanded upon the discussion of the necessity for ethnographic information. I noted that a number of researchers have recognized the inseparably co-dependent nature of talk-in-interaction and members' knowledge. I also considered Scheloff's (1991) criteria for the inclusion of exogenous contextual information, relevance and procedural consequence, and the application and adaptation of Schegloff (1991) by Maynard (2003) and Bilmes (1996) in producing defensible syntheses of CA and ethnography. Second, I provided a brief addendum to Moerman's (1990) advice to enlist the aid of a L1 speaker of the language(s) used in the data. Finally, I further argued for a cautionary stance in applying CA findings from English to FL data, and expanded my argument to include L2 data as well. My discussion emphasized the special relevance of the concepts of ethnomethodological indifference and unmotivated looking for the analysis of cross-linguistic data.

Lastly, in a consideration of possible analytic gains in the case of researchers examining FL interactions, I argued that the CA requirement for the suspension of pre-held notions during analysis may be easier to fulfill because the data is naturally "anthropologically strange" (Hammersley and Atkinson 1983:8). In the case of L2 data, I noted that CA allows the analyst to avoid approaching the data with pre-held assumptions of the "deficiency" of the participants, and may thus afford deeper analytical insights than other approaches. Furthermore, I argued that CA can help the analyst to see the local interactional work being performed by language that might otherwise be viewed as "non-target."

Though an increasing number of researchers are employing CA to examine cross-linguistic data, we are still a long way off from a view of the full picture of the possibly universal generic interactional

competencies (see Schegloff 2006) which underpin the accomplishment of our various and varied social realities. It is hoped that the current essay may provide some direction and encouragement for those seeking to bring the analytical apparatus of CA to bear on foreign and second language data.

Appendix

Transcription Conventions:

^	glottal stop
heh hah	laughter tokens
↑ ↓	high or low pitch (placed prior to affected element)
>words<	quicker than surrounding talk
<words>	slower than the surrounding talk
[beginning of overlapped speech
]	end of overlapped speech
=	latching (i.e. no pause after the completion of one utterance and the beginning of another)
(1.3)	length of pause (measured in seconds and tenths of seconds)
(.)	pause less than one tenth of a second
(words)	unclear utterance
(***)	unrecoverable utterance (number of syllables indicated by asterisks)
((words))	commentary by transcriptionist
wo::rd	geminate sound
WORDS	louder than surrounding talk
° words °	softer than surrounding talk
<u>words</u>	more emphasis than surrounding talk
wo-	cut-off
,	continuing intonation
.	final intonation
¿	rising but not questioning intonation
?	question intonation

Interlinear Key for Japanese

C: Copula	P: Past tensePA: Passive
CT: Continuer	Q: Question marker
D: Double particle (<i>kamo, toka, etc.</i>)	QT: Quotation marker
DA: Dative particle (<i>he, ni</i>)	S: Subject marker
F: Speech filler	T: Topic marker
IP: Interactional particle (<i>yo, ne, sa, na, etc.</i>)	
IT: Interjection (<i>e, a, ^e, ^a, etc.</i>)	<u>Stylistic indicators (when necessary):</u>
L: Linking device (<i>-te, de, si, kedo etc.</i>)	DS: Distal style
M: Noun modification particle (<i>no, na, etc.</i>)	FS: Formal style
N: Nominalizer	H: Honorific
NG: Negative	HU: Humble
O: Object marker	PS: Plain style

Works cited

- Beach, Wayne A. 1990 "Searching for universal features of conversation," *Research on Language & Social Interaction* 24, pp.351-368.
- Bilmes, Jack 1988 "The concept of preference in conversation analysis," *Language in Society* 17, pp.161-181.
- 1993 "Ethnomethodology, culture and implicature: Toward an empirical pragmatics," *Pragmatics* 3, pp.387-409.
- 1995 "Negotiation and Compromise," in Alan Firth (ed.), *The Discourse of Negotiation: Studies of Language in the Workplace*, Oxford, Pergamon Press Oxford, pp.61-81.
- 1996 "Problems and resources in analyzing Northern Thai conversation for English language readers," *Journal of Pragmatics* 26(2), pp.171-188.
- Carroll, Donald 2005 "Vowel-marking as an Interactional Resource in Japanese Novice ESL Conversation," in Keith Richards and Paul Seedhouse (eds.), *Applying Conversation Analysis*, Basingstoke, Hampshire, Palgrave Macmillan, pp.214-234.
- Chapman, Audrey and Patrick Ball 2001 "The Truth of Truth Commissions: Comparative Lessons from Haiti, South Africa, and Guatemala," *Human Rights Quarterly* 23(1), February, pp.1-43.
- Firth, Alan 1996 "The discursive accomplishment of normality: On 'lingua franca' English and conversation analysis," *Journal of Pragmatics* 26(2), pp.237-259.
- Firth, Alan, and Johannes Wagner 1997 "On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research," *The Modern Language Journal* 81(3), pp.285-300.
- Francis, David, and Stephen Hester 2004 *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Furo, Hiroko 2001 *Turn Taking in English and Japanese: Projectability in Grammar, Intonation, and Semantics*. New York: Routledge.

- Gafaranga, Joseph 1999 "Language choice as a significant aspect of talk organization: The orderliness of language alternation," *Text* 19(2), pp.201-225.
- 2001 "Linguistic identities in talk-in-interaction: Order in bilingual conversation," *Journal of Pragmatics* 33(12), pp.1901-1925.
- Garfinkel, Harold and Harvey Sacks 1970 "On formal structures of practical actions," in John McKinney and Edward Tiryakian (eds.), *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, New York, Appleton-Century-Crofts, Educational Division, pp.160-193.
- Garfinkel, Harold 1967 *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Garfinkel, Harold and Lawrence Wieder 1992 "Two incommensurable, asymmetrically alternate technologies of social analysis," in Graham Watson, and Robert Seiler (eds.), *Text in Context: Studies in Ethnomethodology*, Newbury Park, Sage, pp.175-206.
- Goodwin, Charles 1980 "Restarts, pauses, and the achievement of a state of mutual gaze at turn-beginning," *Sociological Inquiry* 50(3-4), pp.272-302.
- Hammersley, Martyn and Paul Atkinson 1983 *Ethnography, Principles in Practice*. London: Tavistock.
- Hauser, Eric 2005 "Coding 'corrective recasts': The maintenance of meaning and more fundamental problems," *Applied Linguistics* 26(3), pp.293-316.
- 2008 "Co-constructing an opinion of Japaneseness," paper presented at the 10th international conference of the Japanese Society for Language Sciences, University of Shizuoka, Shizuoka, Japan.
- Have, Paul ten 2007 *Doing Conversation Analysis*. Boston: Sage.
- Heritage, John 1984 "A change-of-state token and aspects of its sequential placement," in J. Maxwell Atkinson and John Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge, Cambridge University Press, pp.299-345.
- 1988 "Explanations as accounts: A conversation analytic perspective," in Charles Antaki (ed.), *Analysing everyday explanation: A casebook of methods*, London, Sage, pp.127-144.
- 1990 "Intention, meaning and strategy: Observations on constraints on interaction analysis," *Research on Language & Social Interaction* 24, pp.311-332.
- 1998 "Oh-prefaced responses to inquiry," *Language in Society* 27(3), pp.291-334.
- 2002 "Oh-prefaced responses to assessments: A method of modifying agreement/disagreement," in Cecilia Ford, Barbara Fox, and Sandra Thompson (eds.), *The Language of Turn and Sequence*, New York, Oxford University Press, pp.196-224.
- Hester, Stephen and Peter Eglin (eds.) 1997 *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis, Studies in ethnomethodology and conversation analysis*. Washington, D.C: International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis, University Press of America.
- Hester, Stephen and David Francis 2000 "Ethnomethodology, conversation analysis, and 'institutional talk'," *Text* 20(3), pp.391-413.
- Jefferson, Gail 1983 "On exposed and embedded correction in conversation," in John Lee and Graham Button (eds.), *Talk and Social Organization*, Clevedon, UK, Multilingual Matters, pp.86-100.
- 1989 "Notes on a possible metric which provides for a 'standard maximum' silence of approximately one second in conversation," in Derek Roger and Peter Bull (eds.), *Conversation: An Interdisciplinary Perspective*.

- Clevedon: Multilingual Matters.
- 1996 "A case of transcriptional stereotyping," *Journal of Pragmatics* 26(2), pp.159-170.
- Mandelbaum, Jenny 1990 "Beyond mundane reason: Conversation analysis and context," *Research on Language & Social Interaction* 24, pp.333-350.
- Mori, Junko 2006 "The workings of the Japanese token hee in informing sequences: An analysis of sequential context, turn shape, and prosody," *Journal of Pragmatics* 38(8), pp.1175-1205.
- 2007 "Border crossings? Exploring the intersection of second language acquisition, conversation analysis, and foreign language pedagogy," *The Modern Language Journal* 91(5), pp.849-862.
- Moerman, Michael 1988 *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 1990 "Exploring talk and interaction," *Research on Language & Social Interaction* 24, pp.173-187.
- 1996 "The field of analyzing foreign language conversations," *Journal of Pragmatics* 26(2), pp.147-158.
- Nelson, Christian 1994 "Ethnomethodological positions on the use of ethnographic data in conversation analytic research," *Journal of Contemporary Ethnography* 23(3), pp.307-329.
- Pomerantz, Anita 1984 "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes," in J. Maxwell Atkinson and John Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge, Cambridge University Press, pp.57-101.
- 1990 "Mental concepts in the analysis of social action," *Research on Language & Social Interaction* 24, pp.299-310.
- Raymond, Geoffrey 2004 "Prompting action: The stand-alone 'so' in ordinary conversation," *Research on Language and Social Interaction* 37(2), pp.185-218.
- Sacks, Harvey 1987 "On the preferences for agreement and contiguity in sequences in conversation," in Graham Button and John Lee (eds.), *Talk and Social Organization*, Clevedon, England, Multilingual Matters Limited, pp.54-69.
- 1995 *Lectures on Conversation*. Boston: Wiley-Blackwell.
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff and Gail Jefferson 1974 "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation," *Language* 50(4), pp.696-735.
- Schegloff, Emanuel 1979 "The relevance of repair to syntax-for-conversation," in Talmy Givon (ed.), *Discourse and Syntax*, New York, Academic Press, pp.261-286.
- 1987 "Recycled turn beginnings: A precise repair mechanism in conversation's turn-taking organization," in Graham Button and John Lee (eds.), *Talk and Social Organisation*, Clevedon, Multilingual Matters, pp.70-85.
- 1991 "Reflections on talk and social structure," in Deirdre Boden and Don Zimmerman (eds.), *Talk and Social Structure: Studies in ethnomethodology and conversation analysis*, Berkeley, University of California Press, pp.44-70.
- 1992 "Repair after next turn: The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation," *American Journal of Sociology* 97(5), pp.1295-1345.
- 1997a "Third turn repair," in Gregory Guy, Crawford Feagin, Deborah Schiffrin, and John Baugh (eds.), *Towards a Social Science of Language 2*, Philadelphia, John Benjamins, pp.261-286.
- 1997b "Practices and actions: Boundary cases of other-initiated repair," *Discourse Processes* 23, pp.499-

- 545.
- 1997c “Whose text? Whose context?” *Discourse & Society* 8(2), pp.165-187.
- 2000a “When ‘others’ initiate repair,” *Applied Linguistics* 21(2), pp.205-243.
- 2000b “Overlapping talk and the organization of turn-taking for conversation,” *Language in Society* 29(1), pp.1-63.
- 2006 “Interaction: The infrastructure for social institutions, the natural ecological niche for language, and the arena in which culture is enacted,” in Nicholas Enfield and Stephen Levinson (eds.), *Roots of Human Sociality: Culture, cognition and interaction*, Oxford, Berg, pp.70-96.
- 2007 *Sequence Organization in Interaction: Volume 1: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel, Gail Jefferson and Harvey Sacks 1977 “The preference for self-correction in the organization of repair in conversation,” *Language* 53(2), pp.361-382.
- Seedhouse, Paul 1998 “CA and the analysis of foreign language interaction: A reply to Wagner,” *Journal of Pragmatics* 30(1), pp.85-102.
- Tanaka, Hiroko 1999 *Turn-taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction*. Amsterdam: J. Benjamins.
- Wagner, Johannes 1996 “Foreign language acquisition through interaction: A critical review of research on conversational adjustments,” *Journal of Pragmatics* 26(2), pp.215-235.
- Wong, Jean 2000 “Delayed next turn repair initiation in native/non-native speaker English conversation,” *Applied Linguistics* 21(2), pp.244-267.
- Wong, Jean, and David Olsher 2000 “Reflections on conversation analysis and nonnative speaker talk: An interview with Emanuel A. Schegloff,” *Issues in Applied Linguistics*, 11(1), pp.111-128.

The Poetic Imagination of *Shōjo Manga*: Ray Bradbury through Moto Hagio's Eyes

HIRAISHI Noriko

Abstract

Ray Bradbury (1920-2012) is an American writer best known for works of science fiction and fantasy such as *Fahrenheit 451* (1953), many of which have been adapted for TV, films, plays, and comics. This paper examines adaptations of Bradbury's works by Moto Hagio (1949-), one of Japan's most important artists in *shōjo manga* (girls' comics). Hagio's adaptations of eight Bradbury short stories in 1977 and 1978 reveal distinctive features of Japanese *shōjo manga*. The first stories she chose to adapt ("The Fog Horn" and "The Lake") indicate her appreciation of the poetic quality in Bradbury's writing, which she amplified. Her adaptations artfully depict characters' emotions and feelings through a then-innovative panel layout and multilayered narration developed by Hagio and her peers. These techniques for depicting inner feelings became distinctive features of *shōjo manga* in the 1970s. Hagio's works show not only the elaborate techniques of *shōjo manga* to depict psychological states but also how dark fantasies and science fictions harmonize with a genre for girls: the story always takes the girls' side. Sometimes transforming the original, Hagio gives her female readers a girl protagonist energetically engaged in a plot. Moreover, Hagio's adaptations address the problems that Japanese girls faced at that time. Although *shōjo manga* always has addressed issues familiar to girls, the genre and its techniques have evolved to deal with earnest themes in Japanese culture and society.

Keywords: Ray Bradbury; *shōjo manga*; Moto Hagio; Fantasy; Inner feelings

キーワード：レイ・ブラッドベリ；少女マンガ；萩尾望都；ファンタジー；内面描写

1. Introduction

Ray Bradbury (1920-2012) is an American writer best known for science fictions and fantasies such as *The Martian Chronicles* (1950) and *Fahrenheit 451* (1953). Many of his works have been adapted to TV, films, plays, and comics.

This paper examines adaptations of Bradbury's works in 1977 and 1978 by Moto Hagio (1949-), one of the most important artists in Japanese *shōjo manga* (girls comics). She was a longstanding fan of science fiction, and Bradbury is among her favorite writers:

I opened the first page and that was my downfall. I was intoxicated, turned the pages until the dawn, and ran to buy *R is for Rocket* the next day.

Thus I went crazy over Ray Bradbury. I read *Something Wicked This Way Comes*, and short stories carried in *Sci-Fi Magazine*. When *S is for Space* was out, I wanted to buy all the copies in the stores (Hagio 2012:236).

Hagio adapted eight short stories: “R is for Rocket” (1943), “The Screaming Woman”(1951), “The Fog Horn” (1951), “The Lake” (1944), “Come into My Cellar” (1962), “Homecoming” (1946), “Jack-in-the-Box”(1947), and “The Rocket Man” (1951). These adaptations were first serialized in a weekly Manga magazine for girls, then published as a Bradbury’s anthology, under the title of *U ha Uchūsen no U (R is for Rocket)*.

Although a cliché, “Interiority is the terrain of the telling mode; Exteriority is best handled by showing and especially by Interactive modes” (Hutcheon 2013:56), Hagio’s adaptations reveal the genre’s aptness for describing “interiority,” which is one of the distinctive features of *shōjo manga*. To start the serialization of Bradbury’s eight stories, Hagio chose “The Fog Horn” and “The Lake.” Her choices indicate her devotion to the poetic quality of Bradbury’s writing, which she amplified in her adaptations.

II. Focus on emotions and feelings: *The Fog Horn*

“The Fog Horn” appeared as “The Beast from 20,000 Fathoms” in *Saturday Evening Post* on June 23, 1951. As its title indicates, the story is about a “beast,” a prehistoric reptile that rises from the ocean when it hears a fog horn. Johnny, the narrator, and McDunn, the lighthouse keeper, witness the monster emerge from the water seeking another of its kind and survive its attack, which destroys the lighthouse. This story was adapted to a film, *The Beast from 20,000 Fathoms*, regarded as the vanguard of the 1950s vogue in giant prehistoric creature films, including the *Godzilla* series from Japan. According to Nichols, “reputed to have cost \$200,000 and to have generated \$5million in revenues, it was undoubtedly one of the most successful science fiction films of its time” (Nichols 2006). It is also the first movie to feature animator Ray Harryhausen’s solo work. Although Bradbury is identified as the author, the movie shares little with his story, as its plot primarily involves the monster attacking cities and people.

This plot, a mysterious encounter with a prehistoric reptile, has always attracted readers. Before examining Hagio’s work, let us refer to Wayne Barlowe’s (1958-) graphic novel of 1993. A science fiction and fantasy painter, Barlowe has painted over 300 book and magazine covers and illustrations for major book publishers as well as *Life*, *Time*, and *Newsweek*. He is known for his realistic images of dinosaurs and extraterrestrials. He took charge of the creature and character designs for numerous films and games, including the *Hellboy* series, *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*, and *Avatar*.

Abbreviated to eight pages, Barlowe’s “Fog Horn” appeared in *Ray Bradbury Comics* 3, in June 1993.

The cover features the lighthouse reflected in the monster's eye (Fig.1 (Bradbury 2003:151)). As Figure 1 reveals, the style is realistic. The main theme is the encounter with a monster/dinosaur, since the volume in which it was carried declared itself "All-Dinosaur Issue!" Bradbury's comment on this version focuses on this aspect:

Have you ever known anyone who wanted to be a dinosaur, waking up one morning all smiling teeth and grasping claw? I don't recall anyone ever in my life who, if given the prehistoric wish, wouldn't have loved to find themselves at dawn, dressed up in samurai armor, which many dinosaurs seemed to wear, and ready to breakfast on beasts or humans, whichever was handy.... (Bradbury 2003:150)

However, Hagio's point was completely different. What she emphasized was Bradbury's literary craft of this story, as Charles Piddok states: "In 'The Foghorn', Ray is able to use the power of language to make readers empathize with the lonely creature and its torment. No wonder critics loved the story and readers have read it over and over again for years" (Piddock 2009:60). Hagio places the lighthouse keeper McDunn on her title page instead of the monster (Fig.2 (Hagio1997:57)). She picks up on the theory about the foghorn, told by McDunn, which was deleted from Barlowe's version.

"One day many years ago a man walked along and stood in the sound of the ocean on a cold sunless shore and said 'We need a voice to call across the water, to warn ships; I'll make one. I'll make a voice that is like an empty bed beside you all night long, and like an empty house when you open the door, and like the trees in autumn with no leaves. A sound like the birds flying south, crying, and a sound like November wind and the sea on the hard, cold shore. I'll make a sound that's so alone that no one can miss it, that whoever hears it will weep in their souls, and to all who hear it in the distant towns. I'll make me a sound and an apparatus and they'll call it a Fog Horn and whoever hears it will know the sadness of eternity and the briefness of life.'" (Bradbury 1990:7)

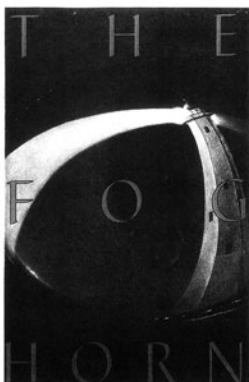


Fig. 1 Title page of Barlowe's "Fog Horn".



Fig. 2 Title page of Hagio's version.

According to Eller, director John Huston read “The Fog Horn” and “smelled the ghost of Melville,” and Bradbury did “always regard [this passage] as one of his best pensées, or prose poems” (Eller 2014: 10). To adapt this part, Hagio pours all her energies into the images in her imagination.

She depicts the “voice” using the then-innovative page layout cultivated by herself and peers. The left page of Figure 3 (Hagio 1997:64-65) and the right page of Figure 4 (Hagio 1997:66) show that she changes the size of the panels, even though panel layout was fixed in traditional Japanese *manga*.¹ This technique renders the passage more poetic and emotional for its series of rich images. It also invites readers’ attentions to the last sentence, arranged in the top panel of the left page: “...whoever hears it will know the sadness of eternity and the briefness of life.”

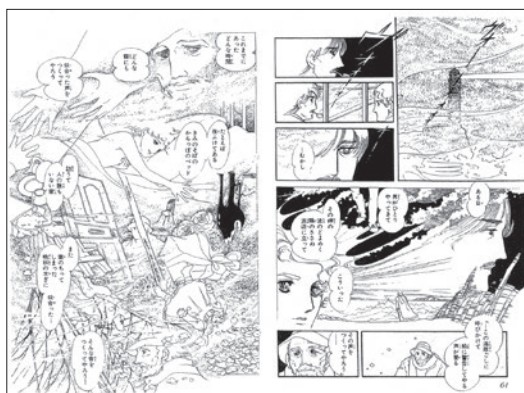


Fig. 3 McDunn's theory (1).

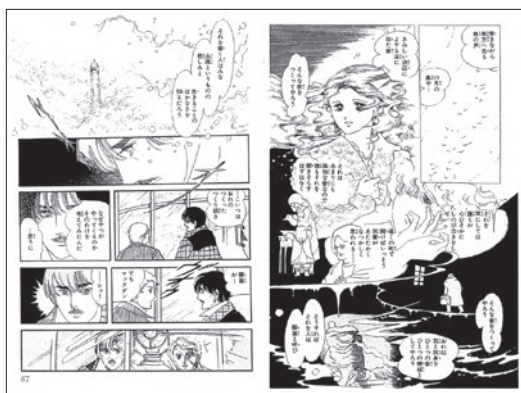


Fig. 4 McDunn's theory (2).

A focus on the emotional side of the story pervades the work. Although the monster's appearance is not especially impressive, what Hagio emphasizes is McDunn's interpretation of feelings.

“That's life for you,” said McDunn. “Someone always waiting for someone who never comes home. Always someone loving some thing more than that thing loves them. And after a while you want to destroy whatever that thing is, so it can hurt you no more.” (Bradbury 1990:10)

McDunn's remarks are located just before he switches off the foghorn. Barlowe's version emphasizes the monster and omits McDunn's words, but Hagio draws the monster hazily and devotes the largest panel to them (Fig.5 (Hagio 1997:77)). This inclination of Hagio reappears in the last part of the story, also omitted from Barlowe's version:

1 Yomota Inuhiko points out that this “erratic disassembling of the panel layout” was invented by “the New Wave of shōjo manga.” (Yomota 1999:55) In 2000, Ragawa Marimo and Fujimoto Hitomi called the fixed panel layout as “shōnen(boy's) manga-ish.” (Fujimoto 2000:73)

“It’s gone away,” said McDunn. “It’s gone back to the Deeps. It’s learned you can’t love anything too much in this world. It’s gone into the deepest Deeps to wait another million years. Ah, the poor thing! Waiting out there, and waiting out there, while man comes and goes on this pitiful little planet. Waiting and waiting.” (Bradbury 1990:12)

The following passages in the original text turn to the drawing (Fig.6 (Hagio 1997:87-88)). The final line—“I sat there wishing there was something I could say”—is depicted by Johnny’s expression, the sound of the foghorn, and the car offset in a desolate field. However, she adds a word to her last line: a *Waiting and waiting, forever*. The addition of “forever” echoes with “the sadness of eternity and the briefness of life.” The focus of Hagio’s adaptation is not the monster, but love, life and loneliness.

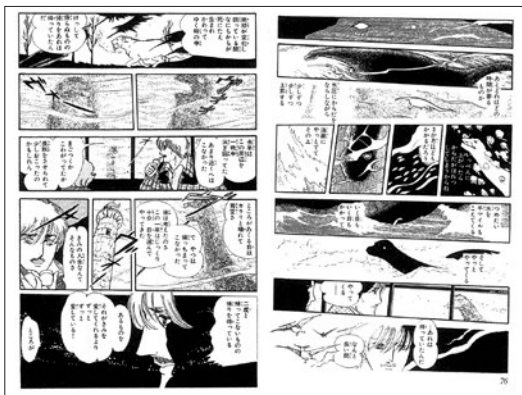


Fig. 5 “That’s life for you”.

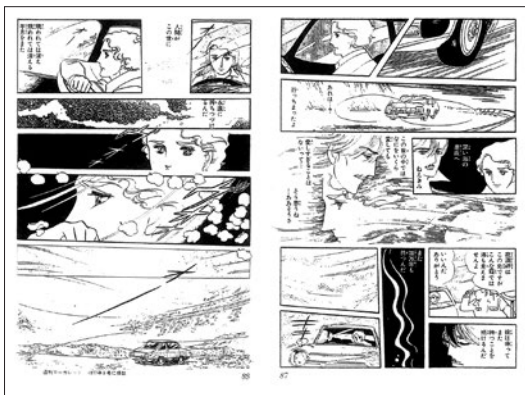


Fig. 6 Hagio’s last page: Waiting and waiting, *forever*.

III. Depiction of inner feelings: *The Lake*

“The Lake” (1943) is among Bradbury’s earliest works, and he regarded it as his first story of literary value (Bradbury and Aggelis 2004: p.xvi (introduction)). He recalled this story later:

The long hot summers of childhood surround me in photos taken along the shores of Lake Michigan. Looking at them many years ago, I remembered when I built impossible cities out of sand and discovered that the lake could be a sorrow as well as a joy. When I finished writing this story at age 22 I was in tears, and knew that at last I had become a writer.²

The protagonist of “The Lake” is twelve-year-old Harold. The day before his family moves to the West Coast, he visits the lake and remembers his drowned girlfriend, Tally, whose body was never found.

² From the DVD *The Ray Bradbury Theater* Season 3, Episode 3 (1989).

He calls to her, and builds half of a sand castle, saying “Tally, if you hear me, come in and build the rest.”

I called her name. A dozen times I called it.

“Tally! Tally! Oh Tally!”

You really expect answers to your calling when you are young. You feel that whatever you may think can be real. And some times maybe that is not so wrong.

I thought of Tally, swimming out into the water last May, with her pigtails trailing, blond. She went laughing, and the sun was on her small twelve-year-old shoulders. I thought of the water settling quiet, of the life guard leaping into it, of Tally’s mother screaming, and of how Tally never came out. . . . (Bradbury 1996:121)

While adapting this passage, Hagio uses polyphonic narration with multilayered words (Fig.7 (Hagio 1997:94-95)). Harold’s utterances appear inside balloons: “Tally! Tally! Oh, Tally! Tally, come back, Tally come back!” She again adds a word to the original: “Lake, Lake, bring back Tally to me!”

Harold’s internal monologue is placed in panels without balloons. The panel layout is again irregular, and images of Tally, playing and swimming with Harold, appear repeatedly in big panels. We should note the pictorial flashback of the drowning: Tally’s mother screaming, the scene is depicted with a black background.

As Natsume points out, the “techniques to depict psychological states—showing flashbacks, imaginary scenes, dreams, bits of subconscious—can be taken as a challenge on part of some girls’ manga to pursue more ‘literary’ themes (Natsume 2003:5)” in the 1970s. Hagio’s adaptation employing innovative layouts, narrative license, and polyphony, as in “The Fog Horn,” is representative of that pursuit. The facing pages of Figure 7 distinguish the utterance, the inner voice, and the flashback. These techniques to depict characters’ inner feelings have become the chief distinction of *shōjo manga*.

The latter part of the story concerns grown-up Harold, who returns to the lake with his new wife, Margaret. At the lakeshore, he comes across the discovery of a small body:

I stared at the gray sack in his arms. “Open it,” I said. I don’t know why I said it. The wind was louder.

He fumbled with the sack.

“Hurry, man, open it!” I cried.

“I better not do that,” he said. Then perhaps he saw the way my face must have looked. “She was such a *little* girl—”

He opened it only part way. That was enough.

The beach was deserted. There was only the sky and the wind and the water and the autumn coming on lonely. I looked down at her there.

I said something over and over. A name. The life guard looked at me. "Where did you find her?" I asked.

"Down the beach, that way, in the shallow water. It's a long, long time for her, isn't it?"

I shook my head.

"Yes, it is. Oh God, yes it is." (Bradbury 1996:125)

In her adaptation, Hagio repeats Harold's memory of Tally and of the scene: "Tally! Come back, Tally!" (Fig.8 (Hagio 1997:104-105)). With her lively images and Harold's monologue, readers are returned to the past with him.

This scene follows the ending of the story:

I thought: people grow. I have grown. But she has not changed. She is still small. She is still young. Death does not permit growth or change. She still has golden hair. She will be forever young and I will love her forever, oh God, I will love her forever. (Bradbury 1996:125-126)

Then Harold finds a half-built sand castle with small footprints leading from the lake and returning to it.

Then— I knew.

"I'll help you finish it," I said.

I did. I built the rest of it up very slowly, then I arose and turned away and walked off, so as not to watch it crumble in the waves, as all things crumble.

I walked back up the beach to where a strange woman named Margaret was waiting for me, smiling.... (Bradbury 1996:126)

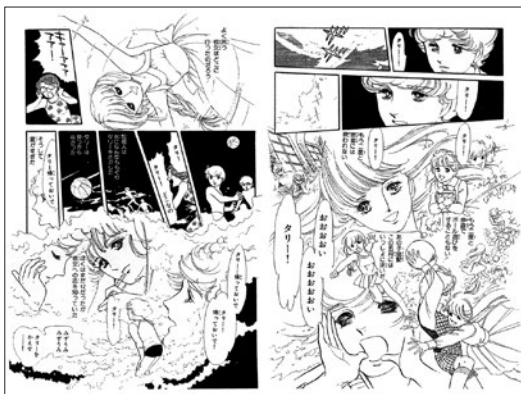


Fig. 7 Multilayered words.



Fig. 8 Repetition of the memory.

Hagio's adaptation emphasizes Harold's feelings and his love for Tally. She rearranges the episodes, and in her version, Harold first finds the half-built sand castle (Fig.9 (Hagio 1997:106-107)). Then he confirms his love for Tally ("She will be forever young and I will love her forever, oh God, I will love her forever."), completing the unfinished sand castle.

The ending is more horrifying than the original. Harold repeats his love for Tally ("I will love her forever.") in the image of Tally at the lakeside, and his glance at Margaret is cold (Fig.10 (Hagio 1997:108)). The artist adds a sentence after the last line: "A woman I have never seen before...." Hagio's version throws Harold, who is caught in the past, into relief. The black and white wave of the lake serves as an enclosure that locks him in the past memory. Here again, the manga technique to picture emotions and feelings is effective and impressive.³



Fig. 9 Rearrangement of the episodes.



Fig. 10 Hagio's ending.

IV. *Shōjo manga* as girl's mouthpiece

Hagio's works show not only the elaborate techniques of *shōjo manga* to depict psychological states but also how dark fantasies and science fictions harmonize with a genre for girls. The comparison of Hagio's adaptation of "Come into My Cellar" (1962) with the Dave Gibbons' (1949-) graphic novel version (1992) clarifies another characteristic of *shōjo manga*: the story always takes the girl's side.

"Come into My Cellar" is a story about Hugh, a happy father. His son Tom is delighted to receive a special delivery package, an order of mushroom seeds, which has been fascinating all the children in the neighborhood. Hugh's friend Roger becomes suspicious, believing the mushroom is a part of an invasion

³ This ending was modified in its TV episode of The Ray Bradbury Theater broadcast in 1989. In the TV version, Douglas (Harold) leaves the beach and goes back to his wife, after he completed the sand castle.

from outer space. After Roger mysteriously goes missing, Hugh finds mushrooms in his refrigerator and knows that Tom has eaten them. In the last scene, Hugh descends to the cellar where Tom grows the mushrooms and waits for him, talking to himself: “Should say goodbye to Cynthia. But why think that? Why think that at all? There’s no reason. None. (Bradbury 1966:144)”

Whereas Gibbons’ version (Fig.11 (Bradbury 2003:102)) is faithful to the original, the protagonist is a girl in Hagio’s adaptation (Fig.12 (Hagio 1997:111)). Manny takes the part of Hugh, and Tom turns out to be Manny’s younger twin brother. Roger is Manny’s boyfriend. With this modification, Hagio gives her female readers a girl protagonist energetically engaged in a plot and a chain of reasoning. Little wonder that Hagio chose “the Screaming Woman,” a story in which a girl solves the mystery of a screaming woman underground.

To conclude this analysis, I take up “Jack-in-the-Box” (1947). It is originally about a boy, Edwin, whose mother keeps him indoors in isolation. She tells him he will die if he goes outside and convinces him that their vast, secluded mansion is the entire universe. After his mother’s sudden death, Edwin leaves the house. Although afraid of dying, he is entranced by everything he sees and runs down the street shouting, “I’m dead, I’m dead, I’m glad I’m dead, I’m dead, I’m dead, I’m glad I’m dead, I’m dead, I’m dead, it’s *good* to be dead! (Bradbury 1996: 213)”

As in “Come into My Cellar,” Hagio transforms Edwin into a girl, Donna (Fig.13 (Hagio 1997:172-173)). But this instance could be controversial, for it might be interpreted as a recrimination against the controlling mother. The story opens with the mother’s scolding turning into a yell: “Why don’t you do as I say? Finish your dish quickly!” This is different from the original, where the mother “began to talk, slowly and with great caution, then more rapidly, and then angrily, and then almost spitting at him (Bradbury 1996:193)” after they ate silently. The mother in Hagio’s version represents authority and enforces rules upon Donna. The free-spirited girl is weighed down by such control.



Fig. 11 Dave Gibbons (1992).



Fig. 12 Moto Hagio (1978)

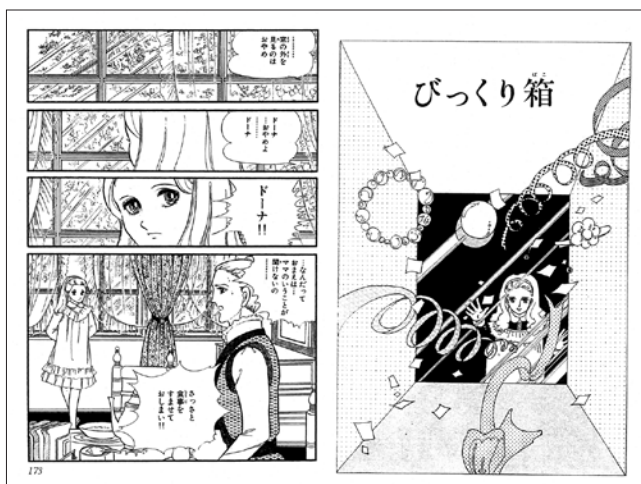


Fig. 13 Donna in “Jack-in-the-Box”.

Shōjo manga in the 1970s often described mother-daughter conflicts during puberty⁴. It was not merely a specific conflict that involved a parent’s desire to control and a child’s struggle for emotional distance. Japanese daughters at that time couldn’t always view their mothers’ lives in a positive light. Eighty years have passed since Alice Mabel Bacon wrote “From the earliest youth until she reaches maturity, she (Japanese maiden) is constantly taught that obedience and loyalty are the supreme virtues” (Bacon 1891:84). Nonetheless, many girls felt unfairly treated by their mothers, especially compared with their brothers. The pressure to marry and the social expectations of obedience to males (fathers, husbands) still existed, and housewives seemed to support these traditional values.

In this context, mistrust of the mother, the fear or loathing of maturation, and abhorrence toward the controlling mother became important themes of *shōjo manga*. As Linda Hutcheon points out, “the context of reception [...] is just as important as the context of creation when it comes to adapting, (Hutcheon 2013:149)” and Hagio became a standard-bearer by depicting these issues. Donna’s running down the street in “Jack-in-the-Box” could represent the desire to escape male-dominated Japanese society and disavowal of the mother who supports it. We hear the cries of all girls when Donna shouts, “I’m dead, I’m dead, I’m glad I’m dead!” Donna gives voice to repressed girls, and the story brings them a catharsis.⁵

4 This issue was taken up in the feature articles of *Eureka* 559 (December 2008), which included a colloquy of Hagio Moto with a psychiatrist, Saitō Tamaki. Fujimoto Yukari also argues this mother-daughter conflict in *shōjo manga*. (Fujimoto 2008)

5 Hagio’s ending of “The Lake” could be similarly interpreted. The contrast between the girl (Tally) and the woman (Margaret) in the last page and the Harold’s choice may be related to this fear or hatred for maturation.

V. Conclusion

Moto Hagio's adaptation of Bradbury's works highlights several distinctive features of Japanese *shōjo manga*,

- The centering of emotions and feelings, such as love, loneliness, and life.
- The importance of poetic imagery.
- Catering to female readers by depicting them as protagonists.

Shōjo manga's forte has always been to present issues that girls relate to, and Hagio's adaptations reveal problems that Japanese girls faced in the 1970s. *Shōjo manga* evolved to convey earnest messages in genre that mirrors Japanese culture and society.

Hagio's adaptation of other short stories is suggestive as well, and it will be worthwhile for later scholarship to deal with vampires ("Homecoming") and outer space ("R is for Rocket" and "The Rocket Man"). It would not be excessive to say Hagio's interpretations of Bradbury presaged her own 1970s masterpieces, including *The Poe Clan* (1972-1976) and *They Were Eleven* (1975), as a pioneer in *shōjo manga*.

Bibliography

- Bacon, Alice Mabel 1891 *Japanese Girls and Women*, Cambridge: Riverside Press.
- Bradbury, Ray 1966 *S is for Space*, New York: Doubleday.
- 1990 *Bradbury Classic Stories 1: From the Golden Apples of the Sun and R is for Rocket*, New York: Spectra (Reissue).
- 1996 *The October Country*, New York: Ballantine Books.
- 2003 *The Best of Ray Bradbury: the Graphic Novel*, New York: Ibooks.
- Bradbury, Ray and Aggelis, Steven L. 2004 *Conversations with Ray Bradbury*, Jackson: University Press of Mississippi.
- Eller, Jonathan R. 2014 *Ray Bradbury Unbound*, Champaign: University of Illinois Press.
- Fujimoto, Yukari 2008 *Watashi no Ibasho ha Dokoni Aruno?: Shōjo Manga ga Utsusu Kokoro no Katachi* (Where is My Place? : Feelings and Emotions Reflected in *Shōjo Manga*), Tokyo: Asahi Shimbun Shuppan.
- 2000 *Shōjo Manga Damashii : Ima wo Utsusu Shōjo Manga Kanzen Gaido & Intabyū Shū* (The Soul of *Shōjo Manga*: A perfect Guide to *Shōjo Manga* as the Reflection of the Times & Interviews), Tokyo: Hakusensha.
- Hagio, Moto 1997 *U ha Uchūsen no U* (R is for Rocket), Tokyo: Shōgakukan Bunko.
- 2012 *Kotoba no Anata Manga no Watashi, Hagio Moto Taidanshū 1980 nendai* (Dialogues with Hagio Moto in 1980s), Tokyo: Kawade Shobō Shinsha.
- Hutcheon, Linda and O'Flynn, Siobhan 2013 *A Theory of Adaptation*, New York: Routledge.

- Natsume, Fusanosuke (trans. Ueki, Kaori) 2003 "Japanese Manga: Its Expression and Popularity," *Asian/Pacific Book Development* (133), pp.3-5.
- Nichols, Phil 2006 *Bradburymedia: Reviewing the film, television, radio and theatre work of the leading American writer*, <http://home.wlv.ac.uk/~in5379/films/beast/beast.htm>, viewed on 20/09/2014.
- Piddock, Charles 2009 *Ray Bradbury: Legendary Fantasy Writer*, New York: Gareth Stevens Publishing.
- Saitō, Tamaki et al. 2008 "Tokushū: Haha to Musume no Monogatari: Haha/Musume toiu Noroi (Feature Articles: Mother-Daughter Stories: A Curse on Mother/Daughter)," *Eureka* 559, pp.49-213.
- Yomota, Inuhiko 1999 *Manga Genron* (The Principles of Manga), Tokyo: Chikuma Shobō.
- The Ray Bradbury Theater: The Complete Series (DVD)* 2005, La Crosse: Echo Bridge Home Entertainment.

Sources of Figures

- Figs. 1 and 11; Bradbury, Ray 2003 *The Best of Ray Bradbury: the Graphic Novel*, New York: Ibooks.
- Figs. 2-10, 12 and 13; Hagio, Moto 1997 *U ha Uchūsen no U* (R is for Rocket), Tokyo: Shōgakukan Bunko.

複合的な現象としての情報社会（論） —「深さ」の情報社会（論）再構築に向けて—

Information Society as Multidimensional Phenomenon Emerging from the Depth: Ontological and Critical Views on Information Society in the 21th Century

仲田 誠
NAKADA Makoto

Abstract

In this essay on the possibility of (re) establishment of a new type of studies of information society based on ontological and critical views on this world, the author will try to focus on the following 3 points in order to make the readers be able to have images of this new viewpoint of information society and how our life in this society would be. (1) What are the reasons of the failure (at least in Japan) of emergence of information society discussed and promised to come by researchers and critics such as Toffler, Yoneji Masuda and others? In spite of the diffusion of ICTs and devices and media for CMC, we still have difficulty solving a lot of social, political and economic problems in our every days. We experience the 'strange' situations with TFP(Total Factor Productivity) not associated with diffusion and development of ICTs, CMC and devices of Electronic Commerce in our information society. (2) How and in what ways do the different matters related to different aspects of this world, (i.e. things or *das Seiende* to be seen from ontic perspectives and the matters to be seen from ontological and Being-related perspectives) come together or go in the different directions in the information society of today? For example, the emergence of new types of studies on 'deep learning' or 'connectionism-related artificial neural networks' require multi-disciplinary perspectives and presuppositions with which we might be able to view such phenomena as the 'intermingling' of human experiences and functions of artificial neural networks. (3) How and in what aspects do the '*Seken*-related views', i.e. the set of the traditional, ontological, critical and non-rationalized views on this world and life in this world which still remain in Japanese minds, influence the direction of development of informatization in Japan? It will be worth discussing that such phenomena and matters: the Japanese views on robots are not separated from these *Seken*-related views.

Key words : Information society; Neural network; Machine learning; Ontology; Heidegger; *Seken*-destiny-view

キーワード：情報社会論；ニューラルネット；機械学習；存在論；ハイデガー；世間・運命観

Ⅰ. 表層の情報社会（論）と深層の情報社会（論）

筆者が拙著『情報社会の病理学』等で述べたように、情報社会論はそれが増田米二やトフラーらが語ったような情報通信技術の普及というただその一点だけでバラ色の将来の到来や第三の波と称される文明の全面的な変化を予期するものであったならば、それはその出発点からすでに破綻を約束されたものであった。拙著『情報社会の病理学』が出版されたのは1993年（平成15年）のことだが、実際筆者が予測したようにわれわれの（経済面での）生活は多少の高揚した気分やミニバブルでの浮かれ騒ぎのようなものはあっても、結果としてこの20年間底辺に沈んだままのものであった。

このことを具体的な形で示すのが近年公開された各種の統計資料である。総務省発行の情報通信白書は基本的には情報社会の進展を報告するための資料であるが、そこで公表されている資料をすこしだけ注意して読み取れば、たぶんこの白書を執筆していた人たちが予想・期待している情報化の方向とは別の流れがそこからは読み取れる。単刀直入に言えば、それはつまり情報化による社会変化の（予想外の）乏しさ・停滞ないし（情報化が進む状況下での）社会・経済の停滞である。

次の図表は平成23年度・24年度の情報通信白書の中で公開されたもので、「情報通信サービス」や「情報資本」のGDP成長率や労働生産性の向上率への寄与度に関するものである。

情報通信白書の中では、「我が国の経済成長率に対する情報通信資本ストックの寄与をみると、平成2年から7年の間には、経済成長率1.41%に対して寄与度0.35%、平成7年から12年の間には、同0.96%に対して寄与度0.89%、平成12年から17年の間には、同1.30%に対して寄与度0.42%、平成17年から21年の間には、同-0.82%に対して寄与度0.38%と、一貫してプラスに寄与している」と「情報通信資本ストックの深化」と「経済成長」の間に一貫した対応性があるかのような解釈が示されている。しかし、実際にはわれわれは平成2年以降20年間も経済が停滞していることも知っており、はたしてこうした見方（情報通信白書に示されているような）が正しいものなのか確信がもてないのである。むしろ、「情報通信資本サービス」は「労働」条件の悪化、実質GDP成長率の停滞等というという困難な状況を一向に打破する力がないというように別の解釈をほどこすことができるようにも思えるのである（表1-1）。

またこのことは筆者の見方が正しければ労働生産性の向上・停滞に関してもあてはまるものである（表1-2）。

すでに表の注で一部紹介したが、TFP（全要素生産性）に関しては平成24年度総務省通信白書によると以下のような説明がされている。「TFP（全要素生産性）は、一般に技術革新、経営ノウハウ等の知識ストック、企業組織改革、産業構造変化等の要因による生産性向上が含まれると理解されており、情報通信のイノベーションによる生産性向上も、主としてこの全要素生産性の上昇として計測され则认为られている¹」。

1 平成24年度情報通信白書による。平成24年度白書では、TFPの寄与をICTセクターと非ICTセクターに分け、ICTの効果がTFPの寄与度を与える影響について分析を行っている。

表 1-1 実質GDP成長率に対する情報通信資本ストックの寄与

(年) (%)	平成 2 - 7	平成 7 - 12	平成12-17	平成17-21
情報通信資本サービス	0.35	0.89	0.42	0.38
一般資本サービス	0.56	0.7	0.61	0.32
労働	-0.4	-0.33	-0.34	-0.65
その他	0.89	-0.3	0.61	-0.87
実質GDP成長率	1.41	0.96	1.3	-0.82

1) 出典：総務省「ICTの経済分析に関する調査」(平成23年)(平成23年度版情報通信白書による)
(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/link/link03.html>)

表 1-2 労働生産性成長に対する情報通信資本ストックの寄与

(年) (%)	平成 2 - 7	平成 7 - 12	平成12-17	平成17-21
情報通信資本サービス	0.25	0.27	0.18	0.12
一般資本サービス	1.87	1.39	1.09	1.05
TFP成長率	-0.09	0.19	1.11	-2.86
労働生産性成長率	2.03	1.84	2.38	-1.69

1) 出典：総務省「ICTの経済分析に関する調査」(平成23年)(平成23年度版情報通信白書による)

2) TFP(全要素生産性)に関しては平成24年度総務省通信白書によると以下のような説明がされている。
「TFP(全要素生産性)は、一般に技術革新、経営ノウハウ等の知識ストック、企業組織改革、産業構造変化等の要因による生産性向上が含まれると理解されており、情報通信のイノベーションによる生産性向上も、主としてこの全要素生産性の上昇として計測され则认为られている。」(平成24年度白書では、TFPの寄与をICTセクターと非ICTセクターに分け、ICTの効果がTFPの寄与度に与える影響について分析を行っている。)(<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/link/link03.html>)

このTFPないし全要素生産性に関する指標に関して平成24年度情報通信白書では以下のような解説がなされている。「まず、成長会計の手法に基づき、GDP成長率に対するTFPと情報資本の寄与度をみると、今回分析した各国ともにTFPと情報資本が経済成長に寄与していることが確認できる。また、TFP成長率に対するICT要因の寄与度をみても、ほとんどの期間でプラスの寄与となっており、生産性(TFP)の向上に対してもICTが貢献している²⁾」。

しかし繰り返すがそれではなぜ日本のGDPは伸びないのか。

この点に関して日本の特殊事情が関わっており、日本における情報化そのものの停滞とかそのようなことが経済の成長と労働生産性の向上を妨げる要因となっているのだとみるむきもある。

日本の「特殊事情」(たとえば「世間・運命論」が人々の価値観を奥深いところから左右しているといった)について目を向けて考察することはあとでもとりあげるように別の意味では必要

2 平成24年度情報通信白書による。

だが、こと情報化の進展に関して言えば日本は米国等と比較して立ち遅れているわけではない。それはたとえば次の指標をみれば明らかなことである。

経済産業省の平成17年度「電子商取引に関する市場調査」によると、2005年（平成17年）の広義BtoB-EC市場は、日本224兆円、米国189兆円であり、広義EC化率は、日本20.6%、米国11.9%となっている。また、狭義BtoB-EC市場は、日本140兆円、米国92兆円であり、狭義EC化率は、日本12.9%、米国5.7%という数字になっている³。

このような数字が意味することは一目瞭然である。驚くべきことに金額の面でも、電子商取引の面でも日本は米国をはるかに凌駕しているのである。

もちろん情報化に関してはさまざまな指標があり、何を見るかで解釈が違ってくるわけで、たとえばいわゆるBtoCの数字では日本は米国に遅れをとっているわけだが、同時にBtoBの指標を抜きにした情報化に関する議論もありえない。またそもそもBtoC-EC市場規模はBtoB-EC市場規模に比べればはるかに小規模である。経済産業省の平成17年度「電子商取引に関する市場調査」によれば、2005年の狭義BtoC-EC市場は、日本3.5兆円、米国15.9兆円であり、狭義EC化率は日本1.2%、米国2.4%である（BtoC-EC市場規模については狭義ECのみを推計）。

これらの数字は2011年では以下のように変化する（日本の場合）。狭義BtoB-EC市場規模は、171兆4,070億円、狭義EC化率は16.1%。BtoC-EC市場規模は、8兆4,590億円、EC化率は、2.83%。2005年と2011年とを比較すると、BtoB-EC市場規模は122%増、BtoC-EC市場規模は240%増と大幅な伸びであるが、しかしにもかかわらずこの間日本のGDPはほとんど増加していない。

こうした状況は日本以外のいわゆる先進国でも大きく変わるわけではない。そのことを示すのが以下の表の数値である⁴。「GDP成長率の寄与度分解」、「TFP（全要素生産性）成長率の寄与度分解」に関する表の数値を眺めてみると、情報化やICTの普及がもたらす効果・影響力はそれだけで単独でとらえることができるものではないことが理解される。

日本の場合、平成17年から同21年度にかけての「労働生産性成長に対する情報通信資本ストックの寄与」に関する数字でみると、TFP成長率は-2.86%という数字で非常に奇妙なことが起きていることがわかる。技術革新や知識の経営ノウハウ等の知識ストック、企業組織改革、産業構造変化、情報通信のイノベーションによる生産性向上等という要因がむしろ労働生産性の向上を妨げる働きをしているという解釈すらできるのである。平成17年から同21年度にかけての日本の労働生産性成長は全体として-1.69%という数字であるので、「全要素生産性」向上という要因が労働生産性成長をむしろ妨げるものとなっているかのような印象すら受けるのである。あるいはそこまでは言えなくても労働生産性それ自体多様な要因が関わるmultidimensionalな事象であることがわかる。少なくとも情報化が進んでも労働生産性がそのまま伸びるという単純なものはなしではないのである。

3 狭義のEC取引（金額）は「インターネット経由のEDI、IP-VPN、モバイルインターネットによる受発注」のことで、広義のEC取引（金額）はVAN、専門線経由のEDIによる受発注のこと＝平成17年度「電子商取引に関する市場調査」（経済産業省）による。

4 数字はスペースの関係で一部しか紹介することができなかった。

ただし、「全要素生産性」そのものがたんなる技術革新、組織改革等の成果を反映するものではないらしいという点も重要である。たとえば2009年の日本の全要素生産性の上昇率はマイナス2.3%であるが、2010年になるとプラス3.9%という数字にはねあがっている。これは2008年のいわゆるリーマンショックによる経済の落ち込みとその後の回復という経済社会状況、それに伴う需要の変化を反映しているように思われる。ちなみに2009年の日本の経済成長率はマイナス2.3%、2010年はプラス3.9%という数字になっている。米国の数字を見てみると2008年、2009年、2010年の全要素生産性上昇率はそれぞれ0.0%、プラス1.1%、プラス2.1%、経済成長率はマイナス0.4%、マイナス3.2%、プラス2.4%となっており、情報化が進んでもこのような景気の大きな変動が避けられないことが明らかである⁵。ともかく確かなことは、情報化が進んでもわれわれは（アメリカに住む人だけでなく、われわれも）サブプライム問題による経済の破綻やリーマンショックによる経済・社会の痛手をまったく見通すことができなかったということである。

また日本以外の先進国のデータをみても情報通信白書でいわれているような情報化やそれと連動する構造改革、組織改革などがそのまま経済成長や生産性向上につながるのかはよくわからないのである。むしろ、情報化は国の経済や生産性の方向性をきめる部分的要因でしかないということが数字から見て取れるようにも思える。あるいは情報化のみに拘泥することはこのような全体としての経済成長や生産性向上の動きにむしろ逆向きにアクセルをかけるものではないかとも思えるのである。

これに関して米国の2015年から2017年にかけてのGDP成長率を見てみると、GDP成長率そのものは2.57%であるが、これには「労働時間」という要因が寄与する割合が高く、0.90%という数字になっている。つまり働く場や働く時間が増えるだけでGDPは成長するのである。米国は日本と違って人口が増加しているが、それだけでもGDPは増えるのである。

しかしこのことはすでに繰り返しさまざまなかたちで論じられていたことではある。たとえばGoldingの議論である。情報社会はテクノロジーの力によって企業や産業システムの生産性が高まるのが情報社会だという一般的通念ないし仮説を批判したのがGoldingである。Goldingによれば米国の事例をとりあげた場合、1970年代以降の生産性の伸びのほとんどは、予測に反して情報通信技術を含む新技術の導入によるものではない⁶。それはほとんど「労働力と資本の投入の増加」によるものである。ITに対する多大な投資（1970年で企業の設備投資の7%、1996年で40%＝アメリカでの数字）にもかかわらず、生産性の伸びは限定的なものにとどまっている。

Goldingは、「ITにできることは、労働にかかるコストを削減したり、生産拠点を移動（人件費が安い所へ）させたりするという程度のことだけである」と語るが（Golding 1998）、このことが極端な憶測でもなく、また過去の事例にはあてはまっても情報化の新たな段階に達した時点のはなしとしてはあてはまらないものではないことは、2015年から2017年にかけての米国の「GDP成長率の寄与度」に関する表の数字を計算してみればすぐにわかることではある。この時期の米国のGDPは2.57%の成長率を記録したが、寄与率でみると、「労働時間」が0.90%、「一般資本（の

5 数字は「日本の生産性の動向2013年版」（日本生産性本部）による。

6 あるいは筆者なり＝仲田の解釈を付け加えれば、技術の導入だけを単独で取り上げて論じられるものではない。

投入)」が0.68%になる。この数字を合計すると1.58%になることがわかるが、この数字は2.57%の約61.5%に相当する。つまり、Goldingの解釈がほぼそのままこの時期にもあてはまるのである。たくさん働いて（また働く場や必要性があることが必要だが）資本を大量に投入すればGDPはあがるという単純な事実がここにはある。

以下の表の数値は平成24年度総務省情報通信白書によるものである⁷。

表1-3 GDP成長率の寄与度分解（日本）

(年) \ (%)	GDP成長率	労働時間	労働の質	情報資本	一般資本	TFP成長率
93-95	0.82	-0.54	0.27	0.22	1.28	-0.41
96-98	1.24	-0.47	0.45	0.48	1.03	-0.25
99-01	0.64	-0.72	0.47	0.32	0.58	-0.01
02-04	1.44	-0.48	0.52	0.23	0.68	0.49
05-06	1.89	-0.15	0.35	0.15	0.88	0.66

表1-4 TFP（全要素生産性）成長率の寄与度分解（日本）

(年) \ (%)	TFP成長率	ICT要因	非ICT要因
93-95	-0.41	0.25	-0.66
96-98	-0.25	0.35	-0.6
99-01	-0.01	0.11	-0.13
02-04	0.49	0.47	0.02
05-06	0.66	0.29	0.37

表1-5 GDP成長率の寄与度分解（米国）

(年) \ (%)	GDP成長率	労働時間	労働の質	情報資本	一般資本	TFP成長率
93-95	2.68	1.36	0.23	0.63	0.84	-0.37
96-98	3.88	1.36	0.37	1.13	1.01	0.01
99-01	3.19	0.59	-0.01	1.02	0.84	0.76
02-04	2.56	-0.05	0.32	0.38	0.52	1.39
05-06	2.57	0.9	0.18	0.45	0.68	0.36

7 「TFP（全要素生産性）成長率の寄与度分解（米国）」の表は省略した。

II. 情報化をめぐる神話・世界の実存的存在論的意味

情報化が進み情報通信装置・メディア、ICTの利用が高まればバラ色の社会が実現する、個人の自己実現に向けての可能性が開かれる（1990年代頃に提唱された議論）というのは、われわれの生きている世界がどのような世界であるのか、そこに生きる人々はどのような価値観や心情をもって生活しているのかを考えてみればあまりにも単純なものであったといわざるをえない。

たとえば「人生の質」（Quality of Life）というような指標を提示した場合、情報社会（論）がそもそもその出発点として「知識」（しかも科学的、数理科学的、社会工学的な）偏重の傾向を色濃くもっていたことを考えれば、かりにそのような情報社会が出現したところでそこでの生き方は単色のなものにならざるをえないし、また生活の中から多くのものが抜け落ちる社会にならざるをえないことは自明である。

情報社会（論）で抜け落ちてきたものについて思いを巡らせる上で役に立つのがたとえば、心理学で近年話題になっている「ハーディネス」Hardinessを巡る議論である。「ハーディネス」とはわかりやすく言えば、人生を前向きに生きる姿勢のことであり、もともと Kobasaが提唱した議論であるとされる（Kobasa 1979; 1982）。

Kobasa（1979）によれば、ハーディネスは企業の経営者や重役などストレス下でも健康を保つことができるタイプの人たちに共通する性格特性のことで、これは「コミットメント」（commitment）、「コントロール」（control）、「チャレンジ」（challenge）の3要素からなるとされる。「コミットメント」とは、「人生の様々な状況に対して自分を十分に関与させる傾向」、「コントロール」とは「個人が出来事の推移に関してある一定の範囲で影響を及ぼすことができると信じ、かつそのように行動する傾向」、「チャレンジ」とは「毎日の生活において安定性よりむしろ変化が人生の標準であるという信じること」といった性格特性・行動傾向のことを言う（井上・相模 2005による）。

これに関して興味深い知見を示しているのが井上美美・相模健人の研究である（井上・相模 2005）。これは大学生を対象にした調査の結果明らかになった点であるが、「自己開示」（父親、母親、最も親しい同性の友人、最も親しい異性の友人、一般的な友人に対する自己開示）のありかたが「ハーディネス」と関連するというきわめて興味深い結果がそこでは得られている。

具体的にいうと、「目標・生きがい」の自己開示得点高群の方が、得点低群・中群よりもハーディネスの特性が有意に高いことが明らかとなっている。「目標・生きがい」を他者に開示するとは、「興味を持って勉強していること」、「興味を持っている業種や職種」、「現在持っている目標」、「趣味としていること」、「生きがいや充実感に関すること」を語ることだが、こうした内容を語ること・開示することは「人を強くする⁸」。

同様に、「異性関係における悩み事」、「好きな異性に関する気持ち」、「関心ある異性のうわさ話」、「過去の恋愛経験」、「服装の趣味」、「友人関係における悩み事」、「友人関係に求めること」、「嫉妬した経験」などの項目、すなわち「私的人間関係」を母親に語ることは「人を強くす

8 「強い」からこうした内容を語るということはあまり考えられないだろう。

る」。つまり、母親に向けて「私的人間関係」に関する項目を語ることとハーディネスの「コントロール」の間には有意な関係が認められ、より多く語る学生は「自分にはちゃんとできる」という思いを持つ傾向があるのである。

この点について筆者なりに解釈すると、弱いから内面を開示するのではなく、開示するから人は強くなれるということである。これはきわめて興味深い知見である⁹。

内面のありかたや内面の世界の共有の如何が、また自己を語り・確認する場のありかたが人生のありかたのさまざまな面と関連するということは筆者自身の調査でも明らかになっており、以下その点を簡潔に紹介したい¹⁰。

2003年に筑波大学と高千穂大学の学生425名を対象にして行った調査（2003S調査）では、「自分にとって大事な場所はどこか」という質問を調査対象者にたずねているが、大切な場所として「子供のころを過ごした学校」（この項目は「子供のころの秘密の隠れ場」、「生まれ育った家」と関連性をもつ）を選ぶ傾向は人生のさまざまな場面での選択・態度・生き方のありかたと関連している。いわば人生の原点としてどこを選ぶか（あるいは記憶しているか）は人生の生き方に関する指向性とさまざまなかたちで関係しているということである。

具体的には、原点としての「子供のころを過ごした学校」への指向性は、「自分の人生にとって何が大切か」という質問に対する多様な答えのありかたにつながり、これは「カフェ・繁華街」、「映画・ネットの中の場所」への指向性がごく限られた選択肢への指向性とはしか関連しないという事実と比べるときわめて興味深い知見が得られていると言える。これは筆者の考えでは、原点としての場所が明確であるということが、人生への広くて深い関心へつながるということを示唆しているものである。原点としての場所が明確である場合、人生は多様な可能性をもった場として展開し、それが「自分の人生にとって大切なもの・問題」として、「家族や親しい友人たちとの心の交流」、「自分に納得の行くような仕事や勉強の成果を得ること」、「社会的モラルや常識を大切に、人間性をみがくこと」、「政治や社会の問題に関心をもつこと」、「環境にやさしい生活すること」、「心のよりどころになるものを得ること」など多様な項目を選ぶ可能性につながる。しかし一方で、「カフェ・繁華街」、「映画・ネットの中の場所」への指向性は人生の多様な関心につながらないという調査結果も出ている。あるいはもともと関心が閉ざされているからそうした場所を原点として選ぶ傾向につながるのではないかという解釈もなりたちうる。

同様に、「大切なことを教えてもらった相手」として「近所のおじさんやおばさん」、「好きなタレントや歌手」、「マンガやアニメの登場人物」、「テレビドラマや映画の登場人物」、「学校の先生」、「学校や職場で知りあった友人・先輩」、「父親・母親」という多様な相手を名指す傾向が「子供のころを過ごした学校」への指向性と関連する。一方、「カフェ・繁華街」への指向性は唯一「インターネットで知りあった友人」との間でのみ関連性をもつ。ここでも人生の可能性の広がり

9 ただし井上・相模の調査からは、親しい同性の友人に「私的人間関係」を開示することと「チャレンジ」の項目の得点の低さが有意に相関するという結果も得られており、自己を語ることは多様な側面をもつ行為でもあるようだ。

10 すでに他の場所で紹介したデータを今回改めて分析しなおしてみた。

狭さへの対極性が鮮明な傾向として現れているのである¹¹。

人生やこの世界が多様な可能性をもっているということと情報化の進展がどう関係するのか、この点はぜひ考察を進めるべき問題であるわけだが、この点について考えるために筆者自身が行った別の調査（2002G調査＝2002年の8月に筆者を代表とする研究グループ、「情報社会病理学研究グループ」が実施した日本の22歳～44歳のインターネットユーザー569人を対象とする意識調査）の分析結果、それに基づく解釈の内容を紹介したい¹²。

人生やこの世界は本来多様な可能性をもつものであるのに、情報社会（論）、とくに技術還元論的、あるいは知識偏重型情報社会（論）は、さらにそれを無批判的に受容することは人生や世界の可能性を狭く閉ざす。この節ではこのような考え方につながる諸点を論じてきたが、そのことをさらに裏付けするのがこの調査の知見である。この調査のデータを分析したところ以下のことがわかった。1）「コンピュータ・リテラシー¹³」が政治関心度、政治家への評価のありかたなどどう関連しているかを相関係数の形で調べてみると、これらの項目間の関連性（統計的に有意な）はほぼゼロである。2）「（週あたりの）インターネット利用時間」も同様に「政治関心度」との相関がほぼゼロである（有意な相関がない、相関係数がほぼゼロである）。

「（週あたりの）インターネット利用時間」および「コンピュータ・リテラシー」は情報化の進展を考える上での重要な指標だが、これが政治関心度とまったく（あるいはほとんどまったく）関連性をもたないというのはいろいろな意味で考えさせられる結果ではある。

Ⅲ. 情報社会における存在論的なものと存在的なものあるいは実体と存在の混在

本節では「存在論」ないし「実存・存在論」（的意味）ということばをいわばキーワードとして、情報社会（論）にどのように「深さ」を取り戻すかその点について考えてみたい。ハイデガーの議論に忠実に従えば、「存在」と「存在者」、「存在的」と「存在論的」の区別について理解することががまずなによりも肝要な点だが、同時に情報化時代の問題に即して言えばこの区分けの意味をあらためて問い直す必要が出てきているようにも思えるのである。

ハイデガー自身のことばでいえば、実体Entity (das Seiende) に関する問いは「存在的」onticであり、在ることBeing (das Sein) の意味に関する問いは「存在論的」ontologicalということになる。存在について問うのに「存在的」な問い、つまり、事物を問うようなかたちでの問いでは不可能だということになる。ハイデガーによれば、科学的探求というものもまさに「存在的」な問いに属するものなのである¹⁴。

11 この調査は2003年に実施されたものだが、それから10年たって人生のありようがまったく変わっているということはなかなか想定できないことであろう。

12 この結果の一部は海外の学会などですでに発表済みだが、今回この論文の主旨に合わせるかたちで再度データを分析しなおした。

13 これはここでは「自分でホームページを作れるか」などというコンピュータ利用上の基本的キャパシティのこと。2002G調査では調査対象者を調査の質問内容に基づいてリテラシー低レベル（レベル1）から高レベル（リテラシー4）までの4段階に分類した。

14 この説明は以下の文献による。Michael Gelven 1970 *A Commentary on Heidegger's "Being and Time"*, Harper & Row; マイケル・ゲルヴェン（長谷川西涯訳）2000『ハイデッガー『存在と時間』註解』ちくま学芸文庫。1970年版の原書は入手できなかったため、以下の改訂版を参照した。Michael Gelven 1989 *A Commentary on Heidegger's "Being and Time"* (revised edition), Dekalb, Illinois: Northern Illinois Univ. Press.

このあたりは教科書的な説明であるが、これを「実存」、「情報化時代の実存」ということば、論点に引き寄せて説明するならば、知識偏重型あるいは還元論的な情報社会（論）は、「存在的」な問いとは無縁の議論だということになる。

ドイツにおける存在論的情報倫理学の第一人者Rafael Capurroはこの点について以下のように語っている。「従来の存在論は（デカルトのように）、現存在を不適切な「カテゴリー」を通して理解していた。人間のみが、存在している（existiert）のである、そのことで（即ち）人間とは違う存在者に対して、また自己に対して、存在理解の形式を通して関わっている。」（Capurro 1988）。

ここで説明を補えば、存在者に関する問いはcategoriesを介して行われてきたが、存在あるいは現存在に関してはexistentialsが必要になるということである。

しかし厄介なことには近年の人工的ニューラルネットワークやAIでは「知識とは何か」とかあるいは「還元論とは何か」という問いそれ自体がブラックボックス化されるというか¹⁵、ネットワークの構造の中に分散して配置されてしまうという状況が生じているのである。いうならば「存在」とか「存在者」とかいう理念自体も¹⁶ネットワークの構造の中に分散配置されてしまう。そこでは概念や命題はそれ自体としては存在しなくなるわけで、これは存在論的にも存在的にも厄介な事態である。ハイデガーの議論そのものも命題で構成されているのである。

しかしこれはもちろんハイデガー的な視点が今の情報社会においては意味を失いつつあるなどという単純な結論につながるわけでもない。

人工的ニューラルネットワークやAIをもし存在論的に論じようとするならば、それがそもそもさまざまな仮説・前提に基づいているということを忘れてはならない。

人間の脳を人工的な事物の配置で再現できるというのはあくまでも仮説であり、脳の細胞相互がコネクショニズムのモデルのニューラルネットで前提とされているような数値の重みで結び付けられているという事実は確認されていない¹⁷。あるいはより正確には人工的なニューロンの組み合わせで、たとえばそこに「入力層」、「隠れ層」、「出力層」という多層構造を組み込みことで脳の活動が再現できるというのはあくまでも仮説である。

仮にこのような仮説・前提が正しいのだとしても、身体の構造と深く関わる脳のネットワークという空間的配置（ここにはLibetの議論を参考にすれば時間的な問題もからんでくる）あるいはそれを人工的に模した擬似身体的空間構造が人工的ニューラルネットワークやAIの「意味」の中に入り込むという事態もここでは生じている。人工的ニューラルネットワークやAIはその背後に様々な仮説、「先入見」をもつものなのである。

そのような意味でここにあるのはこのような複合的な事態あるいは構造的な（存在論・存在的な）カップリング、事実的な問いと存在論的な問いの融合・矛盾とでもいうべき状況である。

ハイデガーに再度立ち戻ってこの複合的な現象の内実をさらに眺めてみよう。

15 「ブラックボックス化」というのはコネクショニズムに関する議論を忠実に追えばたぶん正しくない言い方なのだろう。

16 「意味」もそうかということはいえなかつないが。

17 そもそもそれは確認のしようがないことである。

ここで問題になるのは、旧来の（つまりコンピュータ技術、デジタル技術もなかった時代の）現象論や存在論の図式で現代の状況をどう読み取ることができるのか、あるいはさらにオルタナティブな議論¹⁸の論点をどう展開させていくかという点である。

このことは、実際たとえば、ラマチャンドランRamachandran の「ミラーボックス」の応用形であるヴァーチャル・リアリティ技術を使ったヴァーチャルな世界での仮想身体運動の体験の事例を考えてみれば問題の具体的射程が明らかになる。

マンチェスター大学の研究グループはある興味深い実験を行った。これは幻影肢の痛み悩む英国在住の男性を対象にして、ヴァーチャルな世界で幻影肢（つまりないはずの手）でボールを掴むという仮想身体運動をさせて幻影肢の痛みがどのように変化するか確かめようとした実験である。ヴァーチャルな世界で幻影肢を掴むという仮想体験をしている時、実際には幻影肢そのものはボールを掴むという行為をしていないのは明らかである。「現実」の世界で自分の手はボールを掴んではおらず、ヴァーチャルな世界の中に立ち現れている幻影肢を動かすためのスティック状のものを掴んでいる。この時、スティック状のものを掴んだ「現実」の手の動きとヴァーチャルな世界での幻影肢の動きが「連動」するのだが¹⁹、この状態がある程度継続するうちに幻影肢の痛みが軽減する²⁰。

ハイデガーのことは使えばこの現象は一体「存在的」なのか「存在論的」なのか。

たしかに「存在的」なのか「存在論的」という問いかけをすれば、モノの領域に属するITやデジタル情報技術、それに依拠する人工知能やロボットは、「存在論的」な問題に関わることはできない。これは明らかである。別のところでも語ったように、IT自体は永遠に意味的な問い、「存在論的」な問いに答えることができない。ITにできるのは、結局は計算だとか、アナログ情報のデジタル情報への転換だとか、事実に意味的な問い、せいぜい意味的な問いのごく一部を効率良く行うための補助作業をすることでしかない。意味的な問いとは人間の生死やモラル、罪や良心、気分、気遣い、不安、願望、欲求といったものと深く関る問いのごく一部であった。コンピュータにはそうした人間的な問いは永遠に無縁のものなのだ。

しかし、一方で、ITやデジタル情報技術は、ヴァーチャルな世界での幻影肢の仮想的な身体運動の事例のように、「存在的な問い」の領域だと思われていたものが「存在論的な問い」の領域であるかもしれないということをわれわれに教えてくれる。少なくとも、「現前」か「非現前」という2項対立的な問いではある種の問題はつかめないことはヴァーチャルな世界での幻影肢の仮想的な身体運動の事例を見れば明らかなのである。しかもそれを可能にしたのは、ITやデジタル情報技術そのものである。

18 潜在的に＝技術還元論的な図式を乗り越える視座を提供しうる可能性がある議論。

19 しかしあくまでも「現実」の手はスティック状のものを掴んでいるのであり、ヴァーチャルな世界での幻影肢はボールを掴んでいる。

20 マンチェスター大学・応用インターフェイスグループThe Advanced Interfaces Group (The University of Manchester) の実験報告書参照。(http://aig.cs.man.ac.uk/research/phantomlimb/phantomlimb.php) (2014年1月12日アクセス)。また、2010年10月28日付けNational Geographical Newsの記事Phantom-Limb Pain Eased With Virtual Reality参照。(http://news.nationalgeographic.com/news/2007/01/070118-phantom-limb_2.html) (2014年1月12日アクセス)。

幻影肢の現象をよく観察してみれば、痛みや痛みにかかわる身体像の知覚、あるいは身体像の残像の記憶という「事実的な現象」の中に指向性、期待、メタファー的なものが入り込んでいて、これが視覚と触覚をつないでいるということもわかる。事実的な問いにかかわる現象を観察したらそこに存在論的な問いが入り込んでいるのがわかったというようにも言える。

「運動主体感」sense of agency に関しても、同様に、身体運動やその知覚、意図や意思、主体のありかという「事実的な問い」を観察すると、「事実的な問い」と「事実的な問いをこえる問い」との双方がそこに関わっているという状況が見えてくる。

Synofzikら(2008)によれば、「運動主体感」の成立の帰属にかかわるメカニズムは、基盤的な機制と上位機制の二層構造をなしている。遠心性情報ないし(および)その予測と求心性情報・実際の感覚・知覚レベルの照合・フィードバックが基盤的なものであり、conceptual level of judgment of agencyと呼ばれる上位機制は、コンテクスト、意図、信念などを「運動主体感」と結びつけようとする機制のことである(Synofzik et al. 2008)。

つまりSynofzikらのいうmultifactorial weighting process of different agency indicatorsとは、わかりやすくいえば、「事実的な問い」は「ありえたこと」、「ありうること」の意識と接続しているということではないか。

リベット Benjamin Libetの研究は批判もあるがこの点を考えるうえで興味深い。精神医学者の内海健の議論に基づきながらLibetの研究内容を読み解くと、そこから理解されるのは、脳はモノの世界と心の世界を媒介するものであるが、その媒介のプロセスは、二種類の時間のずれという現象をとおして行なわれるということである。

リベットが行ったのは、われわれが身体などに刺激を受けたとき、身体の刺激を意識・自覚するには、刺激が0.5秒続く必要があるということである。しかも、刺激の開始を受けてから0.5秒後にその刺激を自覚するのだが、われわれは刺激直後にその刺激を感じたと主観的には感じている。しかし、脳に障害を受けると、この主観的な時間の遡及的な修正が不可能になり、刺激開始の時間を「正確」に「認識するしかない」という事態が生じる。たとえば、右脳に脳卒中による損傷を受けた患者は、左右両方の手に同時に刺激(皮膚への刺激)を受けているにもかかわらず、左手への刺激が右手より0.5秒遅いと感じるという。

内海の興味深い解釈はこのリベットの報告、脳による時間意識の「繰り上げ(antedating)」機能に関して行なわれるのだが、内海はこの「(時間意識)の繰り上げ」仮説ないし「知覚の時間遡行的対応づけ」仮説に関して、「意識はあたかも時刻を繰り上げたかのように自然に接続する」と述べる。さらに、「この<かのようにals ob>の紙一重が<自己>のありか」であり、この時間的差異、遅れという落差こそ、自己が自己であることができる根拠なのだという(内海2007)。

ここでもやはり「事実に関する問い」を通じて「存在」に関する重要な状況が見えてきている、そういうことが言えるのではないか。

IV. 情報社会における「深み」の回復ないし新たな創発・モノと人の相互浸透

いままで述べてきたことは多様な問題に関わることで一見こうしたばらばらな現象を語ることがどのような意味をもつかわからなくなるということがあるかもしれない。本稿のそもそもの目的が情報化社会（論）に深みを取り戻すことにあるのだから現時点ではこうした多様な論点を含むかたちでの考察はやむをえない、あるいは必要だとも言える。ただ深みのある情報社会ないし深みのある脱情報社会とはどのようなものであるかという当然予想される問いかけには真摯に答える（答えようとする）姿勢を保っておくことは必要であろう。このことは筆者のこれまでの関連論文全体に関わる課題でもあるのだが、他で論じたことを繰り返すことをいとわずここで再度論じてみたい。（もとより許された紙幅の範囲内という条件の中でのことではあるが。）

一つはたとえば、モノ（機械、事物、知覚の対象など）に関わる現象と人に関わる現象の相互浸透性について深く検討することであろう。これについては本稿でもすでに一部とりあげたが、ここで再度別のかたちでとりあげたい。

そもそも情報社会におけるモノ（事物、ICT、ロボットも含む）はそれが純粹に技術的な問題の領域に属するものであるように見えても、実はそれは（多くの場合）人間の側の経験・判断などと切り離すことができないものである。

その典型が近年「猫」を認識したと話題になっているGoogleとスタンフォード大学共同開発のネットワーク型コンピュータ（ディープラーニング学習機械）である。

「いまや脳の視覚野には、サイバネティックな“いところ”がいる。・・・秘密に包まれたGoogle X ラボ（・・・）に置かれている16,000のプロセッサと10億ものコネクションによるネットワークのことである。この人工頭脳は、ひとたびインターネットに接続して、YouTubeからランダムに選ばれた無数の画像を山のように供給されると、非常に特殊なことを行い始めた（・・・）。自動学習のプロセスを通して、猫を認識することを学習したのだ。人工頭脳の父であるアラン・チューリングの生誕から100年にして、機械も独習ができることを証明した²¹」

wired newsではこのようなかたちでこのことが科学・情報技術史上画期的な出来事であるかのように取り上げられている。しかし実際には（基本的には）これは1980年代（あるいはある意味では1950年代）に登場したコネクショニズム的ニューラルネットワーク型人工知能・人工学習機械の延長線上にあるものである。

機械の情報処理能力のアップや「スパース・コーディング（Sparse Coding）」と呼ばれる手法の開発・取り入れなどでニューラルネットワークの構造の改良が可能になり、いままで以上に機械学習のさまざまな領域での適用が可能になった（あるいは可能になるかもしれない）ということで2000年代に入ってニューラルネットワーク研究はさらに注目されるようになっていく。しかし21世紀のニューラルネットワーク研究も肝心な点ではそれ以前のニューラルネットを継承しているという点を見落としてはならない。

そもそも1980年代のコネクショニズム的ニューラルネットはそれ以前の人工知能（古典的計

21 wired news（2012年7月6日付け）（<http://wired.jp/2012/07/06/google-recognizes-kittens/>）

算主義や古典的記号主義と呼ばれるもの)と違って人間が機械をトレーニングするものであった。このトレーニングによる学習のプロセスはネットワークの構造をもったモノの配列の中に蓄えられており、この学習成果はある程度応用がきくものである。たとえばいわゆるエルマンネットの事例では(Elman 1990)、文例の学習から学習していない文法項目まで機械が理解できるようになったという報告がされている。例えば学習を終えたエルマンネットは、boyが提示されると、関係代名詞who もしくは単数を主語とする動詞が次に来ることを予測できるようになる(関連するユニットの活性化がそのことを示す)。また複数形を主語とするsの付かない動詞や他の名詞が次にこないことも予測できる(浅川 2009)。

ここで大事な点は、この場合いわゆる文法知識は「ネットワークの結合係数の大きさとして表象されている」(浅川 2009)のであり、「明示的な書き換え規則のようなルールは全く与えられていない」という点である。しかるにこのネットワークは文例を示され、「単純に次の単語を予測するだけしか行っていない」(学習の準備として)にもかかわらず文法的な予測ができるようになる(浅川 2009)。

そもそもこのような学習がなぜ可能になるのか、文法を学んでいないのになぜ文法にあった予測ができるのか。筆者の知るかぎり、コネクショニズム的ニューラルネットの研究者やエルマンネットの研究者の中で正面からこの点に答えている人はだれもない²²。しかしここで重要な点は、コネクショニズム的ニューラルネットやエルマンネットの学習には人間の経験や判断が欠かせないという根本的な点である。ある文が真か偽かを教えるのは人間であり、機械が予測・作成した文章を理解し判断するのも人間である。この一点ははずせない点である。

その意味ではこの点こそまさにモノ(機械、事物、知覚の対象など)に関わる現象と人に関わる現象の相互浸透性そのものである。モノ(機械、事物、知覚の対象など)に関わる現象と人に関わる現象の相互浸透性あるいはある種の対称性が、いくつかの仮説、つまり機械や物質としての脳に関する仮説(「脳を模した人工的ネットワーク構造の中で文法の理解・学習は進んでいる」など)や人間に関する仮説(「文法獲得が生得的である」、「文法学習は後天的である」、「文法学習は生得的、後天的どちらでもなく、その折衷である」など)をともなって(潜在的・顕在的に)われわれの前に立ち現れているのである。

筆者の考えでは、この問題にさらに深く関わるためには、モノの世界と心の世界の対称性、それをつなぐある種の表現・メタファーのありかた、あるいはモノの世界を人間が経験として理解しあるいは何らかの操作性の中におくために必要な表現・記述方法のありかたについて踏み込む必要がある。またこれはニューラルネットに関わる場合だけでなく、ロボットの問題などに関してもあてはまる課題・論点でもあるはずだ。たとえば、ロボットのwalk、run、kickという身体運動のパターンを隠れマルコフモデルを用いて抽象化し、「原始シンボル空間状の状態点X」として表わそうとする稲邑哲也らの試み(稲邑他 2003)などは上記の論点から考えると一つの重要な検討材料であろう。

22 難しいから答えないのか、ニューラルネットの実用化という点ではそのような問いに答えることは必要ないということなのかその点もよくわからない。

ここにはモノ（機械、事物、知覚の対象など）に関わる現象と人に関わる現象の相互浸透性やロボットの身体運動と人間の身体運動の「(工学的) シンボル」を介しての相互連関という重要な問題について深く検討するための別の手掛かりが顔をのぞかせているようにも思える。(ただこの問題にはここではもうこれ以上深く踏み込まない。紙幅の関係もあるのでこの点についての検討は次の機会にゆずることにする。)

V. 情報社会と「世間・運命観」

続いて以下では情報社会あるいはわれわれが生きているこの世界に「深さ」の視点を取り戻すための作業を別の形で進めてみよう。ただし別の作業とはいってもやはりこの世界に多様性を取り戻す試みの一環としてこれは行われるのであり、そこで論点になるのはここでもたとえば「存在論」、「存在」ということば・用語に関わる問題である。

以下筆者が2014年に行った調査の結果の概要を紹介したい。これは本稿の狙いである「深みのある情報社会（論）（再）構築」のためのさらなる試みであるとも言える²³。

このような「深み」に関わる視点を回復する試みとしては、筆者がこれまでてがけてきた「日本的価値観」の研究などをここで紹介する必要があるだろう。これは存在論的レベルでの意味の連関をつかむ、世界の深みを理解するための試みに関する研究の一例でもある。

筆者は1981年岩手県大船渡市で行なった「大船渡調査」を皮切りに（これは日本における天譴論や運命論に関する本格的意識調査の出発点になった調査である）一連の「天譴論」、「運命論」、「自然観」など「世間・運命」図式または「世間・運命観」（これは筆者自身の命名である）と呼ばれる価値観・世界観・人生観に関する調査を実施してきたが、こうした調査の結果、日本に生きる人々の心の中には20世紀や21世紀になっても伝統的な価値意識・ものの見方が存在しているということが繰り返し明らかになった。このことだけでも驚くべきことであるが、さらに驚くべきことには、こうした一見非合理的で前近代的な意識が逆に高い防災意識やあるいは政治関心につながるなど「前向きな意識」という側面を同時にもっているということも明らかになったのである²⁴。

以下で紹介する知見は筆者が2014年に実施した調査の結果に関わるものだが、これも過去の一連の調査同様「世間・運命観」を中心的なテーマに据えたものである。

この調査（2014S調査）は2014年の6月に大学生²⁵を対象にして実施した調査であるが、調査に使った項目は筆者が過去何度も行った調査の知見を踏まえて選択したものである。

この調査では筆者が過去に実施した調査のデータ・知見を参考にしつつ、「世間・運命観」に関する項目を調査票に含め、調査対象者にそれぞれの項目に対してどう考えるか4点尺度で答え

23 以下で試みるのは、複合的な現象を相互に取り結ぶ視点のありかを探ることであり、それによって世界の中にもともとあるはずの深みについてとらえるための視点を取り戻す試みである。本稿自体がその試みのもとで執筆されているというのとはもとよりあらためて論ずるまでもない。

24 「大船渡調査」に関しては以下の論文を参照のこと。仲田誠 1982 「災害と日本人」。廣井脩・仲田誠（他4名省略）1982 『災害常襲地域における住民の“災害観”に関する調査報告』。

25 筑波大学、東洋大学の学生362名が調査対象。

表 2-1 「世間・運命観」因子 (2014S調査)

因子	寄与率が高い変数
世間・運命 1 (誠実・間人・運命)	「人のためにつくせばいつかは自分にプラスとなってかえってくるものだ」 「どんな人とも、誠意をもって接すれば心が通じるものだ」 「人間には何らかのかたちで運命というものがある」
世間・運命 2 (清貧・自然)	「人間は豊かになりすぎると墮落しがちなものだ」 「現代生活の中で人間はあまりにも自然からはなれ過ぎてしまっている」
世間・運命 3 (無力感・自己中心主義批判)	「今の世の中では一人一人の人間はあまりにも無力である」 「今の日本には自己中心的な人間が多すぎる」

1) 3 因子の累積負荷量は26.270% 2) 固有値が 1 以上の 3 因子を採用

表 2-2 「供犠関連意識」と「世間・運命観」、「ロボット観」との相関性 (2014S)

	被害者・家族の姿	はかないものの美しさ	自己犠牲と人生	孤独死
世間・運命 1 (誠実・間人・運命)	.329**	.163**	.309**	.353**
世間・運命 2 (清貧・自然)	.127*	.201**	.243**	.169**
世間・運命 3 (無力感・自己中心主義批判)	.109*	.015	.078	.041
ロボット 2 (人工生命体への共感)	.071	.201**	.226**	.192**
ロボット 3 (ロボット利用批判)	.213**	.089	.336**	.221**

1) **= $p<0.01$, *= $p<0.05$ (両側)

2) 「被害者・家族の姿」は「交通事故の現場などに花束が供えてあると被害者や被害者の家族の姿がはつきりと脳裏に浮かぶ」の略。同様に「はかないものの美しさ」、「自己犠牲と人生」、「孤独死」はそれぞれ次の意見・考え方への共感度で測定。「夏の花火やホテルなどははかないから美しいのだと思うたりすることがある」、「災害などで自分を犠牲にして他人を助けた人の話を聞くと自分も人生を大切にしたいと思うたりする」、「新聞等でたとえ「孤独死」と言われようと、それぞれの人生にはかけがえのない意味があったはずだと思ったりする」。

3) 「ロボット因子」はロボットがもつ社会的・倫理的問題に対する調査対象者の回答を因子分析（主成分分析、バリマックス回転）して得たもの。

てもらった。その回答（の数値）を因子分析（主因子法、バリマックス回転）にかけて分析すると表 2-1 の 3 因子を得ることができた。

この 3 つの「世間・運命観」に関する因子は、過去の関連調査の分析結果では、政治関心度や企業倫理あるいは情報倫理、公共性の意識、プライバシー観やロボット倫理などさまざまな問題

や現象、それに関する意識・意見と有意な相関性をもつことが明らかになっているが²⁶、今回の調査ではこの点を踏まえた上で、ある種の「深い」社会・間主観的意識との関連性をみてみた。具体的には、これは表2-2の注に示したような「供儀」を含む日本の美意識・世界観・倫理意識のことである。以下これを「供儀関連意識」と暫定的に呼ぶことにする。

すでに述べたように過去の筆者の関連調査で、「世間・運命観」に関する因子は政治関心度や企業倫理、情報倫理、公共性の意識、プライバシー観やロボット倫理などといわば意味のネットワークといったようなものを作っていることが明らかになっているのだが、今回の調査では表2-2の数字が示すように、「供儀関連意識」が「世間・運命観」と関連していることがわかった。さらに同じ表の数値が示すように、「供儀」は「ロボット観・ロボット倫理」とも関連するのである。

これ以前の各節とのつながりでいえば、少なくとも日本社会の構造がこのような意味のセットと深く連関している以上、情報化をめぐる問題も「複合的な問題」にならざるをえないということが言えるのである。このことから情報社会をめぐる諸問題は（少なくともその一部は）「存在論」、「実存」、「人生観」など「深さ」のネットワークを形成していることがうかがえるのである。

以上情報社会に「深さ」を取り戻すための試み・考察を多岐におよぶ問題に関しておこなってきたが、今後はこのような考察・議論を踏まえた上で具体的に情報社会にどのようにこのような「深さ」に関する機制を「実装」するか（工学的に言えば）が課題になる。経済成長の速度を促進するなどというのはなかなか筆者個人の手におえる作業ではないが、モノと人の領域の事象の相互浸透など、少なくとも技術還元論的な情報社会を乗り越えるための視点は確保されつつあるように思えるのである。いずれにしても「情報社会」は本来「複合的な現象」であることは明らかであり、本稿でもこの「複合性」に関するさまざまな論点を質的量的な分析を進めつつ、さまざまな角度から検討してきたのである。

文 献

- 浅川伸一 2009「2009年度開講早稲田大学大学院文学研究科心理学特論4 講義録」。
- 稲呂哲也・谷江博昭・中村仁彦 2003「運動パターンの認識 生成の単一モデルとそれにもとづく離散
的階層化による行動知能の集積」『第17回人工知能学会論文集』。
- 内海健 2007「内破する自己 統合失調症のメタサイコロジー」『臨床精神医学』36 (1), 11-23頁。
- 井上美美・相模健人 2005「大学生における自己開示傾向とハーディネス性格特性の関連についての研究」『愛媛大学教育学部紀要』第52巻第1号, 89-96頁。
- 総務省 2011 2012『情報通信白書』。
- 仲田誠 1982「災害と日本人」『年報社会心理学（日本社会心理学会）』第23号, 171-186頁。
- 仲田誠 1993『情報社会の病理学』砂書房。

26 過去の調査でも今回の場合と同じような内容の因子が繰り返し得られている。

- 廣井脩・仲田誠 他 1982『災害常襲地域における住民の“災害観”に関する調査報告』東京大学新聞研究所研究報告書, 全118頁。
- Capurro, Rafael 1988 “Martin Heidegger”, (<http://www.capurro.de/heidegger.htm>), Zuersterschienen, in Volpi, F. und J. Nida-Rümelin, (Hrsg.) 1988 *Lexikon der Philosophischen Werke*, Stuttgart: Kröner.
- Elman, J. L. 1990 “Finding Structure in Time”, *Cognitive Science*, vol.14, pp. 179-211.
- Kobasa, S. C. 1979 “Stressful life events, personality, and health-Inquiry into hardiness”, *Journal of Personality and Social Psychology* 37 (1), pp.1-11.
- Kobasa, S. C. 1982 “The hardy Personality:Toward a social psychology of stress and health”, in Sanders G. S. and J. Suls (eds.) *Social Psychology of health and illness*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, pp.3 -32.
- Michael, Gelven 1970 *A Commentary on Heidegger's “Being and Time”*, Harper & Row マイケル・ゲルヴェン (長谷川西涯訳) 2000『ハイデッガー『存在と時間』註解』, ちくま学芸文庫。
- Peter, Golding 1998 “Global Village or Cultural Pillage?:The Unequal Inheritance of the Communications Revolution”, in Robert W. McChesney, Ellen Meiksins Wood and John Bellamy Foster (eds.), *Capitalism and The Information Age; The Political Economy of the Global Communication Revolution*, N.Y.: Monthly Review Press, pp.19-86.
- Synofzik, M., Vosgerau, G. and A. Newen 2008 “Beyond the comparator model: A multi-factorial two-step account of agency”, *Consciousness and Cognition* 17 (1), pp.219-239.

謝 辞

Acknowledgement

国際地域研究専攻の刊行物である「筑波大学地域研究」第36号を皆様にお届けできることを嬉しく思います。本専攻を温かくご支援下さった査読者、教員、関係者の皆様に心から感謝いたします。掲載された論文は研究分野に従って並べられております。それぞれの論文が学術研究及び教育に大きく貢献するものと思います。

I am very pleased to have the opportunity to present you with Volume 36 of the academic journal for our master's program entitled "*AREA STUDIES Tsukuba*". I would like to extend my sincere appreciation for the kind support from the reviewers, faculty members, and people who have been cooperating in making our program successful over this past year. We believe that the scope of papers presented in this volume, which is arranged by research area, will make strong contributions to academic research and education.

国際地域研究専攻長

首藤 もと子

Chair of Master's Program in International Area Studies

Motoko SHUTO

紀要『筑波大学地域研究』 投稿規定

- ①本誌への投稿資格を有する者は、当専攻の教員（専任・兼任の別を問わず。元教員も可）、研究員、修了生、旧・地域研究研究科の元教員、修了生です。ただし、修了生の投稿には、教員の推薦を必要とします。
- ②投稿の内容は、地域研究に寄与するものとします。
- ③投稿を希望する方は、事前に行う投稿募集にエントリーし、投稿が認められた場合には、別に定められたスケジュールに従って原稿を提出してください。
- ④投稿原稿は、査読制度を通じて選定の上、採否を決定します。
- ⑤使用言語は日本語もしくは英語としますが、それ以外の言語での投稿を希望する場合は、予め編集委員会へ問い合わせてください。
- ⑥投稿原稿の長さは、43字36行A4版にて、タイトル・注・参考文献・図表等を含め、和文・欧文ともに20枚を上限とします。
- ⑦詳細な投稿規定については、編集委員会にお問い合わせ下さい。

『筑波大学地域研究』 36

編集委員	崔 宰英 津城 寛文 堤 純 許 明子 津田 博司 村上 宏昭 毛利 亜樹 長谷川 悟郎 花坂 哲
発行	平成27年3月31日
発行者	筑波大学人文社会科学部研究科 国際地域研究専攻
代表	首藤 もと子
連絡先	〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1 Tel. 029-853-4593
印刷所	〒111-0032 第一印刷株式会社 東京都台東区浅草4-48-12 Tel. 03-5808-1955(代)



筑波大学大学院
人文社会科学部研究科 博士前期課程
国際地域研究専攻

Master's Program in International Area Studies